

第75回日米学生会議

日本側報告書

第75回日米学生会議
日本側実行委員会

実行委員長挨拶

2022年8月26日、第74回JASCが終了し、成田空港に到着してすぐに、第75回JASC日本側実行委員メンバー全員で集まり、今後について話し込んだことをよく覚えています。

3週間にわたる会議に、時差、10時間を超えるフライトがのしかかって、疲労困憊の状態だったと思うのですが、第75回会議を成功させることへの希望に満ちていました。

「75回目を迎えるJASCには、どのような意義が見出せるか？」
「ゴールを達成するために、どのような手段をとるか？」
「どのようなメンバーを迎え入れたいか？」

第75回JASCの根幹について議論している当時は、形容しようのない高揚感を実行委員で共有できていました。

ただ、当然ながら、議論を重ねるごとに、メンバーのストレスは蓄積していきました。その中、一人の実行委員が、次の言葉を放ったのです。

「こんなに否定しかされないのなら、もう、何も言えないよ。。」

企画段階でメンバーのアイデアが対立し、中々折衷案も見出せず、平行線を辿るばかりの実行委員会会議中でした。当時はもう、午前3時を回っていました。あまりにも合意形成が取れないため、意図せず、メンバーへの配慮に欠けた発言が度々みられていたことが原因でした。

一難去ってまた一難、さまざま場面で、実行委員は衝突してきました。比較的寛容だと自負していた私自身も、いとも簡単にメンバーの居心地を悪くしてしまうのだと、何度も痛感しました。

しかし、実行委員は、第75回JASCを、心の底から大切にしたからこそ、この苦難を乗り越えたのです。

「価値の再考、未来への思索」

～Foundations～

Laying the Groundwork for Bilateral Reflection and Reimagination

「過去→現在→未来」という時の流れから学び、体験し、それを基に学生同士で如何にして価値観を共有するか。また、最終的にはグローバルリーダーとして日米の未来創造と発展に資する人材を輩出することを目指し、作成した当会議の総合テーマです。

実行委員は、必ず、メンバー全員に、この総合テーマに基づいてデザインされた企画を通じ、活動して欲しかったのです。これは私の原動力でもありました。

「皆様、**素晴らしい会議**が、実行できました！」

この言葉に、なんのためらいも、ございません。

そして、なぜ私がそう思えたのかは、本報告書の次頁以降に記されている苦悩と成長の記録をご覧に入れば、お分かりいただけるでしょう。

メンバーは会議を通じ、異なる文化や言葉、習慣等の差異を越えた友情を築き、確固たる心の繋がりを認識しました。また、その心の繋がりが支えるチームワークを活用し、積極的な社会発信・還元活動も実施してまいりました。当然ながら、メンバーの旅路は、今後も続きます。

最後に、第75回日米学生会議の素晴らしい伴走者となってくださった国際教育振興会、ISC Inc.、JASC同窓会、各開催地関係者の皆様。右も左も分からない私共へ、度重なるご助言を賜

りまして、誠に有難うございました。後援団体、財団、企業、ご協力いただいた全ての皆様におかれましても、当会議を支えてくださり、誠に有難うございました。

第75回日米学生会議本会議は、2023年8月26日をもちまして、終了いたしましたことを、ここにご報告申し上げます。

第75回日米学生会議
日本側実行委員長

久野 賢登

目次

実行委員長挨拶	1
本文中の略語説明	4
第一章 日米学生会議概要	7
第二章 第75回日米学生会議概要	10
会議概要	11
広報戦略	20
第三章 事前/事後研修	23
春合宿	24
安全保障研修	28
台湾自主研修	31
直前研修	38
福島自主研修	40
第四章 勉強会	42
台湾勉強会	43
内閣官房デジタル田園都市国家構想実現会議事務局勉強会	44
菽中三十二先生との勉強会	45
国土交通省都市局都市政策課 スマートシティ官民連携プラットフォーム事務局勉強会	46
東京ポートシティ竹芝視察	48
KPMG Ignition Tokyo訪問	49
防衛研究所勉強会	50
KPMGコンサルティング株式会社馬場功一様との勉強会	51
三菱商事事前勉強会	52
第五章 本会議	53
第1サイト：京都	54
第2サイト：長崎	73
第3サイト：東京	88
第六章 分科会	110
文化と芸術分科会	111
環境と科学技術分科会	117
国際政治と日米関係分科会	124

法と道徳分科会	132
言葉と哲学分科会	140
社会階層と多様性分科会	147
持続可能なビジネス分科会	155
第七章 後援・協賛・賛助・共催・協力	163
第八章 実行委員のあとがき	173

本文中の略語説明

略語	説明
JASC	日米学生会議 (Japan-America Student Conference)
JASCer	日米学生会議現役参加者及び過去参加者
デリ	参加者 (Delegate)
ジャバデリ	日本側参加者 (Japa-Deli)
アメデリ	アメリカ側参加者 (Ame-Deli)
EC	実行委員 (Executive Committee)
JEC	日本側実行委員 (Japanese Executive Committee)
AEC	アメリカ側実行委員 (American Executive Committee)
IEC	日本側主催団体：国際教育振興会 (International Education Center)
ISC	アメリカ側主催団体：International Student Conferences, Inc.
アラムナイ	日米学生会議 過去参加者 (Alumni)
サイト	本会議中に訪れる地域
FT	分科会の研究テーマについての理解を深めるため、政府機関、国際機関、企業、大学、NGO、NPO及び研究所などへ訪問研修 (Field Trip)
RT	分科会 (Round Table)
文化/Cultart	文化と芸術分科会～文化により形成される認識とその影響～ Culture and Arts RT: Perceptions, Cultural Expression, and Relationships
環境/Envtech	環境と科学技術分科会～環境と科学技術、その関係性を模索する～ Environment and Technology RT: Dualities, Synergies, & Apopenia
国際政治/IP	国際政治と日米関係分科会～グローバル社会における機会と課題～ International Politics and the US-Japan Relationship RT: Opportunities and Challenges in the Global Community
法と道/Law	法と道徳分科会～今ある価値を疑い、社会を捉えなおす～ Law and Morality RT: Legitimacy, Loopholes, and Humanity
言葉と哲学 /Linphi	言葉と哲学分科会～愛・友情・信頼、あらゆる関係の基盤を批判的思考で捉える～ Linguistics and Philosophy RT: Love, Friendship, and Trust—thinking critically about the foundation of human relationships
社会階層/Social Class	社会階層と多様性分科会～規範の批判と変容～ Social Class and Diversity RT: Critical Understandings and Transformations of Normative Values
ビジネス/Susbus	持続可能なビジネス分科会～21世紀の革新～ Sustainable Business RT: Understanding Investment and Innovation for the 21st century

第一章 日米学生会議概要

＜日米学生会議とは＞

日米学生会議は「世界の平和は太平洋の平和にあり、太平洋の平和は日米間の平和にある。学生もその一翼を担うべきである。」という理念のもと、満州事変を契機に悪化していた日米関係を憂慮した4人の日本人学生により1934年に創設された80有余年の歴史を持つ国際学生交流プログラムである。

会議の本懐は、会議終了後も続く、生涯にわたる友情、信頼関係を構築することであり、歴史を通してその会議の形態は変化をしつつも、日米両国の学生の相互理解に寄与してきた。この草の根の交流を通し、日米両国のみならず世界の平和実現のために各分野で活躍している。

＜日米学生会議の歴史＞

1934年～1940年 初期の日米学生会議

日米学生会議は1934年、満州事変以降悪化しつつあった日米関係を憂慮した日本の学生有志により創設された。米国の対日感情改善、日米相互の信頼関係回復が急務であるという認識の下、「世界の平和は太平洋の平和にあり、太平洋の平和は日米間の平和にある。その一翼を学生も担うべきである」という理念が掲げられた。当時の日本政府の意思と能力の限界を感じた学生有志は、全国の大学の英語研究部、国際問題研究部からなる日本英語学生協会（国際学生協会の前身）を母体として、自ら先頭となって準備活動を進めていった。資金、運営面で多くの困難を抱えながらも4名の学生使節団が渡米し全米各地の大学を訪問して参加者を募り、総勢99名の米国代表を伴って帰国した。こうして第1回日米学生会議は青山学院で開催され、会議終了後には満州国（当時）への視察研修旅行も実施されるに至った。日本側の努力と熱意に感銘したアメリカ側参加者の申し出によって、翌年第2回日米学生会議が米国オレゴン州ポートランドのリードカレッジで開催され、以後1940年の第7回会議まで日米両国で毎年交互に開催された。しかし、太平洋戦争勃発に伴い、日米学生会議の活動も中断を余儀なくされた。

1947年～1954年 戦後の日米学生会議

戦争の終結によって会議は再開を見たものの、戦前とは異なり、1953年までは日本のみでの開催となった。翌1954年、戦後初の米国開催として第15回日米学生会議がコーネル大学で開催されたが、その後、資金問題、日本人学生の参加者の不足、米国における財政援助の中断などに悩まされ、会議は1955年から1963年まで再び中断された。

1964年～今日の日米学生会議

1964年、OB/OGからの会議再開を望む声に応え、会議創始者の一人である故板橋並治が理事長を務める一般財団法人国際教育振興会の全面的支援の下に、会議が再開された。第16回会議はリード

第一章 日米学生会議概要

カレッジで開催され、77名の日本人学生と62名の米国人学生が参加した。1973年の第25回会議では、限られた日程の中での議論をより効率的かつ集中的に行うために、毎回テーマを設定し、期間を一ヵ月とするなど現在の会議の基本形態が整備された。89年の歴史を持つこの会議において、最も意義のあることは、創設以来、その企画、運営を両国の学生が主体的に行っていることである。しかし創設時と今日で日米両国を取り巻く環境は大きく異なっており、会議の形態自体も変化を重ねている。特に新型コロナウイルスの流行により社会が根本から変わる機会となった2020年は会議創始以来、初となるオンライン開催となった。画面越しに白熱した議論が行われ、会議の灯を次の世代へ繋いだ。これらを踏まえ日米両国が新たな関係の構築を迫られている現代において、日米学生会議は、創設当時の理念を受け継ぎつつ、時代の変化に対応してゆく柔軟性を求められているといえよう。

第二章 第75回日米学生会議概要

第75回会議概要

【総合テーマ】

Foundations : Laying the Groundwork for Bilateral Reflection and Reimagination

～価値の再考・未来への思索～

現代社会が直面している多様な課題と変化に対応し、未来への持続可能な道を探求する必要性に基づいて定めた。第75回日米学生会議の活動では、京都→長崎→東京の順にプログラムを実施する。これは学生に過去の歴史から学び、現在を深く理解し、未来を共に創造するための機会を享受する重要な流れである。

まず、京都では日本の豊かな歴史文化を体験することで、過去に根差した価値観や伝統が、現代社会においても重要な役割を果たしていることを本質的に理解する。それは現代の価値観を再考する上で不可欠であろう。

続いて、長崎では過去の悲劇からの学びと平和の重要性を強調する。原爆の惨事から、核兵器の脅威と平和に関する深い議論を促す。また、国際関係における外交の役割と、対話を通じた紛争解決の重要性についても重要な開催地である。これらの経験は、過去の過ちから学び、未来に向けた平和と共存の道を模索するうえで、学生たちにとって重要な橋渡しとなり得る。

最後に、未来を意識した東京でのプログラムは、過去と現在の学びを基に、明るい未来を共に創造するためのビジョンを形成する機会となるよう設計する。科学技術の進展、社会の変化、環境問題など、現代社会が直面している課題に対し、持続可能な解決策を考えることは、次世代のリーダーたる学生にとって重要な責任だ。この過程で、異なる背景を持つ学生たちの交流を通じた新たな価値観の形成と、未来への共同の思索を促進する。

以上より、「価値の再考・未来への思索」は、歴史の教訓を生かし、現代の課題に対処し、より良い未来を目指すため、実行委員により方針として設定した。

【主催】

一般財団法人国際教育振興会 / International Student Conferences, Inc.

【企画 / 運営】

第75回日米学生会議実行委員会

【後援】

外務省・文部科学省・在日米国大使館・一般社団法人日米協会

【開催期間】

事業実施期間：2023年4月1日(土)～2024年3月31日(日)

本会議開催期間：2023年8月2日(水)～2023年8月26日(土)

【参加者】

日本側：36名（実行委員8名を含む）

アメリカ側：35名（実行委員8名を含む）

計 71名

【開催地、日程】

第1開催地：京都 8月2日(水)～11日(金)

第2開催地：長崎 8月11日(金)～17日(木)

第3開催地：東京 8月17日(木)～26日(土)

【日本側実行委員一覧】

(氏名、所属、担当役職、分科会)

 <p>Kuno Kento 久野 賢登 慶應義塾大学 環境情報学部 2年 実行委員長/財務/報告会/ 台湾自主研修 国際政治と日米関係</p>	 <p>Kikuchi Sora 菊池 宙 東京大学 法学部 4年 副実行委員長/広報/ 台湾自主研修 法と道徳</p>
 <p>Okada Jun 岡田 潤 高根大学 生物資源科学部 3年 広報/報告会/報告書 文化と芸術</p>	 <p>Tagashira Nazuna 田頭 奈寿菜 国際教養大学 国際教養学部 3年 広報/春合宿/直前合宿/報告書 持続可能なビジネス</p>
 <p>Tamama Yuri 玉真 優里 法政大学 人間環境学部 3年 選考/安全保障研修/直前合宿/ 報告書 社会階層と多様性</p>	 <p>Nakabo Rintaro 中坊 倫太郎 国際基督教大学 教養学部 2年 選考/春合宿/直前合宿 環境と科学技術</p>
 <p>Yamazaki Mayuka 山崎 万由佳 国際教養大学 国際教養学部 3年 選考/報告会/春合宿/ 福島自主研修 言葉と哲学</p>	 <p>Yoshizumi Homare 吉住 保希 立教大学 法学部 4年 財務/安全保障研修/ 台湾自主研修 国際政治と日米関係</p>

【アメリカ側実行委員一覧】

(Name, affiliation, position in charge, RT)

 <p>Shun Sakai Duke University Pratt School of Engineering • Department of Electrical and Computer Engineering, Department of Computer Science Chair</p>	 <p>Charles Campbell University of Virginia Department of Economics Vice Chair Sustainable Business</p>
 <p>Adam Riley University of Wisconsin-Madison School of Public Affairs Finance and Logistics Co-Chair International Politics</p>	 <p>Ashley Xia Washington and Lee University Department of East Asian Languages and Literatures/Department of Politics • The Williams School of Commerce, Economics, and Politics Recruitment Co-Chair Linguistic and Philosophy</p>
 <p>Helen Cecile Nowatka Lewis & Clark College Department of Asian Studies; Department of Chemistry; Department of Religious Studies Finance and Logistics Co-Chair Environmental Technology</p>	 <p>Krislyn Massey University of North Texas Department of International Studies • College of Liberal Arts and Social Science Recruitment Co-Chair Law and Morarity</p>



Levi Cannon

Vassar College Departments of
History & Asian Studies

JEC Liaison

Social Class and Diversity



Melody La

University of Arizona Department of
Ecology and Evolutionary Biology
(College of Science), Department of
East Asian Studies (College of
Humanities)

Publicity / Tech Chair

Culture and Art



【日本側参加者一覧】

氏名	所属	参加分科会
上保 周平	国際基督教大学 教養学部 アーツ・サイエンス学科 2年	文化と芸術
佐藤 天音	防衛大学校 人間文化学科 4年	文化と芸術
佐野 百美	早稲田大学 国際教養学部 3年	文化と芸術
志田 夏音	岡山大学 工学部 工学科 環境・社会基盤系 1年	文化と芸術
奥寺 大	名古屋大学 工学部 機械・航空宇宙工学科 2年	環境と科学技術
小金山 智弘	慶應義塾大学 環境情報学部 環境情報学科 2年	環境と科学技術
佐藤 佑樹	宇都宮大学大学院 地域創生科学研究科 博士前期課程 1年	環境と科学技術
宮本 希	国際教養大学 国際教養学部 グローバルスタディズ領域 2年	環境と科学技術
柏木 萌美	慶應義塾大学 理工学部 機械工学科 4年	国際政治
鈴木 貫正	慶應義塾大学 経済学部 1年	国際政治
童 児夢	立命館大学 Community and Regional Policy Studies 4年	国際政治
富澤 新太郎	東京大学 教養学部 理科三類 2年	国際政治
チャ ユナ	順天堂大学 医学部 医学科 4年	法と道徳
名古屋 佳那	慶應義塾大学 法学部 政治学科 2年	法と道徳
村上 太一	慶應義塾大学 法学部 法律学科 4年	法と道徳
李 文佳	慶應義塾大学 総合政策学部 総合政策学科 2年	法と道徳
石川 結菜	埼玉医科大学 医学部 3年	言葉と哲学
小林 弘典	国際基督教大学 教養学部 アーツ・サイエンス学科 2年	言葉と哲学
山本 雄翔	京都産業大学 国際関係学部 3年	言葉と哲学
渡邊 めい	京都大学 文学部 科目等履修生	言葉と哲学
荒木 太一	慶應義塾大学 経済学部 3年	社会階層

上原 賢斗	東京外国語大学 国際社会学部 3年	社会階層
バック キャスリーン 光	国際基督教大学 教養学部 アーツ・サイエンス学科 2年	社会階層
福井 達於都	慶應義塾大学 法学部 法律学科 2年	社会階層
佐々木 妙子	創価大学 経済学部 経済学科 3年	ビジネス
鈴木 涼	国際教養大学 国際教養学部 2年	ビジネス
孫 望舒	国際基督教大学 教養学部 アーツ・サイエンス学科 1年	ビジネス
山村 航	一橋大学 法学部 法律学科 4年	ビジネス

【アメリカ側参加者一覧】

Name	Affiliation	RT
Joshua Docking	Colgate University Japanese major, intended Arts + Art History minor	Culart
Kayan Tam	University of Southern California BA Art, minor in East Asian Languages and Cultures	Culart
Leeanna Hays	George Mason University Visual Arts and Technology, Graphic Design	Culart
Sampson Williford	Washington University in St. Louis Film and Media Studies, Computer Science	Culart
Elijah Collier	University of Hawaii Manoa Asian Studies	Envtech
Isabella Massarelli	Bryn Mawr College Mathematics (major), Film (minor)	Envtech
Jasmine Jones	University of Maryland Global Campus Environmental Management & Coastline Restoration	Envtech
Yi Ran (Kaitlyn) Lee	Stanford University Computer Science	Envtech

Gabrielle Izu	University of Texas at Austin International Relations and Global Studies, Certificate in Spanish Language	IP
Sam Coyle	Williams College Political Economy, Japanese	IP
Yamato Takabe	Yale University MCDB (Molecular, Cellular, Developmental Biology)	IP
Chloe Poon	University of Wisconsin-Madison human development and family studies with a certificate in gender and women's studies	Law
Jinglei (Stella) Zhang	Wesleyan University East Asian Studies, Economics	Law
Juntae Rocker	Pennsylvania State University, Main Campus - Schreyer Honors College Asian Studies, Korean; Minor: Digital Media Trends and Analytics	Law
Michael Buzzy	Central Michigan University Political Science and Philosophy Major, Certificate in Law Making and Legal Processes	Law
Benjamin Goldstein	Duke University Major: Mathematics; Minors: Music, Japanese Language	Lingphi
Henry Crespi	University of Rochester East Asian Studies	Lingphi
Seth Quinn	California Polytechnic University San Luis Obispo Philosophy Major, Geography and Anthropology Minor	Lingphi
William Sim-Oliver	University of Southern California Major in Pure Mathematics (Mathematics BS), Intended Minor in EALC (East Asian Languages and Cultures)	Lingphi
Bria N Nixon	Bryn Mawr College Sociology	Social Class
Mana Sakamoto	Wellesley College Undeclared, prospective psychology or cognitive science	Social Class
Ray Nishimura	Davidson College Economics major computer science minor	Social Class

第二章 第75回日米学生会議概要

Shine Lee	University of California, Berkeley Cognitive Science, Pre-Medicine	Social Class
Amani Shah	Stanford University Economics Major	Susbus
Eryk Jakub Chojnacki	Washington and Lee University Intended Economics major, Intended Japanese and Math minors	Susbus
Ryan Jiang	Boston College Economics, International Studies	Susbus
Yuki Tanizaki	University of California, Irvine Business Administration Major, Computer Science Minor	Susbus



広報戦略

例年、日米学生会議では、首都圏内の大学に在学している学生から多数の応募をいただく。

一方でその事実から、首都圏外の学生による日米学生会議への認知度が低いのではないかと考えた。“他国の学生とアカデミックな議論をしたい”、“異なる背景を持つ人々と寝食をともにしてみたい”などという志を持ってはいるものの、日米学生会議の存在を知らずにいる方々にぜひ知って欲しいという思いから、首都圏外の学校への広報にも力を入れた。

具体的には、例年、広報をさせていただいていた大学に加え、新規に全国126校の短期大学・大学、専門学校のプロモーション課、学務課、国際交流センターなどに連絡を差し上げ、告知にご協力いただいた。また、説明会に関して、学校別説明会の数を減らし、地方別説明会や全体説明会の数を増やすことで、所属によらない参加の機会をできる限り作った。

その結果、第75回日米学生会議には全国の学校からの応募が急増した。

ご協力いただいた大学広報課、学務課の皆様、何より応募して下さった学生の皆様へこの場を借りて御礼申し上げます。

〈ご協力いただいた大学、大学校、専門学校 *五十音順〉

愛知大学、愛知医科大学、愛知学院大学、愛知県立大学、愛知県立芸術大学、愛知工業大学、会津大学、青山学院大学、青森公立大学、秋田大学、秋田県立大学、跡見学園女子大学、旭川医科大学、亜細亜大学、茨城大学、茨城県立医療大学、岩手大学岩手医科大学、岩手県立大学、宇都宮大学、諏訪大学、愛媛大学、桜美林大学、大分大学、大阪大学、大阪医科薬科大学、大阪教育大学、大阪経済法科大学、大阪公立大学、大阪国際大学、大阪女学院大学、大妻女子大学、大手前大学、追手門学院大学、岡山大学、岡山県立大学、岡山商科大学、岡山理科大学、沖縄国際大学、小樽商科大学、尾道市立大学、帯広畜産大学、海上保安大学校、香川大学、学習院大学、学習院女子大学、鹿児島大学、活水女子大学、神奈川大学、神奈川県立保健福祉大学、金沢大学、金沢医科大学、金沢工業大学、金沢美術工芸大学、川崎医科大学、川崎医療福祉大学、川崎市立看護大学、関西大学、関西医科大学、関西外国語大学、関西国際大学、関西学院大学、関東学院大学、神田外国語大学、気象大学校、北九州市立大学、北里大学、北見工業大学、岐阜大学、岐阜県立看護大学、岐阜聖徳学園大学、九州大学、九州工業大学、九州国際大学、九州産業大学、九州歯科大学、共愛学園前橋国際大学、京都大学、京都外国語大学、京都芸術大学、京都工業繊維大学、京都産業大学、京都女子大学、京都先端科学技術大学、京都橋大学、京都府立大学、京都府立医科大学、京都文教大学、京都ノートルダム女子大学、共立女子大学、杏林大学、近畿大学、金城学院大学、熊本大学、熊本県立大学、くらしき作陽大学、久留米大学、群馬大学、群馬医療福祉大学、群馬県立女子大学、群馬県立県民健康科学大、群馬バス大学、慶應義塾大学、県立広島大学、工学院大学、航空保安大学校、高知大学、高知県立大学、高知工科大学、甲南大学、甲南女子大学、神戸大学、神戸外国語大学、神戸学院大学、神戸教育大学、神戸国際大学、神戸女子大学、公立千歳科学技術大学、公立小松大学、公立鳥取環境大学、公立ほこだて未来大学、國學院大学、国際医療福祉大学、国際教養大学、国際基督教大学、国士館大学、駒澤大学、埼玉大学、埼玉医科大学、埼玉学園大学、埼玉県立大学、札幌医科大学、佐賀大学、産業医科大学、山陽学園大学、山陽小野田市立山口東京理科大学、滋賀大学、滋賀医科大学、滋賀県立大学、静岡大学、静岡県立大学、静岡文化芸術大学、自治医科大学、実践女子大学、芝浦工業

第二章 第75回日米学生会議概要

大学、周南公立大学、島根大学、島根県立大学、下関市立大、就実大学、淑徳大学、順天堂大学、城西国際大学、昭和大学、昭和女子大学、昭和薬科大学、上智大学、女子栄養大学、白百合女子大学、信州大学、水産大学校、駿河台大学、駿台外語&ビジネス専門学校、成蹊大学、聖心女子大学、成城大学、西南学院大学、聖マリアンナ医科大学、聖路加国際大学、摂南大学、専修大学、創価大学、高崎経済大学、多摩大学、玉川大学、多摩美術大学、千葉大学、千葉経済大学、千葉県立保健医療大学、千葉工業大学、千葉商科大学、中央大学、中央大学、中国学園大学、中部大学、鎮西学院大学、筑波大学、津田塾大学、帝京大学、帝塚山大学、電気通信大学、天使大学、東海大学、東京大学、東京医科大学、東京医科歯科大学、東京外国語大学、東京海洋大学、東京学芸大学、東京家政大学、東京経済大学、東京藝術大学、東京工科大学、東京工業大学、東京工芸大学、東京国際大学、東京慈恵会医科大学、東京女子大学、東京女子医科大学、東京都市大学、東京都立大学、東京農工大学、東京薬科大学、東京理科大学、同志社大学、同志社女子大学、東邦大学、桐朋学園大学、東北大学、東北医科薬科大学、東北学院大学、東北芸術工業大学、東北文化学園大学、東洋大学、東洋学園大学、東洋英和女子学院大学、徳島大学、獨協大学、獨協医科大学、富山大学、富山県立大学、常葉大学、鳥取大学、豊橋技術科学大学、長岡造形大学、長崎大学、長崎外国語大学、長崎県立大学、長崎国際大学、長崎純心大学、長崎女子短期大学、長崎総合科学大学、長崎短期大学、長野大学、長野県立大学、中村学園大学、名古屋大学、名古屋市立大学、名古屋外国語大学、名古屋学院大学、名古屋学芸大学、名古屋工業大学、奈良教育大学、奈良県立大学、奈良県立医科大学、奈良女子大学、南山大学、新潟大学、新潟医療福祉大学、新潟国際情報大学、新潟県立大学、新見公立大学、二松学舎大学、日本大学、日本医科大学、日本工業大学、日本歯科大学、日本獣医生命科学大学、日本女子大学、日本赤十字看護大学、日本赤十字秋山看護大学、日本体育大学、ノートルダム清心女子大学、浜松医科大学、一橋大学、東日本国際大学、比治山大学、フェリス女子学院大学、兵庫医科大学、兵庫県立大学、弘前大学、広島大学、広島市立大学、広島国際大学、広島修道大学、広島女学院大学、広島文化学園大学、広島文教大学、福井大学、福井県立大学、福岡大学、福岡教育大学、福岡県立大学、福岡工業大学、福岡女子大学、福島大学、福島県立医科大学、福山市立大学、藤田医科大学、文教大学、文京学院大学、別府大学、防衛大学校、防衛医科大学校、法政大学、北陸大学、北海道大学、北海道教育大学、北海道文教大学、前橋工科大学、三重大学、美作大学、宮城大学、宮崎大学、宮崎県看護大学、宮崎公立大学、宮崎国際大学、武蔵大学、武蔵野大学、武蔵野美術大学、室蘭工業大学、名桜大学、明治大学、名城大学、明治学院大学、明治薬科大学、明星大学、桃山学院大学、安田女子大学、山形大学、山口大学、山口学芸大学、山口県立大学、山梨大学、山梨県立大学、横浜市立大学、横浜国立大学、横浜美術大学、立教大学、立正大学、立命館大学、立命館アジア太平洋大学、琉球大学、龍谷大学、和歌山大学、和歌山県立医科大学、早稲田大学



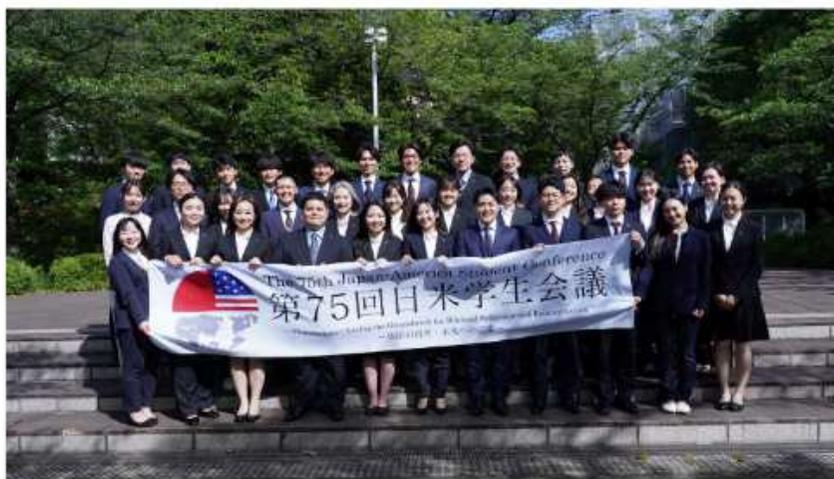
以上

第三章 事前/事後研修

春合宿

〈プログラム概要〉

3月末に合格が決まった参加者は一か月のオンライン期間を経て、5月の2泊三日に初めて顔合わせを行う。当合宿では、日米学生会議の歴史を学び、夏の本会議に向けての議論を行う。日米学生会議の基礎を抑えるとともに交流を深めることを目的とする。



〈開催日時〉

2023年5月5日(金)～5月7日(日)

〈活動内容〉

1日目

5月5日(金) 開会式、写真撮影、分科会議論、アイスブレイク、自由交流（議論）

第75回日米学生会議 春合宿 開会式〔式次第〕			
1	開会の辞	第75回日米学生会議 日本側実行委員長	久野 賢登
2	アメリカ側主催団体挨拶動画上映	International Student Conferences, Inc. Executive Director	Bahia Simons-Lane様
3	日本側主催団体挨拶	国際教育振興会代表・ 日米学生会議事務局長	金野洋様



〔参加者感想〕

数年後に思い出を語り合うとしたら、春合宿初日を振り返ることをお勧めする。私たちは4月からZoomで交流を重ね、5月5日に初めて互いの声を機械を通さずに聞いた。「はじめまして」なのか、「久しぶり」なのかわからない小っ恥ずかしさが寄り添う。それにつられ今まで交流のなかった相手とも、はじめましてより近い距離で話した。昼には初めて同じ釜の飯を食らった。午後のアイスブレイクにて「ナミビアの砂漠で遭難し、陸上訓練の経験を振り返り、宇宙兄弟を読み、粉ミルクをパクパク食べた」という同じ温度の思い出が皆で共有されたのは善いことである。それにきっと次の集合写真では風が優しく私たちの前髪を撫でることを期待する。夕食後の自由議論は自己紹介代わりだった。JASCerとは、名前を反芻せずとも、歩んできた道や専攻分野で自身を語ることができるのだと気がついた。社会的な地位の輪郭が曖昧な学生が、世界を変えようと議論することは机上の空論ではないということのをこれからの活動で示したい。就寝前、施設の設備に悲鳴を上げたのも仲を深める布石だ。風呂場のホースには穴があき、廊下で消灯まで駄弁る。文化的な生活の輝かしい幕開けである。

(渡邊 めい、京都大学 文学部 科目等履修生)



2日目

5月6日(土) 分科会議論、中間発表、ようこそ先輩（先輩方との交流）



〔参加者感想〕

2日目、RT内で話し合ったことを他のRTのメンバーに共有した。RT内で議論している間に気が付かなかった視点を体験することができた。自分たちの考えの曖昧なところをたたき直してもらえる貴重な時間だった。合宿最終日の発表に向けて準備は着実に進んでいる、とこの時は思っていた。2日目の夜は、「ようこそ先輩」で過去に日米学生会議に参加した先輩方とお話した。RT内の議論テーマについて話すと、その議論に目的はあるのか、とご指摘をいただいた。私は元々、答えを求めるといより議論することに重きを置いていた。そのため、このご指摘にドキッとした。春合宿という短いようで長い時間を使って、ただ漠然と議論してしまうのは勿体無いと思った。最終的にRT内で結論を出すという形に収束しないとしても、最初から結論を出さない前提で議論してしまうことに疑問を抱いた。次の日、議論の目的意識についてRT内で話し合った。最終日に完全に軌道修正することは難しかったが、この段階でこの視点を持つことができ、有意義な春合宿を過ごせたと感じている。

(石川 結菜、埼玉医科大学 医学部 3年)



3日目

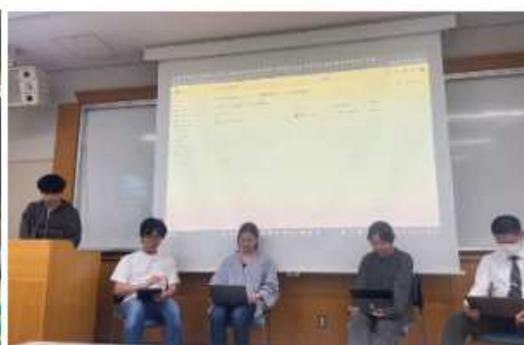
5月7日(日) 事務手続き、分科会議論、最終発表



〔参加者感想〕

発表当日に発表が出来上がっていないという不安から分科会の中に焦りがあった。発表までに残された話し合いの時間は残り僅か。分科会では前日まで全員が真摯に議論に向き合っていた。そのため、前日に決まっていた発表の形を白紙に戻す意見の発言には勇気が必要だった。真正面から否定されるのではないか、その中で自分は意見を突き通すことができるのか。その不安の中で、他の皆はこう思っている気がする、という相手の意見の決めつけをしている自分にも気が付いて、色々な葛藤があった。だからこそ、私の意見に分科会の皆が心から向き合い、各々の譲れない部分が合わさって形を成して発表が出来たことが本当に嬉しかった。そして、新しい疑問も課題も生まれた。発表は作品であり、良い作品を作るうえで表現者が個々の意見を強く持つことは必要だ。その個々の意見のぶつかり合いさえも作品になるならば、よりよい作品を求めて今後も個々の意見を投げかけ合いたい。その経験が出来る分科会だと確信した春合宿であった。

(志田 夏音、岡山大学 工学部 工学科 環境・社会基盤系 1年)



春合宿を振り返って

〔参加者感想〕

年齢もバックグラウンドも異なる36人が集まって、一体どういう会合になるんだろうと思いがかった春合宿。新しい人に出会えるという高揚感と少しの不安を抱いてオリンピックセンターへ向かったが、想像以上に濃く、有意義な時間だった。

思ったよりもすぐに全員と仲良く話せたのは、タメ口文化がその理由の一つだろう。年齢・学年・役職関係なく全員でタメ口で話すことで、上下関係は一切生まれず、水平的な関係構築ができた。水平的な関係構造のおかげで、気楽に意見交換ができたと考えている。そして、他の分科会と関わる時間を設けられたことで、分科会外の人と気軽に話してみるきっかけになった。

日中は分科会のテーマについての議論をして、夜中には分科会外の人と関わりながら様々なテーマで議論した。分科会の議論は、私たちの意見交換が春合宿を通して‘最終発表’という形として残ってとても良かった。分科会外では3日間、とても短い間だったが、多種多様な人が集まったため、多様な話題で話すことができた。普段友達と話さないようなセンシティブな話題を話したり、その中で勇気を出して自分の意見を言ってみたり、フィルターなしでする議論はとても楽しくて、忘れられない経験だった。

(チャユナ、順天堂大学 医学部 医学科 4年)

〔実行委員感想〕

日米学生会議の入学式という異名を持つ春合宿は5月5日(金)、6日(土)、7日(日)と2泊三日の日程でオリンピックセンターにて開催された。最初のプログラムである、開会式が始まるよりも前からあちこちで議論が始まっていた。参加者は相手の価値観や考え方を知るため自己紹介の代わりに議論を通して仲を深めていたようだ。

プログラムは開会式を経て日米学生会議の歴史を学んだのちに、自己紹介も兼ねて論理的思考力、説得力を磨いた。各分科会ごとに2日目に控えた中間発表までに様々な議論を展開していた。互いの分科会に対して意見や新たなアイデア、フィードバックを行う姿が印象的であった。2日目の夕方には、現役参加者とアラムナイが交流する「ようこそ先輩」が開催された。89年の歴史を持つ日米学生会議の過去の参加者は年代の近い先輩から、社会経験を長く持つ先輩まで、さらにそれぞれの先輩が異なる知見や見聞をお持ちであるため、多くの刺激をもらっただろう。3日目の最終発表では春合宿中での議論や今後の活動についてプレゼンテーションを真剣に考えていた姿が今でも鮮明に思い出される。第75回の参加者は打ち解けるのが早かったように感じる。新型コロナウイルスなどの感染症の影響がほとんど無くなったことを実感し、嬉しさがあふれた。

3日間を終え、様々な感情を抱えた参加者がいた。春合宿での出会いや議論に刺激され、勉学を極めようとするもの、議論方法や話し方を追求するもの、日米学生会議とは何か参加した意義や意味を問い直すもの、参加した各々が目標を持つきっかけになる良いスタートになったのではないだろうか。

(田頭 奈寿菜、国際教養大学 国際教養学部 3年：春合宿担当実行委員)



安全保障研修

〈プログラム概要〉

日本の将来の平和と安全を担う航空自衛隊幹部学校及び自衛官の幹部候補生養成を目的とする防衛大学校を訪問する。日米関係を考える際、極めて重要となる「安全保障」についてより詳しく学ぶため、航空自衛隊幹部学校の自衛官及び防衛大学校教授による特別講義を受ける他、同学校の学生と対話の機会を設ける。航空研究センターでは現役の自衛官に話を聞くとともに、同学校の学生という共通点はあるども、厳しい訓練や規律の中で学ぶ同学校学生の姿にも刺激を受ける。

〈開催日時〉

2023年6月1日(木)～6月2日(金)

〈活動内容〉

1日目

6月1日(木) 航空自衛隊幹部学校 航空研究センター訪問
航空自衛隊幹部学校長 空将 影浦誠樹様ご挨拶、特別講義、自由討論



〔参加者感想〕

安全保障研修の初日は、防衛省目黒地区内の航空自衛隊幹部学校を訪問した。

はじめに学校長の影浦誠樹空将の表敬の後、航空研究センターの丹羽雅士2佐から「防衛力の技術的強化と日米の安全保障」というテーマで講義を受けた。外交努力と防衛力の整備が並行して行われなければいけないことや、近年の軍事分野における技術革新などから、航空自衛隊の存在意義や今後の日米の安全保障協力の展望まで幅広い観点から我が国の安全保障について説明を受けた。

第三章 事前/事後研修

その後は現役の中堅幹部の方々との自由討議を行なった。戦術、整備や輸送・補給、広報に至るまで様々な分野のプロフェッショナルからお話を伺った。

ある方から、様々な分野の専門家が集まってはじめて航空機を飛ばせる空自という組織は、「機能集団」と呼ばれるというエピソードを聞いた。また、有事の際の自衛隊の活動は国民の権利と相反する場合があるが、平時から自衛隊について国民に理解や関心を持ってもらい、有事の際に国防に協力してもらえるよう心掛けていているということも聞いた。今まで直接国家の実力機関の中にいる人の話を聞いたことがなかったので、組織としての特殊性や常に国民感情を意識しているということが強く印象に残った。

(上保 周平、国際基督教大学 教養学部 アーツ・サイエンス学科 2年)

2日目

6月2日(金) 防衛大学校訪問

防衛大学校学校長 久保文明様ご挨拶、防衛大学校概要説明、
施設見学、特別講義、学生間討議



第75回日米学生会議日本側参加学生 防衛大学校研修

令和5年6月2日



〔参加者感想〕

「人間ならば誰にでも、現実の全てが見えるわけではない。多くの人たちは、見たいと欲する現実しか見ていない。」かの著述家が記したその言葉を思い知らされた時こそが、安全保障研修二日目の防衛大学校訪問だった。

属する集団、環境により現実をどのように捉えるかは、大きく異なるものであるという事実を経験として突きつけられた。それは、初日・二日目に行われた教官による講義よりも、防大生とのディスカッションにおいてであった。現在日本が直面する安全保障情勢を、同世代の防大生である彼・彼女たちは、近い将来に就く自衛官という役割を踏まえつつも、自らの言葉でそれに対しての向き合い方や捉え方を語っていた。身近に有事にその場へ赴かねばならない立場にある人に面識を

持たなかった自分にとって、そのような役目に近い将来就くであろう彼・彼女たちの生の声は、“安全地帯”から情報や知識として知り、学び、語ることをしてきた自らの立ち位置を認識させられ、捉え直させた。平和を望むには、眼前に現実として横たわるこの情勢を、日々報道により知る情報から自分ごととして捉えなければならない。そして、私たちが平和のために何ができるのかを問い続けなければならない。安全保障研修を終えてそう強く思う。最後に、二日間に渡り突りある安全保障研修の開催を企画した、EC、防衛大学校関係者、そして案内役を買って出てくれた“佐藤学生”に感謝したい。

(小林 弘典、国際基督教大学 教養学部 アーツ・サイエンス学科 2年)

安全保障研修を振り返って

〔実行委員感想〕

日米学生会議において避けては通れない日米の安全保障。ただ机上だけで学ぶのではなく、実際に仕事として関わっている方々や将来貢献するであろう学生らと、ともに学べたことはとても貴重な経験であった。初日は講義から日本を取り巻く危機を学んだうえで、隊員をまとめるリーダーとして働く方々に素直な質問をぶつけた。リーダーシップとフォローシップ、相手により理解されるための工夫など、規模は違っても今後の学生生活に響くものが多くあった。

2日目は同じ学生といえども、我々とは全く異なる環境の防衛大学校で学んでいる学生と交流した。国際情勢を学んだあとの約20名との学生討議は、参加者にとって非常に心に残るものとなっただろう。学生という立場でありながら、自己利益ではなく国のために学び働こうと目標を持つ姿勢には感銘を受けた。将来日本の防衛に関わろうと考えたきっかけを聞くと、将来の夢を持つ人々の夢を守るため、と答えた学生がいた。人のために、とここまで行動できる力に驚くと同時に、自分の未熟さを自覚した。他の参加者から「死は怖いか」や「今後の日本はどうなるのか」など、率直な質問に対して防大生としての回答だけでなく、一個人としての純粋な回答も得られた。真剣に意見を交わしたことで、日本の将来について本格的に考えるきっかけとなったのではないかと。台風により予定より早くプログラム終了となったが、限られた時間の中で熱く議論することはもちろん、昼食時は他愛もない会話で盛り上がるなど、充実した一日を過ごせたと感じる。

中々実生活と直接関係がない安全保障。この研修を機に、台湾自主研修や本会議で安全保障について活発な議論が行われることを期待する。

(玉眞 優里、法政大学 人間環境学部 3年：安全保障研修担当実行委員)



台湾自主研修

〈プログラム概要〉

日米学生会議における自主研修は、有志の参加者で国内外の都市を訪れ、現代社会が抱える問題や課題を現場で直接見聞し、本質を考察することを目的とする。今回研修先として「台湾」を選定した理由は、情勢が大きく変化する今こそ、経済・軍事・技術などの様々な角度から安全保障について考えを深め、かつ意見交換の場を設けることは日米の学生で会議活動を実施する上で極めて重要と考えたためだ。そのため、約25名の現地の学生との交流を通じた友好関係の構築も重視した。

〈開催日時〉

2023年 6月17日(木)～6月20日(日)

〈活動内容〉

1日目

6月17日(木) 台湾到着



2日目

6月18日(金) 日台学生会議 議論、自由散策



〔参加者感想〕

日台学生会議の皆さんが、暑さでへとへとになっている私たちをさわやかな笑顔で迎えてくれた。皆さんは日本語が堪能で、私たちはすぐに打ち解け、おすすめの夜市や観光スポットについて教えてくれた。議論時間にはいると、台湾人のアイデンティティや受けてきた教育の違い、現在の国際情勢などトピックは尽きなかった。

その中で印象的だった話を一つ取り上げる。それは台湾の学生の受験についてである。台湾の学生は一番賢いとされている台湾大学を目指し、昼夜勉強に励むそうだ。親は少し無理をしても子供の教育環境を整える。同じマンションや席が隣の人、すぐそばに競争相手を用意するのだ。台湾大学に行くことが幸せの近道とされている中で、どのような考えで高校時代を過ごしたのか、素直に質問した。何人かの学生から返ってきた答えは、その選択に疑いを持たなかった、というものだった。私はアルバイトとして高校生の受験指導を行っているため、高校生の受験に対する意識を日々感じている。しかし、実感として台湾の学生の方が受験に対する意識が圧倒的に高いのである。自分の選択肢を広げるために勉強に励む彼らに尊敬の念を抱くと同時に、彼らの覚悟を感じた。私は全員が全員彼らのように志高く受験に取り組むべきだと考えているのではない。自分の選択に対して、迷わず突き進んでいる様子が印象的だったのだ。

(玉眞 優里、法政大学 人間環境学部 3年：実行委員)



〔参加者感想〕

自由散策をおこなった場所としては、西門町をメインに様々な店や飲食店を回った。率直な感想としては、日本の秋葉原や渋谷が融合されたような空間という印象だった。若者向けの飲食店やお土産屋さんなど、どこか東京を思わせるような外観だった。しかし店舗に入っていた店は台湾の夜市のようなものが多いと感じた。例えば、私たちはフルーツジュースを販売している店に立ち寄ったのだが、客の目の前でフルーツをカットしてジュースにする光景や、若干衛生的に心配になるような場面は夜市の屋台と似た雰囲気を感じた。空間は日本的な要素が多く感じられても、実際に商売をしているのは台湾の人たちであり、そのちぐはぐさが非常に異文化の交流を感じられて興味深かった。その他にも様々な喫茶店や雑貨屋、デパートなどを巡ったが、やはり日本的な要素が多く感じられた。特に女性の化粧品売り場などでは、文字こそ中国語であるものの販売されている商品は日本のものが非常に多かったし、広告も日本で有名な女優が多く起用されていて台湾という異国の地にいることを忘れてしまいそうになるほど、日本に近い空気を感じた。喫茶店でもカ

第三章 事前/事後研修

タカナでのふりがなが書いてあったり、漢字でも大体どのような商品かわかったりと、ある種海外にいることを感じさせなかったのだ。台湾が長年に渡って日本人にとって人気の海外旅行先であったのも頷けた。熱帯的な蒸し暑さはあれど、空間の居心地が非常に良く過ごしやすいのだ。この研修を通じて、台湾という国が日本から受けた文化的影響の一端を知ることができて非常に有意義であった。

(佐藤 天音、防衛大学校 人間文化学科 4年)



〔参加者感想〕

台北市内散策において、グループに分かれて約25名の日台学生会議参加者とともに計画を立て、台北市内を巡った。私たちのグループは、台湾の学生お気に入りのレストランを巡ったり、雑貨を見た。現地をよく知る学生たちと一緒に計画を立てると、観光サイトだけを頼りにする場合は全く違った視点から計画を立てることができた。市内を散策していると、日本のチェーン店が非常に多く、そうでなくとも日本語を目にする機会が多かった。聞けば、商品等に日本語が書かれていると高級感のある印象につながるのだそうだ。歴史的な背景等から台湾が親日国であることは知っていたが、それを実感した研修でもあった。また、台北市内散策の時間に限らず、台湾事前研修全体を通じて、台湾の方の「おもてなし精神」を強く感じる場面が多かった。たとえば、台北市内散策では、台湾の学生が、店決めや予約、連絡等を積極的に行ってくれた。また、夜市で小籠包を食べていたときは、店主が翻訳アプリを使って話しかけてくれ、台湾ビールを6缶もサービスしてくれた。台湾人のフレンドリーで優しい国民性を垣間見ることができた。このように、台北市内散策は、台湾の雰囲気や文化、人々の国民性を実感する最適な機会となった。

(村上 太一、慶應義塾大学 法学部 法律学科 4年)



3日目

6月19日(土) 外交部訪問

〔参加者感想〕

今回で第75回を迎える日米学生会議という長い歴史を誇るなかでも、台湾での研修は今回が初めてだそうだ。そのような中で国際関係上でも日々注目の的となっている台湾の外交を司る外交部及び国際事務学院にご訪問させていただいたことは、携わっていただいた皆様への感謝の念に堪えない。そして、我々は未来の台湾の外交官を目指されている方達と一緒に、彼等彼女等が日々受けている国際法を通じた台湾外交についての講義を受けた。そのなかで、台湾という存在が国際社会のなかでどのような立ち位置にいるのかということを学んだ。それは一言で表せば“*Sui generis international entity*”、国際特殊権力体であるようだ。台湾は事実上の政府であるものの、国家承認という国際社会上の国家関係によっては「無国籍」として扱われてしまう可能性がある。そのような台湾の特殊性を実感するものであった。そして講義の後には、一緒に皆で昼食を取りながら親睦を深めた。英語というリングフランカを通して、皆それぞれ日台という国境に捉われずに色々なことを話せただけでなく、歌を歌ったりピアノを弾いたりという楽しい交流もあった。願わくばこれから先も、日本と台湾の末永い交流が出来るよう一步一步と交流を続けていきたい。

(山本 雄翔、京都産業大学 国際関係学部 3年)



4日目

6月20日(日) 日台交流協会、総督府訪問

〔参加者感想〕

日本台湾交流協会は、大使館を設置することができない複雑な政治的情勢に対応して、台湾との交流を深め、政治的・経済的な協力を促すための政府機関である。当協会のお話を講義形式で伺い、その後質疑応答を行った。講義においては外国の立場から見た政治的・経済的な台湾情勢がとても興味深かった。政治的に日本や米国からすると、中国との緩衝地域である台湾は死守すべき地域である。また経済的にも、需要が高まっており、技術的に台湾でしか作れない半導体産業を日米側で囲い込みをしなければいけない。日本がこのような危機感を政府として共有していることは、台湾の安全保障にとって重要な点であると感じた。さらに印象的であった質疑応答を紹介する。台湾が半導体分野において世界最先端の技術を得ることができたのは、中国からの経済的自立を目指すという政治的な意図があったのか、それとも偶然の出来事であったのかという質問だ。偶然の代物であったというのが答えだが、結果的に将来性のある分野を見抜き、国家として多額の投資を行って、世界中が欲する技術を成長させることができた点に関して、経済的なイノベーションが比較的少ない日本にとって学ぶべき点が多いと感じた。

(荒木 太一、慶應義塾大学 経済学部 3年)



〔参加者感想〕

台湾研修の最後のプログラムとして、台湾の政治の中枢である「**中華民國總統府**」を訪問し、見学及び高官表敬を行った。總統府は、日本が台湾を統治していた1919年に日本の建築家と技術によって建造され、戦後の修復はあったものの、現在に至るまで**中華民國**の官邸として利用されている。總統府に入ると、「Power to the People」と描かれた床と「**台世界**」の看板に目を惹かれた。これは、總統府が国民のためのものであるとともに世界に開かれた台湾の存在を強調したものであり、国際社会の中で人々に開かれた政府であることが伺えた。日本では官邸を一般市民が見学することはできないが、總統府が一般市民、そして観光客にも見学の場として開かれていることもこの価値観の裏付けである。見学では、現地のボランティアがガイドとなり、1階の展示室と回廊を案内してくれ、總統府の歴史や建築デザインの工夫などを学ぶことができた。また、高官表敬では、**總統府**副秘書長の**黃重諺**氏と国家安全會議副秘書長の**徐斯儉**氏が迎えてくださり、台湾の未来

第三章 事前/事後研修

と日本との関係の展望について簡単に話を聞いた。最後に、総統府訪問を通して、国際社会における台湾の国家としての存在価値について理解したことで、将来にわたって、国際社会での日本と台湾の連携の必要性を感じた。

(佐藤 佑樹、宇都宮大学大学院 地域創生科学研究科 博士前期課程1年)

台湾研修を振り返って

〔参加者感想〕

近年、「新冷戦」とまで言われる米中の急速な関係悪化に伴い、戦後長く「経済は中国、防衛は米国」としてきた東南アジア諸国は対応を迫られている。特に、同盟国として多数の米軍基地を領土内に有する一方、インバウンドや貿易、サプライチェーンなどで中国に頼ってきた日本国は、今明確な対応をとることを米国から求められている。特に、台湾有事は米中関係における最大の懸案事項のひとつである。「ひとつの中国」支持を堅持しつつも一方的な現状変更には反対する米国の曖昧戦略は、中国の態度強硬化に伴い、維持が難しくなりつつある。日本にとっても、台湾海峡は原油などの貿易ルートとして死活的に重要であり、台湾有事を日本の安全保障上の問題として捉えている。まさに、日米関係を考える上で、台湾は最も重要なトピックのひとつであることは疑いの余地がない。我々第75回日米学生会議は、台湾現地に行き、台湾有事に関する現実的な危機感や、伝統的に親日とされる空気感を味わった。台北観光とともに、台湾の大学生・台湾外交部の若手の方々・台湾総督府の方々との交流を行った。温暖な南国の気候で、日本に勝るとも劣らない多様な食文化のもと、今後の日台関係発展で重要な文化的交流とともに、台湾の人々が日本や台中関係をどう捉えているか、率直な意見交換を行うことが叶った。海外での研修は、現地の方々のみならず、国内の多くの方々の協力があって実現された。この場を借りて、多くの方々にお礼を申し上げたい。

(富澤 新太郎、東京大学 教養学部 理科三類2年)



〔実行委員感想〕

実行委員会発足時の昨年9月から実行委員が胸に抱いていた、「台湾での自主研修を第75回日米学生会議で実施する」という構想を実現できたことを嬉しく感じる。実現に向けて協力して下さった国際教育振興会、日米学生会議同窓会・アラムナイの方々、そして日本及び現地台湾で我々

第三章 事前/事後研修

のプログラムに賛同し、実りあるプログラムを共に創り上げてくださった全ての関係者の皆様にお礼を申し上げます。

本会議にて日米関係や現在の国際情勢について議論する上で台湾は欠かせない存在である。そこで今回の台湾研修では、実際に足を運び参加者が自分自身の目で、台湾のいまを知ることが最大の目標であった。

ここで外交学院を訪問した際に強く印象に残っている場面の一つを取り上げたい。歓迎のスピーチをしてくださった外交部の方から、外交学院の学生及び日米学生会議の参加者に対して以下のような言葉をいただいた。

「T(Taiwan) E(Excellence) A(Ambitious) M(Miracle)、TEAMを大切にせよ」

周りの仲間を大切に、自国のことを思い、卓越した野心と志を持って奇跡を起こせ、そして目標を達成せよという言葉だった。その言葉を聞いたのちに外交学院の学生らと話した際、彼らの表情はととても輝いていた。国家承認を受けていない台湾を背負って、その国際的なプレゼンスを高めるために外交という職務に従事する。これほどやりがいのある仕事はない、と表情が物語っていた。同年代の彼らから感じたこの衝撃は、事前には予想だにしないものであった。

他にも、同年代である日台学生会議の学生との交流、日台交流協会台北事務所訪問、總統府訪問、プログラム内外で得られた様々な経験や現地の方々との交流を通して、参加者一人ひとりが現地で数々の感情の揺れ動きを経験したと確信している。そして今回できた数々のつながりは、今後の日台関係の発展や第75回日米学生会議の成功に間違いなく寄与するだろう。研修担当者として、このような参加者一人ひとりが深く自らや国家について考えるきっかけとなった台湾研修を実現できたことを喜ばしく感じる。

最後になりますが、今回の研修に協力してくださった全ての皆様、積極的に学んでくれた第75回会議参加者に、厚く御礼申し上げます。

(菊池 宙、東京大学 法学部 4年；台湾自主研修実行委員)

直前研修

〈プログラム概要〉

直前合宿は本会議前日に行われるプログラムであり、いよいよ始まる本会議に向けて注意事項の確認や事前学習、各々の会議参加の目的を再確認する場である。事前活動最後のプログラムとして、参加者の意識や意欲を固める目的がある。

〈開催日時〉

2023年 8月1日(火)

〈活動内容〉

本会議の流れと目的説明、第76回実行委員選出について

調全合宿を振り返って

〔参加者感想〕

会場に向かう道中、私は実行委員やアラムナイの方々が長い年月をかけて用意してくださった充実した会議に参加させていただけるという喜びと、それらが持つ「価値」を果たして私はきちんと吸収することができるのだろうかという漠然とした不安で頭を重くしていた。そんな私の煮え切らない気持ちは、会場に迎え入れてくれた同期、実行委員によって一瞬にして晴らされた。彼、彼女らの希望に満ちた笑顔が、私に安堵をもたらしてくれたのだ。論理的には説明できない不思議な力に背中を押され、私は日本側参加者としての責務をこの仲間たちとともに果たしてみせると強く思った。その時、私は過去の自分が勝手に会議から得られる「価値」を限定してしまっていた事に気がついた。論理的であることは会議はもちろんあらゆる場面で重要なことだが、それだけでは語れない何にも代え難い「価値」がこの会議にはある。その「価値」とはなんたるものかを未来に向かって思索する営みを、私なりに精一杯足掻いて紡ごうと決意し眠りについた。

(福井 達於都、慶應義塾大学 法学部 2年)

〔実行委員感想〕

アメリカ側参加者を迎えるため、最初のサイトである京都に日本側参加者が集合する。学業の関連で少し遅くなってしまう参加者もいたが、体調不良者1名を除く27名の参加者が宇多野ユースホテルに集まった。実行委員8名は事前に京都におり、参加者同様またはそれ以上に、これから始まる自分たちの力で作り上げた本会議に胸を躍らせていた。日米学生会議の秩序を守るなどの基本的な確認事項や今後のプログラムの概要の説明、会議参加の目的を確認した。参加者の中には、ホスト国としての自覚が芽生えたものもいたのではないだろうか。今までの長いようで短い1年間の準備期間を終え、会議が始まろうとしていることにあまり実感は湧かなかった。約1か月に及び70

第三章 事前/事後研修

数名と寝食を共にすることで、思考が停止するまで考え続け、価値観ひいては人生を変える可能性を秘める、会議の前夜であった。

(田頭 奈寿菜、国際教養大学 国際教養学部 3年：直前合宿担当実行委員)



福島自主研修

〈プログラム概要〉

昨年度に引き続き、実行委員会が企画する非公式プログラムとして実施される自主研修の一環として、本会議後に福島研修を行った。前年度同様に経済産業省のご協力のもと、福島第一原発の視察を行い、その他、福島を元気づけるための活動を行う個人や施設の訪問、被災を受けた小学校の訪問などをメインとした。今回の福島訪問の目的は、福島第一原発という象徴的施設の現状を実際に確認すること、震災のあらゆる影響の下で、福島の人々は何を考え、行動しているのかを垣間見ることであった。また、1日目の夜には経済産業省木野正登様による福島の現状とその展望についてのセッションが行われ、現地で学んだことを踏まえた質疑応答を行った。

〈開催日時〉

2023年9月30日(土)～10月1日(日)

〈活動内容〉

1日目

9月30日(土)

福島第一原子力発電所視察、とみおかwindメーン視察、ALPS処理水と福島の復興の現状についての講義、質疑応答

2日目

10月1日(日)

東日本大震災・原子力災害伝承館視察、浅野燃糸俣双葉事業所フタバスーパーゼロミル・エアーカーのお双葉丸、震災遺構・浪江町立請戸小学校視察、双葉町産業交流センターイベント参加

福島自主研修を振り返って

〔実行委員感想〕

今回の福島研修では、福島の現状とその展望を学び感じる事が目的であった。1日目のプログラムでは、福島第一原子力発電所を見学し、ALPS処理水の安全性やそれを担保するための施設を実際に目で見て確かめることで、国際社会の一部にて取り沙汰されている問題の現状を体験した。また、未だなお区間外には持ち出せない車やタンクなどを目の当たりにできたことは、震災から時間が経つにつれ注目されにくくなっていった現実の復旧速度を再認識させ、復旧と復興の目指すものの違いや現実可能性などに思いを巡らせることとなった。富岡ワイン様視察においては、震災被害という言葉に付き纏うネガティブなイメージを感じさせない温かな人との交流や未来への意欲を感じられた。しかし、ブドウ畑の側に位置し海辺のコテージを彷彿とさせるとみおかwindメーン代表のお宅が震災直後に数多く建てられたプレハブ家屋をリメイクしたものであること、富岡駅の前にワイナリーをつくることは震災によって街がその姿を一度失わないと実現しなかったことなど、

第三章 事前/事後研修

各所に被害の現実が潜んでおり、復興事業という明るい未来への歩みは、そうした現実を出発点としていることを忘れてはならないと心に刻む機会となった。そうした学びを得た後で行われた、経済産業省木野正登様の講義・質疑応答では、復興を目指しながらも、その理想像の脆さや現実の手段の曖昧さなど、復旧ではなく復興を実現する道のりの険しさを冷静に見つめる時間となった。

2日目の伝承館や双葉町産業交流センターでは、予想以上に洗練された大きな建物に驚きつつ、震災当時の様子を生々しく伝える展示とそれを知る人々の生活は、よそ者として訪れた私たちが理解することは出来ず、だからこそ知る努力を目線に注ぐ努力を続けなければならないと感じる体験であった。現状、被災関連施設はある意味でテーマ・パークと化しており、それにより大切なものを失った人々にとっては耐えがたいものであるかも知れないが、復興が思うように進んでいない状況を鑑みると集客という観点では合理的とも言えるジレンマが存在する。震災によって引き起こされた災害の事実を今後どのように捉え、存在させていくのかは非常に難しい問題であり、実際にそれを経験していない人々も、「科学技術や自然を利用し社会を生きていく」ということを今一度立ち止まって考えるべきであるのだと今回の研修を通じて重く感じている。

(山崎 万由佳、国際教養大学 国際教養学部 3年：福島自主研修担当実行委員)



第四章 勉強会

日米学生会議では本会議に向け、分科会単位での週一回の勉強会以外でも参加者や実行委員が自主的に開催する勉強会がある。分科会や自主的に行った議論内容を有識者や実際に事業に携わる人へ質問し、助言をいただく。日米学生会議の過去参加者が積み上げてきた歴史と社会で活躍される皆様のお力添えにより、参加者の学びが叶う。参加は任意であるが第75回会議参加者は興味深い勉強会を提案し、多くの学生が参加した。

台湾勉強会

〈プログラム概要〉

6月に開催される台湾自主研修の前に、参加者の台湾に関する議論の土台を養うため、アラムナイであり現代台湾政治がご専門の吉田知史氏にご講義いただいた。

〈開催日時〉

2023年5月20日(土)

〈活動内容〉

日米会話学院にて講師としてアラムナイの吉田知史様より、「中台関係」が出現した歴史的経緯や台湾におけるリベラルデモクラシーについての講義、質疑応答、議論

〈実行委員感想〉

「中台関係」が出現した歴史的経緯や台湾におけるリベラルデモクラシーなど多岐にわたるテーマを扱った。講演後開催されたご飯会でも新たな議論に花が咲き、非常に実りのある勉強会となった。



内閣官房デジタル田園都市国家構想実現会議事務局勉強会

〈開催日時〉

2023年5月25日(水)

〈開催場所〉

オンライン

〈分科会〉

環境と科学技術分科会

〈参加者感想〉

5月25日(水)、環境と科学技術分科会は、内閣府デジタル田園都市国家構想実現会議事務局とのオンライン勉強会を行った。

デジタル田園都市国家構想とは、「デジタル実装を通じて地方が抱える課題を解決し、誰一人取り残されずすべての人がデジタル化のメリットを享受できる心豊かな暮らしを実現する」という構想である(出典: デジタル田園都市国家構想DEGIDENウェブサイト)。自然と共生したスマートシティ開発の場として、デジタルの力で地方を活性化するというこちらの構想を知り、メールでのやり取りをきっかけとしてオンラインでの勉強会が実現することとなった。

事前に、デジタル田園都市国家構想についての閣議決定事項等についての資料をいただき、構想についての理解を分科会メンバー全体で深めた上で、国家構想事務局様への質問や意見交換等を行った。

貴重なお話を様々な意見交換をする中で、デジタル田園都市国家構想が誕生した背景や、この国家構想は何を目標としているのか、現在の進行状況や今後の想定しうる課題について、分科会メンバーだけでは深掘りできなかったようなことについて、議論の新たな視点や見識を得ることができた。また、デジタルの知見と地方創生を組み合わせることによる影響や、地方を活性化することによる日本の更なる発展の展望等について意見をお伺いすることができ、本会議に向け弊分科会の議論に深みを持たせる必要性を痛感した。

(奥寺 大、名古屋大学 工学部 機械・航空宇宙工学科 2年)

藪中三十二先生との勉強会

〈プログラム概要〉

日米会話学院にて講師に藪中三十二先生をお迎えして勉強会を開催。

〈開催日時〉

2023年 6月28日(水)

〈活動内容〉

レクチャー、質疑応答、議論

〈実行委員感想〉

藪中三十二先生と安全保障や外交について考える勉強会を開催した。勉強会は、ソクラテスメソッドに基づく対話形式で実施され、広島で開催されたG7サミットの意義や今後の自動車産業の行方などに議論が及んだ。また、参加者の断片的な知識をその場でspeak outすることによって、自己に足りない考え方や知識を認識し吸収することの意義を学んだ。勉強会後には、先生と約15名参加者の間でピザを囲んで懇親会を行い、大いに実りある時間を過ごすことができた。

(菊池 宙、東京大学 法学部 4年：実行委員)



国土交通省都市局都市政策課 スマートシティ官民連携プラットフォーム事務局勉強会

〈プログラム概要〉

日本国内のスマートシティ事業における官民連携の実態を理解するために国土交通省都市局都市政策課スマートシティ官民連携プラットフォーム事務局様のご協力のもと、勉強会を行った。

〈開催日時〉

2023年6月30日(金)

〈分科会〉

環境と科学技術分科会（日本側）

〈活動内容〉

レクチャー、質疑応答

〈参加者感想〉

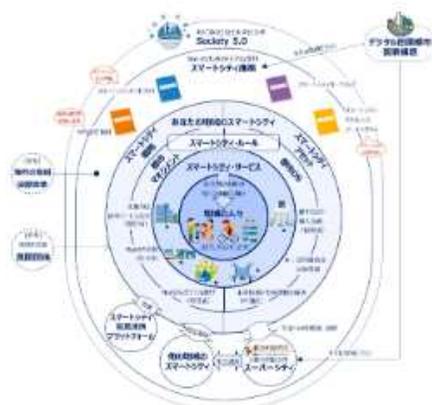
6月30日、環境と科学技術分科会は、スマートシティ官民連携プラットフォーム事務局の方々とオンライン事前勉強会を開催した。スマートシティ官民連携プラットフォームは、スマートシティの取組を産学官連携で加速するために2019年に設立され、企業、大学・研究機関、地方公共団体、関係府省等による取組を支援している組織である。事前勉強会では、様々な専門性を持つ学生が集まっている中で、我が国日本の未来社会像であるSociety 5.0を念頭に、IoT（Internet of Things）やAI（Artificial Intelligence）を活用した最適化した都市の実現に向けた現状・課題・展望を把握し、本会議に向けた知見を深めることを目的とした。

事前勉強会では、他の先進諸国では、国が強力にスマートシティ化を進めているという状況の中で、日本では、「市民中心主義」「ビジョン・課題フォーカス」「分野間・都市間連携の重視」を3つの基本理念として、各地域の特色を生かしながら、スマートシティ化を市民の目線に立ち進めていることを理解した。つまり、理想としては全国に一律にスマートシティを導入することかもしれないが、各地域の課題に応じて、スマートシティの導入の可否を決定してもらっているという。

議論の中で、地域のニーズと科学技術を生かした事例として「見守りカメラ（兵庫県加古川市）」の紹介があった。加古川市では、犯罪を抑止し、市民が安心して子育てできるまち作りを目指して、通学路や学校周辺を中心に「見守りカメラ」を設置している。その効果として2022年は、設置前の2017年と比較して、約4割の犯罪を抑止することにつながった。

第四章 勉強会

最後に、本勉強会を通して、地域の課題に対して、科学技術がどのように貢献し、解決につなげていくのかについて、活発な議論をすることができ、本会議に向けて有意義な時間を過ごすことができた。本分科会一同、お忙しい中、事前勉強会に協力してくださったスマートシティ官民連携プラットフォーム事務局の方々に感謝申し上げたい。



上図：スマートシティ構成要素と様々な取り組み（出典：内閣府）

（佐藤佑樹、宇都宮大学大学院 地域創生科学研究科 博士前期課程1年）

東京ポートシティ竹芝視察

〈プログラム概要〉

スマートシティとは実際どのようなものなのか体験するために、特にスマートシティ化が進んでいる東京ポートシティ竹芝の視察を行った。

〈開催日時〉

2023年7月1日(土)

〈分科会〉

環境と科学技術分科会（日本側）

〈活動内容〉

東京ポートシティ竹芝内の視察

〈実行委員感想〉

「百聞は一見にしかず」を体験した一日だった。弊分科会はこれまでスマートシティについて議論してきたが、それらの議論はインターネット上の記事や論文を基にしたもので、いわゆる机上の空論だったことを強く認識した。私が東京ポートシティ竹芝で経験したものは未来そのものでとても驚いた。建物内を動き回るロボット、無数のセンサーから得られるデータによって建物にいる人の人数やその男女比と年代比、またトイレやお店の混雑情報が表示されることは新時代のビルの姿を示しているように感じた。

(中坊 倫太郎、国際基督教大学 教養学部 2年：実行委員)



KPMG Ignition Tokyo訪問

〈プログラム概要〉

KPMG Ignition Tokyoにて講師に豊田雅丈様、Spencer Oscarson様をお迎えして勉強会を開催。

〈開催日時〉

2023年 7月7日(金)

〈実行委員感想〉

KPMG Ignition Tokyo様とDiversity, Inclusion, Equityと生成AIについて共に考えるコラボセッションを開催した。セッション内ではDiversity, Inclusion, Equityを受け入れることの企業内でのメリットをKPMGで実際に行っている事例と共に考え、ディスカッションを行った。また OpenAI 社の Multi Agent Hide and Seek の事例を基にAIが出来ること、その仕組みを学び、AIとこれからどのように付き合っていくべきなのかディスカッションを行った。セッション後、KPMG Ignition Tokyoの社員の方と交流を行い、参加者はとても実りのある時間を過ごすことができた。

(中坊 倫太郎、国際基督教大学 教養学部 2年：実行委員)



防衛研究所勉強会

〈プログラム概要〉

6月初旬に訪問した航空自衛隊幹部学校、防衛大学校そして台湾研修での学びをきっかけに、安全保障により強い関心を抱いた参加者が自ら企画運営した勉強会である。実際に安全保障の最前線でご活躍されている防衛省防衛研究所の千々和泰明先生と兵頭慎治先生からご講義を受け、議論を交わした。

〈開催日時〉

2023年7月21日(金)

〈活動内容〉

防衛省のシンクタンクであり、日本唯一の国立の安全保障に関する学術研究機関である防衛研究所を訪問し、最前線で活躍されている方々から昨今の世界情勢及び日本における安全保障問題について詳しくレクチャーを受け、議論を行う。

〈参加者感想〉

2日間に渡る安全保障研修をきっかけに、それまでなじみのなかった安全保障について学んでみたいと考え、計画を始めた。過去参加者や実行委員の協力もあり、当日は千々和泰明先生及び兵頭慎治先生から貴重なお話を伺うことができた。

千々和先生からは「安保三文書と日本の防衛」、兵頭先生からは「ウクライナ戦争と東アジアの安全保障」というテーマでご講義いただき、参加者の質問にも答えていただいた。ご講義の中で特に印象深かったのは、図解を用いながら集団的・個別的自衛権に対する日本と国際法上の解釈の違いを非常にわかりやすく説明していただいたことであった。

専門的に学んだことのない分野ではあったが自分の中の安全保障に対する解像度を高める事ができ、これからの学びに対する意欲もさらに高めることができたように思う。

また、このように自主的な勉強会の開催を快く受け入れ、協力してくださった千々和泰明先生・兵頭慎治先生をはじめとする多くの方々にお礼申し上げたい。

(佐野 百美、早稲田大学 国際教養学部 3年：防衛研究所勉強会企画運営担当)

KPMGコンサルティング株式会社馬場功一様との勉強会

〈プログラム概要〉

日本国内のスマートシティ事業の第一人者の一人である、KPMGコンサルティング株式会社の馬場功一様とオンラインで勉強会を行った。

〈開催日時〉

2023年7月24日(月)

〈分科会〉

環境と科学技術分科会（日本側）

〈活動内容〉

馬場様のレクチャー、質疑応答

〈実行委員感想〉

まず日本国内のスマートシティ事業の第一人者の一人である馬場様と勉強会を行わせていただいたことはとても幸運だった。馬場様は世界と日本両方のスマートシティ事業にとっても精通なさっていたため、世界と日本のスマートシティのトレンドがいかに異なるのか、(グリーンとブラウン)詳しく理解することができた。また、これから日本でスマートシティ事業が進んでいく中、どのような変化が起きるのか具体的に学ぶことができ、とても有意義な勉強会であった。

(中坊 倫太郎、国際基督教大学 教養学部 2年：実行委員)

三菱商事事前勉強会

〈プログラム概要および総括〉

本会議の東京サイトで予定している三菱商事株式会社への訪問が、より実りあるものとなるよう、事前研修の機会を活用して会議事業に一貫性をもたせる目的で事前勉強会を実施した。内容は、三菱商事における天然ガス事業の概要や取り巻く事業環境等についてのインプットセッションで、参加者は講師のプレゼンテーションを傾聴し、また時間が許す限り質問を繰り返すなど、非常に有意義な時間を送ることができた。

〈場所〉

三菱商事株式会社 東京本社

〈講師〉

笠井 寛子様（第58回JASC参加者）

〈開催日時〉

2023年7月28日(金)

第五章 本会議

本会議では、日米の学生が約三週間に亘って共同生活を送りながら、日本の都市を巡り、見識を深めつつ各々の議論も進めていく。分科会における議論、フィールドトリップ、文化体験並びに講演会や現地学生との討論、各サイトでのフォーラムを通じて、日米学生会議における学びの集大成とする。

第1サイト：京都



第五章 本会議

〈日程〉

2023年8月2日(水)～11日(金)

〈滞在場所〉

京都市宇多野ユースホテル

〈行程〉

計10日間

8月2日(水)：アメリカ側参加者到着、アイスブレイク

8月3日(木)：写真撮影、開会式

8月4日(金)：自由散策

8月5日(土)：京都外国語大学共同開催ユースフォーラム

(京都外国語大学学生との議論、松田武名誉教授によるご講義)

8月6日(日)：芸舞妓花街文化体験(先斗町芸舞妓さん演舞、ご講演)

8月7日(月)：日本伝統文化体験(裏千家今日庵にて茶道体験、金剛能楽堂にて能鑑賞)

8月8日(火)：フィールドトリップ

(ブルーボトルコーヒー京都カフェ/建仁寺塔頭兩足院 禅体験/

京都国立博物館/株式会社龍村美術織物/南山城村等訪問)

8月9日(水)：食の循環プログラム

(宮崎大学 川島知之教授によるご講義、伊勢あかりのぼーく実食)

8月10日(木)：京都サイトフォーラム

(明野高校関係者によるエコフィールドに関する成果発表、

分科会成果発表)

8月11日(金)：長崎サイトへ移動

【1日目 8月2日(水) アメリカ側参加者到着、顔合わせ】

〔概要/目的〕

これまでオンライン上での交流のみだったアメリカ側参加者と初めて顔を合わせた。実行委員としても日本側参加者28名での運営は慣れていたが、本会議は倍以上の人数をまとめなくてはならないという不安があり、終始心が落ち着かない。食事制限がある参加者もいるため、念入りにお弁当を確認しながら到着を待った。到着したバスから先に降りてきたアメリカ側実行委員と再会を喜び、続々と降りてきた参加者を迎え入れた。一気ににぎやかになった食堂にて宇多野ユースホテルを使用する際のルールや注意点などを説明する。自由時間になると日本側参加者とアメリカ側参加者がお土産を渡したり、SNSを交換する様子が見られる。庭でアイスブレイクが始まり、いよいよ、71名での共同生活が始まったのだと実感した日であった。

〔参加者感想〕

京都サイトに向けて、私は伝統文化との対話、他者との対話、自己との対話を深化させることを目標に掲げた。京都サイトは最も外部を訪問する機会が多いサイトであり、京都の伝統文化を学ぶ機会が豊富に用意されている。このような環境下で、これまで知識としてしか知らなかった伝統文化との対話を行い、その魅力はもちろん、自分たちがどのような部分を承継すべきで、またどのような部分に変革が必要なのかについて思索を深めたい。また、京都サイトは初めて75回会議のJASCerが一堂に会する場でもある。すでに何度も顔を合わせている日本側参加者とも、これから出会うアメリカ側参加者とも自由に意見を交わし、議論百出の期間となることを願う。そして、最も重要なのが自己との対話である。自分が京都という土地、そして魅力的な仲間たちとの交流を通じてどのようなことを考え、どのように変化するのか。この点に私はとても興味があり、徹底的に言語化していきたい。23歳の誕生日を迎えた2023年8月2日に、このような考えを巡らせた。

(田村 航、一橋大学 法学部 法律学科 4年)

直前合宿を終え、アメドリと初めて直接顔を合わせることができた。Zoomで2度、話したことのあるアメドリとの顔合わせは、少し緊張したが、これからJASCが始まるということを実感できるわくわくした瞬間であった。私は久しく海外の同世代と交流していなかったため、英語を使ったコミュニケーションへの不安も大きかった。しかし実際にアメドリと対面すると、これからアメドリと1ヶ月弱一緒に生活し、議論することへの楽しみな気持ちが湧き上がってきた。

(石川 結菜、埼玉医科大学 医学部 3年)



【2日目 8月3日(木) 写真撮影、開会式】

〔概要/目的〕

時差ぼけと夜通しの議論のせいか少し眠そうな様子の参加者たちが正装に着替え、中庭で写真撮影を行った。集合写真と分科会ごとの撮影を終えた後、急ぎ足で開会式が行われる京都市国際交流会館に向かった。開会式では両国主催団体からの挨拶の後、米国大使館総領事Richard Mei, Jr.様よりご挨拶をいただいた。総領事は自ら作成してくださった資料を用い、日米の交友の軌跡をご説明いただいた。岸田文雄内閣総理大臣からもお言葉をいただき、参加者に日米及び世界の平和を担う自覚ができたように思う。基調講演では新幹線の設計に携わった仲津英治様よりご講演をいただき、

第五章 本会議

参加者の中にはご講演に感激し、手紙を送るものもいた。ここから約10日間、学ばせていただく京都市門川大作市長にもご挨拶をいただき、厳かな雰囲気の中で会を終えられた。

第75回日米学生会議 開会式〔式次第〕			
1	開会の辞	第75回日米学生会議 日本側実行委員長	久野 賢登
2	日本側主催団体挨拶	国際教育振興会代表・日米学生会議事務局長	金野洋 様
3	アメリカ側主催団体挨拶	International Student Conferences, Inc.	Deborah Jeong様
4	駐大阪・神戸米国大使館ご挨拶	駐大阪・神戸米国大使館総領事	Richard Mei, Jr.様
5	日米学生会議同窓会ご挨拶	日米学生会議同窓会会長	岡本実 様
6	内閣総理大臣メッセージ代読	日米学生会議同窓会幹事長	富川秀二 様
7	実行委員長挨拶	第75回日米学生会議 日本側実行委員長	久野 賢登
8	基調講演	NPO法人エコネット 近畿理事	仲津英治 様
9	京都市長ご挨拶	京都市長	門川大作 様
10	閉会の辞	第75回日米学生会議 アメリカ側実行委員長	Shun Sakai



(京都市 門川大作 市長)



(中央：仲津英治 様)



〔参加者感想〕

本会議の始まりを告げる1日であった。午前は、海を渡ってきたばかりの仲間たちと正装で写真を撮った。出会ったばかりの同志たちと正装で顔を合わせるの少し違和感があり、撮れた写真はきっと最終日に見たら笑ってしまうほど、表情が硬くなっている気がする。昼から京都市を横断して本会議開会式に赴いた。多方面の方々からのご支援があって今の私たちの活動が成り立っていることを実感し、気を引き締め直すと共に、日本が誇る技術・新幹線について深く学び、濃密な時間を過ごすことができた。その後はアメリカの学生と初めて過ごすフリーの時間であった。日本の良

さを伝えるとしたら何がベストなのだろうと当初は悩みながらも、結局は学生同士に国籍や言語の違いなど一切関係無く、一緒に楽しい時間を過ごすことができたと信じている。改めずとも、カラフルなバックグラウンドを抱えた学生が同じ場所に集まり、3週間を共に過ごしながら、考えを共有する生活は実に奇妙である。この生活の中で私たちがどのような変化を迎えるのか、3週間後の自分に答えを早く聞きたいような、ずっと知りたくないような、そのような気持ちで帰路についた。

(渡邊 めい、京都大学 文学部 科目等履修生)



【3日目 8月4日(金) 自由散策】

〔概要/目的〕

灼熱の京都で過ごし早3日、参加者の疲れが少しずつ溜まっていた。この日はこれから始まるプログラムに備え、各自準備する一日となった。中には暑さに負けず、京都の観光地を訪れる者もいた。金閣寺や銀閣寺、南禅寺や先斗町に清水寺、参加者からの話を聞くと、歴史ある京都の観光地がどんどん列挙された。京都の幅広さに感動するとともに、これから学ぶ京都に想いを膨らませた。夕方になると参加者が買って来た食材でカレーを作っている様子を見かけた。言語の壁を越えられるのはスポーツだけでなく、共に食材を切り作る料理でもあるのだと感じた。

〔参加者感想〕

8月4日からちょうど1ヶ月経った現在、報告書を書いている為、正直あまり覚えていないが、以下のような感じであったと思う。

12時頃、起床。

私の心の声「んー昼かぁ...でもまだ眠いなぁ。もうちょっと寝よう。スヤスヤ Zzzz...」

14時頃、再起床。

私の心の声「んー14時かぁ。宿のダイニングルームでおにぎりでも食べるかぁ...もぐもぐ。あ、そういえば今日の夜は大阪に友達が集まるから、そこに行く予定だったなぁ。でも今日の夜はRTミーティングがあるのかぁ。めんどくさいなぁ...。よし、とりあえずRTのECに確認してみよう」
私「あのさ、今日の夜に大阪に行きたいんだけど、RTミーティングをスキップして大阪行ってきていい？」

EC「...ゴチゴチ...除名されたいの？」

私の心の声「...除名...だと!？」

私「RTミーティング出ます。大阪行きません。除名されたくないです。」

はっきり言って困った。大阪に行けないとなると夜まで暇になってしまう。とはいえ、京都でやることもなく、だらだらしているのも勿体無いので、宿から近い金閣寺に行ってみることにした。うだる暑さの中、バスに揺られつつ、金閣寺に着いた。人生3回目の金閣は、残念ながら何の感動もなかった。宿に帰ってからは、確か大人数でカレーを作って食べた気がする。なんだかんだ楽しい1日だった。

(上原 賢斗、東京外国語大学 国際社会学部 3年)



【4日目 8月5日(土) 京都外国語大学共同開催ユースフォーラム】

〔概要/目的〕

いよいよ始まった京都外国語大学共同開催ユースフォーラム。京都サイト実行委員はこのプログラムに並々ならぬ想いがあった。企画段階から何度も先方と打合せを重ね、多くご迷惑をおかけして準備をした。当日は小野隆啓学長のご挨拶に始まり、アイスブレイクを通じて一気に京都外国語大学の学生さん16名と参加者の距離が縮まった。「伝統と革新」をテーマに議論をはじめ、昼食後は京都外国語大学名誉教授の松田武氏のご講義をいただいた。ご講義を基にグローバル化について再び議論を行い、ユースフォーラムを終えた。このユースフォーラムを機に、京都がどのような歴史を持ち、革新をし続けているのかを学び、今後世界はどのように歩いていくのか議論を重ねた。実行委員としてもこのフォーラムを大きなトラブルなく無事に終えられたことは何よりの達成感であり、熱い議論を行う参加者の様子を見て、「これがJASCの姿だ」と感じた瞬間でもあった。

ユースフォーラム〔式次第〕			
1	開会の辞	京都外国語大学学長	小野隆啓 様
2	主催団体挨拶	国際教育振興会代表・ 日米学生会議事務局長	金野洋 様
3	交流「自己紹介」		
4	昼食		
5	ご講義「Globalization and Community Engagement」	京都外国語大学名誉教授	松田武 氏
6	議論「Globalization: Cultural Impact and Community/Individual Engagement」		
7	議論成果発表		
8	閉会の辞	第75回日米学生会議 アメリカ側実行委員長	Shun Sakai

〔参加者感想〕

本会議4日目は「言語を通して世界の平和を」の下で学ぶ京都外国語大学の16名の学生と共に議論を深めた。普段のJASCer同士の議論に外からの視点が加わったことで、京都の町を核に、様々な角度から深みのある議論を重ねることができ、非常に有意義な1日となった。

午前の議論のテーマは「Tradition and Innovation（伝統と革新）」。かつては日本の中心であった京都に残る伝統と文化、そして、グローバル化と科学技術の発展による革新の狭間に生きる私たちそれぞれの想いを共有した。私は、伝統と文化を継承しつつも、時代の流れと共に、革新をもたらすことで、それらが混ざり合い、新たな伝統と文化が生まれ出されていくと考えた。

午後の議論のテーマは「Globalization: Cultural Impact and Community Engagement（グローバル化：文化の影響とコミュニティ・エンゲージメント）」。議論に先立ち、京都外国語大学名誉教授の松田武氏による講義を受け、グローバル時代におけるコミュニティ・エンゲージメントの必要性について学んだ。議論では、コミュニティ・エンゲージメントの重要性について理解を示す一方で、現代社会は小手先だけの対応では解決できない複雑な問題が絡み合っており、人々が Global Citizens（地球市民）として行動していくことの難しさについても話題が及んだ。

京都外国語大学の学生との議論を通して、明日から実践を通して学ぶ京都の伝統と文化の背景について理解を深めることができたと共に、日米両国のグローバルな視野からも伝統と文化の価値を再考する実りある時間となった。

（佐藤 佑樹、宇都宮大学大学院 地域創生科学研究科 博士前期課程 1年）



【5日目 8月6日(日) 芸舞妓花街文化体験】

〔概要/目的〕

一度は諦めた芸舞妓花街文化体験であるが、ご縁があり実施することができた。京都といえば、古都や寺社仏閣、和食に抹茶など様々なイメージが沸く。その中でも芸舞妓の花街文化は、外国人がイメージする日本文化そのものではないか。京都は五つの花街があり、花街それぞれの特色がある。お世話になった先斗町は鴨川の側であることから水にまつわる行事が多い。先斗町の芸者さんと舞妓さん二名による唄と踊りは参加者らを魅了した。踊っている時の美しい表情とは裏腹にインタビューでは、あどけない表情を見せる姿はより舞妓さんの魅力を感じさせる機会となった。唄やお着物の丁寧な説明のおかげで、アメリカ側参加者はもちろん日本側参加者も普段触れることのない日本文化を味わうことができ充実した時間となった。その後に行われた議論では、近年話題となっている花街文化の問題点や現実と過去のギャップなど、活発な意見交換が行われた。伝統というベールに覆われ、議論されることがあまりない伝統文化であるが、実際に見て聞いたことで新たな意見や考え方が参加者の中で生まれたことを願う。

〔参加者感想〕

芸舞妓花街文化体験では、初めて生で京都の伝統文化である舞妓の踊りや稽古の三味線を鑑賞した。この時注目したのは市琴さんともみ紘さん2人の舞妓さんの仕草や表情の作り方である。顔の動かし方や首の使い方、手首や五指の揃い具合、腰の使い方など、あらゆる動きが洗練されていた。特に舞妓さんらの「女性らしさ」を追求した所作に強い感動を覚えた。昨今は「男らしさ」や「女らしさ」といった性別の違いを強調するような要素を要求することに、強く反発する声が大きくなっている印象を受ける。確かに生物学的な男性にせよ女性にせよ、様々な価値観や特徴を持った人たちがいることは事実であるし、全ての人々に各々「男らしさ」や「女らしさ」を求めることは避けるべきだ。しかしこの「舞妓」および「芸妓」という業界においては、「女性らしさ」の徹底的な追求こそが文化的かつ職業的な価値なのだ。所作、表情、接客、話術など、あらゆる面において理想的な「女性らしさ」を体現し、その美しさや魅力に対価として金銭を支払うのが京都における「舞妓・芸妓」のあり方なのだろう。故に「舞妓・芸妓」は究極のサービス業であるといえる。この業種が長い間日本で、殊京都において廃れずに受け継がれ続けてきたのは「女性」として

のプロフェッショナルである「舞妓・芸妓」の努力と実力の賜物なのだ。巷で氾濫するような風俗店やキャバクラなども「女性」によるサービスであることに変わりはないが、決定的に違う点はそこに「人間的美」があるか否かであると考えられる。前提として、そういった職種を差別するつもりは一切ない。職業的特質の差異としてここでは記述するが、所作の美しさ、芸の美しさ、話術の美しさなど、「舞妓・芸妓」の全ての側面において追求されていたのは「美」であり、それらを通じて「お客様に喜んでいただく」というおもてなしをすることが「舞妓・芸妓」の本質だ。その「美」に魅せられるからこそ根強いファンがいるのであり、そういった支援者が居続けるからこそこの文化が長い間現代に至るまで残り続けてきたのだろう。もちろん「女性を消費する文化」であることに変わりはない。しかしそこにあるのは単なる女性の性的な搾取や消費などではなく、彼女らの努力と修練による人間的な美しさを楽しむという消費のあり方なのだ。そこには女性へのリスペクトがあり、サービスを提供する舞妓さんや芸妓さんにはそれ故のプライドがある。この研修を経て「舞妓・芸妓」が持つ魅力と、それが継承され続けてきた理由について理解を深めることができた。

(佐藤 天音、防衛大学校 人間文化学科 4年)



【6日目 8月7日(月) 日本文化体験】

〈裏千家今日庵〉

〔概要/目的〕

日本文化の代表格といっても過言ではない茶の湯を、世界的に展開する裏千家にて体験させていただいた。裏千家の代表的茶室である今日庵にて目の前でお茶をたてていただく、という大変珍しい機会に参加者らは緊張の面持ちであった。お茶をたてる一連の行為の中に込められた意味、伝統文化とは無縁の様に思える合理性や効率を重んじる精神についてもお教えいただく。お茶が出来上がるまでの行程やそれに込められた意味を知ってからお茶はまた一味違うものを感じられるだろう。お茶を味わう他には、茶室の見学もさせていただいた。なぜこの配置なのか、壁に書かれた文字は何を意味するのか、茶室が使われていた時代にはどのような人々がそこで時間を過ごしていたのか、参加者の質問とともに茶の湯を立体的に感じる貴重な文化体験となった。

〔参加者感想〕

裏千家に行ってきた。京都市にある裏千家は和式建物に囲まれており、京都特有の雰囲気と和を感じられる場所だった。しかし、その一方で、伝統文化を守ることと革新・イノベーションはかけ離れているのだと再び感じるきっかけにもなった。

伝統と歴史を守る意義はあると思う。歴史と伝統が国のアイデンティティになる場合もある。また、芸術の1つの形として残すこともとても重要である。しかし、守るべき伝統と革新が必要な場面をどう決めていくか、それについては今後も議論し続けて決めていかなければならない。

(チャユナ、順天堂大学 医学部 医学科 4年)

香り豊かなお抹茶と一つ一つ異なる美しい絵柄の茶碗、季節を感じるお茶菓子や静かな茶室に響く風に揺れる葉の音。見て、聞いて、嗅いで、触って、味わって、裏千家ではまさに五感全てを使った体験であった。総勢70名以上と大所帯であったにも関わらず、参加者全員がご講義に聞き入り、お茶をいただいた際は「お先に」と伝え、それぞれが心静かにお茶を味わった。ご講義で所作一つ一つに意味があり、精神が込められているとお話されていた。この迷いのない所作を繰り返し行うことが、伝統を受け継ぐことに繋がるのではないかと感じた。伝統を受け継ぐ、ということは少しずつ変化していくこともあると京都サイトを通じて学んできた。時代の流れに少しずつ適応しつつも、核となる精神は変わらない。この変化するものと絶えず受け継ぐものの境界が携わる人々の想いによって明確になっているからこそ、日本を代表する伝統文化として現代でも色あせないのではないかと感じた。洗練された所作と五感で楽しむ茶道は日々せわしなく活動する我々を休ませてくれる存在である。

(玉眞 優里、法政大学 人間環境学部 3年：京都サイト担当実行委員)



〈金剛能楽堂〉

〔概要/目的〕

例年大変お世話になっている金剛能楽堂で日本伝統文化の能を鑑賞した。会場に響き渡る唄とダイナミックでありながら繊細な舞に感激した。日本伝統文化と言いつつも、あまり身近な存在ではない能。能楽師の舞に対する想いや今置かれている現状、伝統を守り続ける難しさや大切さに触れた機会であった。公演が終わっても質問が止まらず、参加者たちの好奇心にも驚かされた。能を説

第五章 本会議

明するうえでの複雑な日本語も、丁寧に通訳して下さったおかげで、アメリカ側参加者も能を堪能できたに違いない。

〔参加者感想〕

金剛能楽堂での能楽鑑賞は、私の日本の伝統芸能に対する印象を大きく変えたものとなった。まず、これまでの私にとって能面＝能であるという印象はあまり強くなく、これまでの人生で日本の伝統芸能の特徴を意識する機会が少ないことを改めて感じた。能面が役作りに与える宗教的な影響は他の伝統芸能や他国の演劇とは異なる特徴だと思った。普段から伝統芸能に触れる習慣がないことは勿体無いと感じた、JASCを通して学生のうちに触れることができよかったですと感じた。また、役作りの観点では、「お面を先生だと思う」という感覚を持って、お面が教えてくれることと向き合うことに時間を割くとおっしゃっていた。役者の方にお伺いしてみたところ、お二人ともご自身のことを未熟だと考えており、まだ神様の力を借りて満足のいく演技ができた経験はないとおっしゃっていた。能の演技が能面の力を借りてするものであれば、どんな演技になるかは役者の力量次第であるとも言える。個人差や時代の人々が持つ精神力によって変わるとしたら、伝統芸能とはいえ、変化や血縁などの要素を重要視せず、時代に合わせて柔軟な変化を遂げているのだと思った。

(鈴木 涼、国際教養大学 国際教養学部 2年)



【7日目 8月8日(火) フィールドトリップ】

〔概要/目的〕

この日は、分科会ごとに異なる訪問先に趣き、それぞれの希望に沿った学びを行った。その他のプログラムでは、全参加者が同じ場所で同じことを体験するため、分科会ごとの特色による解釈にて学びを行うことが求められたが、この日は分科会によって学ぶ内容が異なるため、より分科会の視点を活用し、フォーラムでの発表などに生かすという目的である。また、小規模での活動となったため、参加者にとってはハードスケジュールの中で少しリフレッシュする機会にもなったであろう。

〈ブルーボトルコーヒー京都カフェ〉文化と芸術分科会

〔参加者感想〕

この日はブルーボトルコーヒー京都カフェを訪問した。‘訪問する’と言うと一気に堅苦しく真面目なオフィシャルなイメージがついてしまうが、実際のところ、我々行って美味しいコーヒーを飲み、楽しんだ。言葉ひとつで、イメージが変わるため何かを表現するにはその準備に一苦労だ。この日訪れたブルーボトルコーヒー京都カフェでは、‘融合’というコンセプトを正確に表現すべく、砂利を建物外にのみ配置するのではなく建物内にも配置したり、日本建築によくみられる50cmの上がりやを壊し平にしたりと細部にもこだわりがみられた。アイスコーヒーは変わらぬ真っ直ぐなおいしさでなぜかホッとした。

（岡田 潤、高根大学 生物資源科学部 3年；実行委員）



〈建仁寺塔頭両足院 禅体験〉環境と科学技術分科会

〔参加者感想〕

京都に来て7日目になる今日、環境と科学技術RTのメンバーである私たちは禅体験をしに建仁寺塔頭両足院へと向かった。本日の目的は喧騒にまみれて時間に追われる日々を忘れて、自然と調和し、穏やかな心を取り戻す事である。蟬が泣き、木々が囁く美しい庭園を前に副住職さんが教えてくださった坐禅の方法は以下の通りである。まずは、リラックスした状態で目を少し閉じ、視覚情報をシャットアウトする。研ぎ澄まされた嗅覚と聴覚をもって自分を取り囲む自然環境を認識し、自然を感じることができたら、次は自分自身の身体の状態を確認する。その際、どちらかの手を前に突き出してキープすることで、いかに筋肉が動き血が流れるかを確認することができ、自分の体のコンディションを確かめる第一歩になる。最後に、自分の精神状態に注目し、乱れがあればそれを要素分解し、最終的に消化することで雑念が消え自然と調和することができる。自然、肉体、そして精神という順番が大事であり、この順番に意識を向ける事で禅による精神の安らぎがもたらされるのである。坐禅は順番を守れば、家でも実践できるという事なので皆さんも試してみてもいいだろうか。

(小金山 智弘、慶應義塾大学 環境情報学部 環境情報学科 2年)



〈京都国立博物館〉国際政治と日米関係分科会、言葉と哲学分科会、
社会階層と多様性分科会

〔参加者感想〕

社会階層、国際政治、言葉RTは京都国立博物館の降谷哲男さんによる茶の湯の成り立ちに関する講義を受けた。日本文化史の中でどうやって茶道は宗教的意味合いの強い行為から楽しむエンターテイメントになり、客をもてなす行為と変化していたのか、その中でどうやって茶道文化や客をもてなす上での侘び寂びの精神が広まったかなどについてご教授いただいた。その後博物館で展示されている名碗と呼ばれる茶碗を鑑賞した。1日を通して名碗は亭主と客を、茶道の文化を次世代へと、時代とともに変化しながら繋いできた道具であり、茶道はそれらの様々な道具を組み合わせた総合芸術であることを肌で感じた。一方、実際に名碗を鑑賞している間、前日の能役者さんの講義でおっしゃってた「道具は使ってこそ輝く」という考え方が頭の片隅から離れなかった。より良い状態で道具を保存し、次世代も鑑賞できるように保存する文化の守り方と実際に茶会で道具としての役目を真っ当する守り方など様々な方法があることを実感した。文化を次世代に継承する際、文化のどの要素を守り受け継ぐ優先順位が高いのかについて考えさせられる機会になった。

(バック キャスリーン 光、国際基督教大学 教養学部 アーツ・サイエンス学科 2年)



〈株式会社龍村美術織物〉法と道德分科会

〔参加者感想〕

この日、法と道德分科会は、龍村美術織物様の烏丸工場を訪問した。ここは、京都の伝統工芸品である西陣織を製造する工場だ。担当者の方から工場の歴史等について説明をいただき、実際に製造するところを見せていただいた。あのクリスチャン・ディオールがドレスに採用したこともあるというその生地は、一点一点職人によって丁寧に制作されており、圧倒的なクオリティを誇っていた。

その後、本社のショールームに伺った。飾られた製品は確かに高価だが、どれも「美術織物」の名にふさわしい美しさで、その製造の手間を知らずとも、価格以上の価値を感じられるものだった。

龍村美術織物様には多くの職人が在籍しているものの、西陣織業界全体としては、職人不足の傾向も見られるようだ。古くからの文化を大切にすべきという道德からではなく、純粋に、このような素晴らしい技術が継承されていくことを願った。

(村上 太一、慶應義塾大学 法学部 法律学科 4年)



〈南山城村等訪問〉持続可能なビジネス分科会

〔参加者感想〕

今日は、FTDayであり、それぞれの分科会が各々の行きたいところへ旅に出た。

私の所属する持続可能なビジネス分科会は、京都の唯一の村である南山城村を訪問し、貴重な経験を積んだ。南山城では、村の方々との会食、茶畑・田んぼ・ブルーベリー農園への見学を行った。会食では、地元で獲れた鹿肉、野菜、お米を使った食事をいただいた。それは、頬が落ちるほど美味しいご飯で、思わず3杯もおかわりをしてしまった。これほどまでにご飯が美味しいわけは、「水のきれいさ」にあった。南山城は大自然の中に位置しており、何にも汚されていない水が流れている。そして、自然に近い水であればあるほど美味しい農作物ができる。南山城村への訪問を通じて、社会が美味しいご飯よりも効率的なご飯しか選べなくなってしまう前に、自然との共存について考え直さなければならないと強く感じた。

(佐々木 妙子、創価大学 経済学部 経済学科 3年)



【8日目 8月9日(水) 食の循環プログラム】

〔概要/目的〕

これまで当会議で勉強する機会が少なかった「食」。私たちの口に入るものはどのような道筋を辿り、栄養となっているのか。考えてみても中々思いつかない。その状況に対する実行委員の危機意識や違和感から始まったプログラムであった。午前中は宮崎大学川島知之教授にエコフィードに関するご講演をいただいたのち、午後にはエコフィードで育てられた豚をいただいた。実行委員が調理を始めると、豚肉の香ばしいにおいに誘われ、続々と参加者らがキッチンに集まってきた。私はまだかまだかとせかさながら、調理する。おなかを空かせた参加者は、早口であるがしっかりと「いただきます」と言い、豚肉を頬張った。味付けは至ってシンプルであったが、香り豊かでとても美味しかった。ベジタリアンやヴィーガンなど様々な選択肢がある中で、肉をいただくという行為は、生産者のどのような想いや工夫が詰まっているかを感じる機会でもある。生産者と消費者の距離が遠くなっている中、改めて「食」について考えるきっかけとなれば嬉しい。今日も手を合わせて「いただきます」「ごちそうさま」を感謝を込めて言えただろうか。

〔参加者感想〕

食循環について、「エコフィード」の概念と合わせて宮崎大学川島知之教授にご講義いただいた。講義の初めで「Itadakimasu」「Mottainai」などの言葉に触れ、日本独自の概念について学んだ後、宮崎大学で実際に行われている取り組みと日本におけるエコフィードの可能性について教示していただいた。夕食では実際にエコフィードを通して育てられた豚肉をいただき、参加者皆で「Itadakimasu!」と食のありがたみに感謝を示し、美味しい豚肉を堪能した。エコフィードがこれから先も日本全国に広がるための一つの課題として、やはり消費者のインセンティブが明確でないことが挙げられるが、消費者がエコフィードの仕組み（例えばコンビニの食品廃棄物を飼料として利用する）をより深く知ることによって、新しい取り組みに関する理解も深まり、環境問題への意識も高まるのではないか。

(鈴木 貫正、慶應義塾大学 経済学部 1年)



【9日目 8月10日(木) 京都サイトフォーラム】

第75回日米学生会議 京都サイトフォーラム〔式次第〕		
1	開会の辞	第75回日米学生会議 アメリカ側実行委員長 Shun Sakai
2	エコフィードに関する取り組み発表	三重大学 金谷かぐら 宮崎大学 宮本望愛 三重県立明野高等学校 神森快、平松巧、藤岡美陽
3	分科会発表	
4	日本側参加者挨拶	早稲田大学 国際教養学部 3年 佐野 百美
5	アメリカ国側参加者挨拶	University of California, Berkeley Cognitive Science, Pre-Medicine Shine Lee
6	実行委員長挨拶	第75回日米学生会議 アメリカ側実行委員長 Shun Sakai
7	閉会の辞	第75回日米学生会議 アメリカ側副実行委員長 Charles Campbell



〔概要/目的〕

京都サイトフォーラムは、本会議のなかで最初の議論の成果発表の場であった。今までのプログラムでは、個人が主体となって学ぶ場面が多かったが、フォーラムでは分科会という括りで学びを表現する。毎晩メンバーと白熱した議論を交わし、納得のいく形を目指して構成された各分科会の発表は、互いに刺激となり、別の分科会の発表内容について休憩時間に議論が行われるほどであった。本会議前の議論、そして京都にて顔を合わせ、共に学んだ経験を総括するという目標はおおむね達成されたように思える。また、このフォーラムでの発表が、次の目的地、長崎での学びや東京でのファイナルフォーラムまで見据えて、今後の会議にてどのような行動をしていくかに目を向ける機会ともなった。

〔参加者感想〕

今日は本会議初のサイトフォーラムだった。8月2日にアメリカ側参加者と出会ってから様々なプログラムに参加し、ディスカッションした結晶を発表する場であった。まず、明野高校の関係者の方々からエコフィードや草花栽培についてのプレゼンを聞いたのち、RTごとの発表が始まった。ChatGPTとの会話に似た形式で発表するRT、舞妓・裏千家・能といった伝統芸能に触れたプログラムから学んだことを包括的に発表したRTなど、どの発表も京都で得た経験を独自の角度から分析できていたように感じた。発表を聞き、私は京都で過ごした日々は今まで経験したことがないものを初めて経験する機会に恵まれた期間であっただけでなく、これから2週間かけてさらに互いのことを知っていくための最初の一步を踏み出せた期間であったと思う。

(佐野 百美、早稲田大学 国際教養学部 3年)

〈京都サイトを振り返って〉

〔参加者感想〕

「伝統と革新」をテーマに始まった京都サイトプログラム。

「伝統」とは何か、そして、それはどこまで保護されていて（現実）、どこまで保護されるべきなのか（理想）。この問いは、京都サイトフォーラムのプレゼンテーションにて、私が最後に投げかけたものだ。

例えば、教育の義務化によって、舞妓さんになれる年齢が10歳から15歳に引き上げられた。その一方で、着物の肩上げ・裾上げが未成年であることを示しているのにも関わらず、舞妓さんの未成年飲酒がいまだに伝統として正当化されている。つまり、これは伝統が法律より優先されたケースと考えられる。

また、京都サイトフォーラムにおいては、伝統を保護していく上で「良きものを残し、悪きものは無くすべき」との主張が見られたが、その時々、歴史的コンテキストや社会規範によって定義自体が変わる中、何をもちょう良い・悪いと区分できるのであろうか。

次に「革新」について触れたい。私ははじめ、「伝統」と「革新」を二項対立のように捉えていたが、「伝統」はむしろ「革新」にもなりうることを実感した。例えば、能役者は700年前から受け継がれてきた能面を使い、能を披露する。「遺産は唯一無二のものだから、壊してはいけない、大切に保管しなければならない」という固定概念には囚われず、能役者と能面が共に舞台上で輝

第五章 本会議

き、壊れたら修復しさせるといったサイクルが、まさに生きた「伝統」であり、「革新」を体現してきたと言えよう。

生涯にわたり、能役者は能面と向き合い、伝統の意味を模索していくようだが、私たちは「伝統」とどう向き合っていくべきなのだろうか。また、「伝統」はどう保護されるべきなのだろうか。

一番身近な「伝統」の例として、「言語」が挙げられると思う。言葉は人々の思想や文化を基に紡がれる。日本語のコンテキストを英語で完全には表現できないように、それぞれの言語が特有のコアバリューを保持している。茶道で学んだ「侘び寂び」は英語でどう表現できるか。「陰陽五行」はどうか。

その一方で、直訳はできなくとも、その文化のコアバリューを異なる言語圏に住む人々、アメリカ人に伝えられる媒体もまた「言語」である。「どうしてこういう地名なの?」「なんで羊羹ってこういう漢字を書くの?」というアメリカの素朴な疑問や各々が自分のエピソードを漢字に添える漢字ミュージアムの「今、あなたに贈りたい漢字コンテスト」の展示。こうした疑問や展示を通じ、自分が普段何気なく発する言葉の節々に込められた意味に、より着目したいと考えるようになった。

また、「保護」よりも‘appreciate’すると言った方が適切かもしれない。Appreciateには、「感謝する」や「真価を認める」といった意味があるが、既存の伝統、ここでいえば「言語」を、自分なりに解釈し、自分の日常生活に落とし込んで「感謝・認識」することで、伝統と向き合えるのかもしれない。

(宮本 希、国際教養大学 国際教養学部 グローバルスタディズ領域2年)



〔サイト総括：実行委員〕

古き良き伝統ある京都で第75回日米学生会議は幕を開けた。4年ぶりの日本対面開催であり、75回という節目である今会議は挑戦の連続であった。

軸となる「文化」への学びをより実りあるものにするため、固定概念として存在する「美」の問い直し、京都という土地で伝統や革新の共存や繋ぐということとはなにか、などプログラムごとにテーマを設けた。JASCer以外の京都在住の学生とともに京都の特異性について議論したり、実際に芸舞妓さんの踊りを鑑賞し、感じたことを想いのままに議論するなど、机上の空論にならぬよう参加者の五感全てを刺激する工夫をした。実際のプログラムでは「美」「伝統」「革新」「産業」「食」「自然」など様々な学びの要素があった。プログラムで関わる方々の京都人としてのプライドを持ちながら、伝統を現代に引き継ぐための数え切れない創意をみた。日米両参加者、奥深い日本の伝統に触れ圧倒されたことだろう。同時に日本伝統文化が、いくつもの葛藤とともに次世代に受け継がれていることを実感したのではないか。

各プログラム終了後、良い面ばかりではなく、伝統や文化という言葉で包み隠されていた負の側面にも触れた熱い議論が展開された。学生という何にも縛られない立場だからこそ、行うことができた素直な議論でもあったと考える。また、今後約3週間にわたり続く本会議をどのように過ごしていくか、実行委員はもちろん、参加者同士も考える機会がいくつもあった。多様なバックグラウンドを持つ人々と「学生」という繋がりのみで、京都で始まった衣食住を伴う会議は時にストレスを感じた瞬間もあるだろう。しかしながら、ただの異文化交流という言葉では片づけられないほどのぶつかり、そこから生まれる新たな学びがあったと信じている。

サイトテーマである「黎明」には夜が明ける、新しい時代が始まるという意味がある。参加者の目を追うことに打ち解け互いの話に明け暮れる様子は、まさにコロナ禍のオンライン交流という長い長いもどかしい夜が明け、日米の将来を担うであろう若者らのはじまりであった。

京都サイトへご尽力くださった皆様に感謝申し上げます。1年にわたり、大変お世話になりました。

(玉眞 優里、法政大学 人間環境学部 3年：京都サイト実行委員)

第2サイト：長崎



〈日程〉

2023年8月11日(金)～17日(木)

〈滞在場所〉

佐世保市：長崎県立佐世保青少年の天地

長崎市：長崎にっしょうかん

〈行程〉

計7日間

8月11日(金)：京都サイトから移動

8月12日(土)：安全保障プログラム（海上自衛隊佐世保地方統監部によるご講義、
旧海軍防空指揮所見学/佐世保商工会議所によるご講義）、BBQ

8月13日(日)：自由散策

8月14日(月)：佐世保市から長崎市へ移動

平和プログラム

（被爆者によるご講演/長崎原爆資料館・長崎市平和会館訪問）

8月15日(火)：企画委員協働プログラム（長崎歴史文化博物館訪問）

長崎大学核兵器廃絶研究センター（RECNA）吉田文彦所長によるご講義

8月16日(水)：長崎サイトフォーラム、長崎サイトご協力者様との交流会

8月17日(木)：東京サイトへ移動

【10日目 8月11日(金) 移動日】

〔概要/目的〕

伝統と革新に関して多くの学びを得た京都サイトを早朝に出発し、日本側参加者、アメリカ側参加者はそれぞれ別の時間に出発する飛行機であったため、バスや長崎の宿に到着するまで日米の参加者が分かれて行動した。久しぶりに実行委員として参加者に対してすべての指示を日本語で行い、その結果、日米学生会議の公用語が英語である意義、第二言語で議論する際の弊害などと議論のトピックが広がる。京都とは違った暑さや趣、景色が私たちを迎えてくれ、改めて新たな土地に来たのだという実感がわいた。自然豊かな佐世保青少年の天地では夜が更けずとも涼しく、この日公式プログラムはなかったため、外で体を動かす、自室で静かに過ごすなど各々がリフレッシュをする良い機会になった。

〔参加者感想〕

宇多野ユースホステルから朝 6時発の、ジャパデリを載せたバスの中はとても静かだった。京都サイトは、ジャパデリと春合宿以来に再会するワクワク、アメデリとの顔合わせ、そして多くのプログラムを通じて「伝統と革新」というテーマについて考えるきっかけとなり、濃い期間だった。宇多野ユースホステルではハンモックやソファなどの公共スペースが多かったため、プログラム外の時間でも参加者同士の交流が盛んで、JASCの醍醐味とも言える議論で参加者同士で更に親交を深めた。そんな京都サイトでの思い出を一つひとつ思い浮かべながら、バス移動中皆眠りに落ちた。

大阪国際空港に着き、手荷物預けを終え、スタイベンドでチーズケーキなどのお土産やお昼を買ったあと、飛行機に搭乗して再び熟睡。着陸前の機内アナウンスで日が覚めると、目の前には、京都とは全く違った、長崎のエキゾチックな街並みと景色が視界に入った。佐世保青少年の天地によりやく到着してからのフリータイムでは、昼寝やスポーツなどを満喫した。京都で感じたような蒸し暑さはなく、青少年の天地は場所の関係なのか、とても涼しく夜には綺麗な星空を見ることができた。長崎サイトでどんな経験をするのだろうか、残りのJASCをどんなものにしたいのか、期待を膨らませながら、長崎サイトのスタートを迎えた。

(孫 望舒、国際基督教大学 教養学部 アーツ・サイエンス学科 1年)



【11日目 8月12日(土) 安全保障プログラム、BBQ】

〈佐世保商工会議所〉

〔概要/目的〕

佐世保市と米軍の経済的な関わりを学ぶことで、在日米軍基地の存在が地元と与える影響への理解を深める。米軍基地の存在は、地域経済にどのような影響を与えているのか、それは日米関係全体にどのような影響を与えているのか、という問いを探求することを目的とする。本プログラムでは実際に佐世保商工会議所を訪問し、米軍と佐世保市の経済的関係や佐世保商工会議所の取り組み、今後の課題についてご講義いただく。それを通じて理解を深め、米軍基地と地元の関係、しいては日米関係の今後について議論する一助にしたい。

〔参加者感想〕

佐世保自衛隊に向かう人が大半の中、私たちは佐世保商工会議所を訪れ、佐世保と米軍基地の関係について学んだ。米軍がもたらした経済効果や市民の英語教育への関心向上など、様々な側面において佐世保市民の生活に影響を与えているのを見て、一つの港町が軍の駐在によって大きな変貌を遂げつつあることに驚き、かつ米軍との共存共栄を選じた佐世保市にとって、外国人は隣人のような存在であると語っていた。この新しい発見を心に留めて、私たちの佐世保市、そして長崎県での学びが始まった。

(李文佳、慶應義塾大学 総合政策学部 総合政策学科 2年)



〈海上自衛隊佐世保地方統監部、旧海軍防空指揮所見学〉

〔概要/目的〕

米海軍、海上自衛隊が所在する本州最南端の重要拠点である佐世保基地を擁し、陸上自衛隊水陸機動団の拠点も設置されている長崎は、日本の安全保障の最前線の一つと位置付けられよう。本プログラムでは、海上自衛隊見学やご講演等により対話や体験、見学を通じた生きた知見を提供する。それは、今後の日米関係のあり方を安全保障の側面から「思索」する上で大きな意義を持つと考えられる。

〔参加者感想〕

ジリジリとした日差しに灼かれながら、海上自衛隊佐世保地方統監部を訪問した。

統監部では、管理部総務課長の荒木慎一二佐から、佐世保地方統監部の歴史や任務、隷下諸部隊について説明を受けた。ことし創隊70周年を迎え、対馬海峡から南西諸島までの広大なエリアを担当する佐世保地方隊は、艦艇部隊だけではなく哨戒や輸送を行う航空部隊や離島における監視を行う部隊など様々な職種の部隊を抱えている。活発になる中国軍の動向を踏まえて、海上保安庁や陸上自衛隊との連携・共同訓練も増加しているとのことだった。参加者からは積極的に質問が飛び、多くのメンバーが安全保障への高い関心をもってることが示された。また、防衛大学校や防衛研究所で学んだマクロな防衛の視点とは異なり、実際に領域警備の最前線の部隊が現場で向き合っているリスクの大きさが直接感じられた。

第五章 本会議

その後、庁舎裏地下にある旧海軍の防空指揮所を見学した。1941年から建設が始まり日米開戦後の1942年から運用されたこの指揮所では、水洗トイレや冷暖房が完備され、女子学生も含めた100名が勤務していた。戦後の不審火で室内の内装は消失してしまったそうだが、当時は中央に大きなスクリーンが配置され、電話連絡を受けたスタッフが敵機の来週をスクリーンに埋め込まれた電球を点灯させることで警戒警報や空襲警報の発令を管理していたのだという。情報やサイバー・宇宙での戦争が議論されるようになって久しいが、約80年前の太平洋戦争の時点ですでにこのように高度なネットワークによる戦闘が行われていたということが印象的だった。

(上保 周平、国際基督教大学 教養学部 アーツ・サイエンス学科 2年)



〈BBQ〉

佐世保青少年の天地の施設をお借りし、BBQを行う。アメリカからやってきたが日本風にアレンジされたBBQ文化や日本の夏の定番行事手持ち花火など、日米の学生が文化の融合を興す。佐世保日米協会様から差し入れの和牛をいただき、参加者の心は踊っていた。自らの意思で食品を制限する参加者もあり、多様性が謳われる時代に沿った議論も弾んだようだ。



【12日目 8月13日(日) 自由散策】

〔概要/目的〕

佐世保市の滞在は本日が最後。長崎市に移動する前の各自の準備やリフレッシュの時間である。西肥バス様にお願ひし、バスを増便していただいたことで、希望する参加者全員が市内に向かうことができた。佐世保名物のレモンステーキ、佐世保バーガー、海の幸など食文化を楽しむ者、させば五番街や観光地を巡る者、中にはクルージングを楽しむ参加者もいた。各々が佐世保の自然や文化を享受し、議論続きであった参加者はつかの間の休息を楽しんでいた。

〔参加者感想〕

前回京都のフリーデイを有効に過ごせなかったことを反省し、今回は前もって計画を立てて、私を含めた計4人で釣りに行くことにした。釣り場は海岸に部分的にネットが張っていて、海の釣り堀のような所だった。4時間ほど滞在して、4人で釣果は鯛が7匹、アイゴ3匹だった。まずまずの出来である。そこまでは良かったが、問題はここからである。30cmアベレージの魚を10匹捌いて刺身にする作業がとて大変だった。結局作業に2-3時間かかり、翌日は5時起きなのにも関わらず、食べ始めたのは夜中である。とはいえ、釣りに行ったメンバー含め、数人で食べ切ることができた。衛生状態の悪い中で魚を捌いていたので、誰か一人くらい食当たりになるだろうと思っていたが、誰も食当たりになっていなかったようで、安心した。

釣ってよし、食ってよしの大変満足のいく釣行であった。来年以降はJASCのプログラムで釣りに行くことをお勧めしたい。

(上原 賢斗、東京外国語大学 国際社会学部 3年)



【13日目 8月14日(月) 平和プログラム】

〔概要/目的〕

早朝に佐世保市を後にバスで到着したのは長崎市。間に入ってくるたくさんの「平和」の文字。同じ県内でもあっても「平和」に対する考え方の違いが町の些細なところからも感じられる。参加者にも改めて自分にとって平和とは、peaceとはどのような意味を持つのか、定義できるのかを考える一助になったであろう。平和プログラムでは日米学生会議を二つの班に分け、被爆者の方からのご講演と長崎原爆資料館、長崎平和祈念館の見学を交互に行った。実際に経験したことのない戦争について安全保障や自衛隊との共存を学んできた参加者はどう捉えるのか、何を思うのか、そしてそれは今後どのような行動に繋がるかを目標としていた。

〈被爆者ご講演〉

〔概要/目的〕

公益財団法人長崎平和推進協会継承部会計屋道夫様、大場義弘様にご協力いただき、被爆者としての貴重な体験をお話しいただいた。疑問に思ったことを素直に聞く参加者とどのような質問に対しても真摯に対応して下さるご講演者の方々との間には熱い議論が交わされた。ご講演者からは「今までで一番核心を突いた質問をされた。改めて考えることがあった。今後の若者に大きく期待が持てた。ありがとうございます。」と身にあまるお言葉をいただいた。

〔参加者感想〕

被爆者講演として、大場義弘さんから被曝体験についてお話を伺った。大場さんは、長崎市で生まれ、1945年7月末まで爆心地から約800メートルのところに住んでいらしたそうだ。米軍の空襲を避けるため、疎開し一命を取り留めた。

8月9日、山の上のジャガイモ畑で作業中、鋭い閃光に襲われ、次いですさまじい爆音が響き、台風の何倍もの爆風が大場さんのご家族の命を奪った。生々しく切ない記憶を共有頂き、名状しがたい悲しみが心に広がるのを感じた。

そしてお話を伺う中で、近年各国より核兵器の使用が示唆されるという憂慮すべき事態を想起した。そして核兵器使用の大きな抑止力を担ってきた被爆者の記憶の共有を今後誰が継いでいくのが気になり質問させていただいた。

これに対し、大場さんは後継者がいると教えてくださった。後継者の育成にあたっては、平和教育の担い手を志された方と食事等をともにしながら「一心同体」を目指すのだという。具体的には、当時の新聞記事など被害の様子を伝える資料に対し、大場さんがどう思うのか、そこから何を考えるのかなどを教えたり、反対に聴いたりしながら被爆者の思いを代弁する術を育むそうだ。

講義を終えて、私は、被爆者の記憶が無事に継承されていることに安堵すると同時に、貴重な被爆者講義を聴かせて頂いた身として、体験を共有することで、平和とは何たるものかを人々が思考し、行動を省みる判断材料を提供していきたいと考えるようになった。

(福井 達於都、慶應義塾大学 法学部 2年)



〈長崎原爆資料館・長崎市平和会館訪問〉

〔概要/目的〕

遺留品や当時を語る展示は、参加者の目にどう写るのだろうか。日本では戦争を経験したことがない世代が増える中、資料館や記念館を訪れ、見たもの聞いたもの触ったものから何を考えるのか、また資料館や記念館の在り方についてどのように考えるのか。当時は敵国同士で会った日米の学生は、「戦争と平和」について改めて学び、今までの価値と照らし合わせ、ひいてはそれらに関する議論が各分科会のテーマに派生し互いに議論の質を高めていくことを目的とした。

〔参加者感想〕

長崎平和資料館は「長崎を最後の被爆地に」というテーマの下、様々な資料、遺品をもとに原爆の被害を回顧する資料館である。原爆の被害を受け、ケロイドや放射線などによってヒトのかたちを留めていない写真が多々あり、それらは見るに堪えず、思わず目をそらしてしまうほどであった。原爆の被害を伝えるという点では非常に有意義な資料館であった。一方で、長崎平和資料館は世界の平和を願うものであることを考慮すると、大きな課題を抱えていると考える。原爆に関する問題提起の不十分性や、非核化と世界平和の関係性の単純化の二点である。前者について、原爆は必要悪であったという意見や、核保有が核抑止力になるという現実的な見解が存在しており、世界は原爆が悪であるだけでなく主張することに限界を感じている。後者については、資料館は世界平和について非核化にのみ言及しており、生物兵器などの軍事力を無視し、問題を単純化していると感じた。非核化しても、世界の対立はなくならないし、人々の安全は保障されない。長崎平和資料館は核抑止力と核廃絶という理想と現実の差を埋める現実的な議論を提起し、非核化を含めた世界平和の象徴としての役割を果たすべきである。

(荒木 太一、慶應義塾大学 経済学部 3年)



【14日目 8月15日(火)】

〈企画委員協働プログラム（長崎歴史博物館訪問）〉

〔概要/目的〕

企画委員、正式名称は長崎大学企画委員。メンバーは長崎大学多文化社会学部1年の大西健太郎さん、岡田咲さん、木田莞奈さん、平部桃子さん。

京都、東京と比べて地方に位置する長崎でプログラムを行うにあたり、地元の方の意見を取り入れたいと考え、始まったプロジェクト。長崎大学に公募していただき、4名が参加を希望してくれた。本会議が始まる4か月前の4月に結成し、5月から7月までプログラムと一緒に構想してもらった。学生ならではの同じ高さの視野を持ち、長崎で学んでいる学生、長崎で暮らしている住民としての視点を多く共有していただいた。

事情により大西さんは本会議への参加は叶わなかったが、岡田さん、木田さん、平部さんの3名は12日には、佐世保に足を運んでいただき一緒にプログラムに参加した。そして参加者とも打ち解け、14日の長崎市からは参加者と同じように寝食とともに、プログラムに参加していただいた。

15日のプログラムのために前日に長崎歴史文化博物館について、長崎の「精霊流し」についてプレゼンを行い、参加者へ歴史や想いを伝えてくださった。長崎は古くから他の国と交流があり、独自の文化を持つ。長崎歴史文化博物館の見学ではオランダとの交流や潜伏キリシタンの歴史など第二次世界大戦よりも前の歴史を学ぶ。



〔参加者感想〕

今日は長崎歴史文化博物館を訪れた。長崎原爆資料館や長崎平和祈念資料館へ行き、被爆者の方からお話を伺った翌日に訪れることで、長崎の歴史をあらゆる角度から学ぶことができた。館内には南蛮文化やキリスト教とのつながりをはじめとする展示物が充実しており、アメリカ側参加者と会話しながらじっくりと楽しむことができた。特に印象に残ったことが、お掛け絵〈受胎告知〉だった。これまでに目にしてきたものは様々な画家によって描かれていたものであったが、すべて技術面においても西洋文化の影響を強く受けたものであった。そんな中で和様化された受胎告知はぱっと目を引くものであり、和洋がそれぞれ色濃くまじりあった長崎県のユニークなものであると感じた。

また訪問した当日は終戦記念日であり、12時には館内放送を合図に、1分間の黙とうが行われた。翌日のサイトフォーラムを前に、長崎に来てから聞きし感じたものを胸に深く刻んだ時間となった。

(佐野 百美、早稲田大学 国際教養学部 3年)



〈長崎大学核兵器廃絶研究センター（RECNA）吉田文彦所長ご講義〉

〔概要/目的〕

長崎大学核兵器廃絶研究センター（RECNA）は世界でも前例のない核兵器廃絶問題の公的な教育研究拠点である。ここではヒロシマ・ナガサキを世界の潮流の中で新たに位置づけ、学問的調査・分析を通して核兵器廃絶に向けた情報や提言をさまざまな角度から世界に発信する過程や成果を活かして大学教育に貢献している。（参考：<https://www.recna.nagasaki-u.ac.jp/recna/about>）所長の吉田文彦教授より、The Nagasaki Peace Declaration & ChatGPT というテーマの下、ご講義をいただいた。

〔参加者感想〕

昨今話題のChatGPT。大学など教育機関での使用が議論されている中で吉田文彦所長は使用に肯定的なご意見であった。長崎平和宣言において‘If Hiroshima will be recorded in history as the “first place bombed” for a long time, whether Nagasaki will continue to be recorded as the “last place bombed” will depend on the future we create.’という文言があったが、これについてchatGPTにメッセージの解釈を問うた。私たちが歴史の過ちから学び、広島と長崎で起きた大惨事と同じような悲劇を将来起こすことのないように、今後も語り継ぐことの重要性を伝えていた。

私の祖父母は原爆投下当時広島におり、運良く本人は被害は受けなかったものの当時の記憶は彼らの中に鮮明に残っている。4歳だった祖母はきこ雲や自分が見た情景を今でも思い出すことができる語り、祖父の妹は放射線の影響で亡くなった。広島や長崎の惨状を記憶する人は年々減少している。近い将来直接被爆者からお話を聴けなくなる日も来るだろう。そして私たちが歴史を語る世代になる日が来るのだろう。直接語っていただいた温度感はどう頑張っても伝わらないのではないだろうか。伝えられない中で同じように原爆の被害を伝えるにはどうしたらよいのだろうか。AIやロボットが被爆者の方やそのお話を録音・録画することで臨場感を伝えることはできるのだろうか。

今私にできることは学び、ひとりでも多くの人にそれを伝えることだろう。幼いころから自分にできることはないかを考え続けているが、いくら考えても同じ答えしか導き出せない。この答えは正しいのだろうか。果たして正解はあるのだろうか。

（田頭 奈寿菜、国際教養大学 国際教養学部 3年；長崎サイト担当実行委員）



【15日目 8月16日(水)】

〈長崎サイトフォーラム〉

第75回日米学生会議 長崎サイトフォーラム〔式次第〕			
1	開会の辞	第75回日米学生会議 日本側実行委員長	久野 賢登
2	長崎県庁副知事 ご挨拶	長崎県副知事	馬場裕子 様
3	長崎サポート委員会長 ご挨拶	長崎サポート委員会長 十八親和銀行取締役頭取	山川信彦 様
4	長崎大学学長ご挨拶	長崎大学学長	河野茂 様
5	主催団体挨拶	国際教育振興会代表・日米学生会議事務局長	金野洋 様
6	分科会発表		
7	閉会の辞	第75回日米学生会議 アメリカ側実行委員長	Shun Sakai

〔概要/目的〕

長崎サイトフォーラムでは、京都サイトフォーラムの反省や他の分科会の良かった箇所などを踏まえ、さらに一段階レベルアップをした成果発表の場になったのではないだろうか。時間がない中

第五章 本会議

でも隙間時間をうまく活用したり夜遅くまで議論を続けたりする参加者の姿が印象的であった。企画委員という新たな仲間も加わり、会議が中盤に差し掛かり、参加者同士の関係性にも少しの変化があったように感じる。フォーラムでは長崎での学びと分科会のテーマの関わりを深堀り、解決策を提案する分科会が多く見受けられた。長崎でお世話になった関係者の皆様にもお越しいただき、どのような学びがあったのかや今後の提案など、成果を最後まで見届けていただいた。過去と未来の間にある現代や少し前の歴史を学ぶことで東京サイトでの学び、将来の思索に繋げていく長崎サイトの役割は全うできたのではないかと考える。

〔参加者感想〕

長崎は江戸期に長く海外貿易の中心地となっていた歴史を持ち、西洋文化と日本文化の混淆の地としての面影が濃い。多くのキリスト教徒を抱え、マリア観音などに代表されるキリシタン弾圧政策を受けた特殊な文化や、島原・天草一揆による民衆の抵抗の跡を捉えられる場所である。

一方、長崎は現時点で世界最後の原爆投下地であり、平和を希求する上で象徴たる土地でありながら、佐世保に日本有数の自衛隊基地を有し安全保障において引き続き重要な役割を果たしているという、一種のジレンマを抱えた都市でもある。

このような文化・安全保障の面で独特な長崎サイトの特徴を踏まえた議論が行われ、期間としては短かったものの有意義なアウトプットが各分科会からなされたと感じている。筆者が所属する国際政治と日米関係RTにおいても、長崎サイトでの原爆資料館・被爆者の講演および今年のG7広島サミットを受け、いかに核なき世界を目指していくか、安全保障の現実を捉えた上でのロードマップを提示しようと試みた。

(富澤 新太郎、東京大学 教養学部 理科三類 2年)

〈長崎サイトご協力者様との交流会〉

〔概要/目的〕

株式会社コミュニティメディア様のご尽力の下、DEJIMA MEDIA CENTERをお借りし、長崎でプログラムを行うにあたってお世話になった皆様のうち約15名にご参加いただき交流と長崎サイトフォーラムの功績を労う場として交流会を設けた。改めて多くの皆様のご協力を賜り、長崎サイトが無事に会割を迎えることができたのだと実行委員だけでなく、参加者にも感じてもらう目的があった。長崎サイトの記録として長崎空港に到着した時から動画を回し続けていただいたコミュニティメディア様の動画で思い出を振り返りながら、海辺のテラスから夕日が沈む情景は2023年の8月の記録として焼き付いたのではないだろうか。



【16日目 8月17日(木) 移動日】

〔参加者感想〕

あっという間に長崎サイトも終わりを迎え、東京サイトの初日を迎えた。長崎サイトでは自分が分科会にいる意義やJASCへ来たことの意味を問うことが多く、東京サイトこそは自分の力を少しでも発揮しようという気持ちを胸に、移動時間のほとんどを思惟に費やした。到着して思ったのは、ここでJASC75が終わるのだという緊張感だった。実行委員や参加者たちの表情や言葉の随所に疲れとも緊迫感とも言えるものを密かに感じ取りながら、今後の東京サイトの予定を確認したり、分科会での話し合いを行ったりした。JASC75として過ごしたこの夏は何を意味するものだったのか、最終日に胸に残るものが何かしらあればそれで良いと思いながら、今日ばかりは早く寢床についた。これまでで一番疲れていたと思う。オリセンの寝室の雰囲気も建物も何もかも、春合宿とは全く異なって見えた。それだけ、ここに来るまでに人間関係が深まったりお互いの認識が変わったのだと感じ、JASCでどれほど密度の濃い時間を過ごしてきたかを感じた。

(鈴木 涼、国際教養大学 国際教養学部 2年)



〔サイト総括：実行委員〕

京都サイトで伝統と革新、グローバル化について学び、本会議にも少しずつ慣れてきた参加者は第2サイト長崎県へ移動した。長崎では「邁進」をサイトテーマに掲げ、歴史を学び、過去を振り返ることは現在、そしてより良い将来へと歩みを進めることに繋がるという認識のもと、プログラムを行った。長崎サイトは「平和」「安全保障」という2つの軸に沿ってプログラムを考案した。県内の佐世保市と長崎市の二つの都市を移動し、学ぶ。それぞれの都市は平和・安全保障に関して異なる考え方を持っているのだと街の雰囲気から感じる事ができた。

長崎サイトでは長崎大学から4名の学生に企画委員として、1つのプログラムの企画、運営を共に行った。原爆投下前の長崎のユニークな歴史を知ってもらいたいという思いから、長崎の歴史に関するプレゼンテーションや長崎歴史文化博物館でのプログラムを企画してくれた。地元の学生ならではの視点を取り入れることができ、長崎の地域の声を届けたいという企画委員の願いが叶ったのではないかと考える。地元の方やその地域の雰囲気、ご意見や振る舞いなどからも多くのことを学び取ることができたのではないだろうか。

学生という何ものにも縛られていない立場である参加者は日々変化が起きる社会情勢や様々な社会課題について話し合っている。そのため、核心を突く質問やタブー視されがちな話も積極的に行っていったことが非常に印象深い。実際にプログラムに協力いただいた長崎県の方からも「上辺ではなく本気で、本音でお話することができた」といったお褒めの言葉をいただいた。日本側参加者、アメリカ側参加者という2つの立場だけでなく、参加者それぞれが自らの経験や過去の歴史を顧みて想いに耽ったであろう。

第2サイトであることからお盆の時期に、8月に、そして15日に長崎県を訪れている意味や意義を一瞬一瞬のプログラムで考えた。ユニークな歴史を持ち、2か所目そして最後の被爆地であり、米軍基地や自衛隊を持つ長崎県を訪れ、安全保障とは何か。戦争とは、平和とは何か。生きるとは何か。多くの参加者が実現の具体的なアイデアから根本的な定義を問直すなど話題は尽きず、最後のサイト東京へと向かった。

最後になりますが、長崎サイトの企画・運営にお力添えいただきました全ての皆様へ御礼申し上げます。未熟な私たちを支えてくださり、誠にありがとうございました。

(田頭 奈寿菜、国際教養大学 国際教養学部3年：長崎サイト担当実行委員)



第3サイト：東京



第五章 本会議

〈日程〉

2023年 8月17日(木)～26日(土)

〈滞在場所〉

国立オリンピック記念青少年総合センター

〈行程〉

計 10日間

8月17日(木)：長崎サイトから移動

8月18日(金)：フィールドトリップ

(チームラボプラネッツ TOKYO DMM 豊洲・チームラボ株式会社/
東海旅客鉄道株式会社/明治大学博物館 刑事部門/日本科学未来館/
三井物産株式会社・朝日新聞本社・靖国神社/BLJ Myanmar)

8月19日(土)：PRIDE プログラム (西村あさひ法律事務所・外国法共同事業)、
TOMODACHI Introduction

8月20日(日)：自由散策

8月21日(月)：三菱商事株式会社訪問

8月22日(火)：ファイナルフォーラムリハーサル

8月23日(水)：分科会議論、自由散策

8月24日(木)：ファイナルフォーラム、タレントショー

8月25日(金)：第76回実行委員選挙、在日米国大使館レセプション、外務省レセプション

8月26日(土)：リフレクション

【16日目 8月17日(木) 移動日】

〔概要/目的〕

夜になると長崎の街並みと港の灯りをのんびりと望むことができる長崎にっしょうかん。しかし夜が明け日が差し込む今朝のにっしょうかんからは、そのくつろぎが感じられない。朝まで議論に明け暮れたJASCerたちは、次サイト東京へ向かう準備で大忙しだ。焦り、疲労、葛藤、期待、複雑な心境とともに最終サイトへ一同は向かうこととなる。“邁進”を掲げ、活動した長崎。次に向かうは“去来”を掲げる東京。長崎を去った参加者たちは新天地東京で、何に葛藤し苦しみ、衝突し、考え抜き、思索し、その先の各々の活躍の場を見つけ出して行くのだろうか。

〔参加者感想〕

日本側参加者、アメリカ側参加者に分かれ、朝早くに最後のサイトである東京に向かった。前日までに京都、長崎サイトを終え、わたしたち参加者には良くも悪くも多くの収穫があったように思う。それらの収穫を踏まえ東京サイトではどのような経験、価値観を得たいのか、ファイナルフォーラムをどのように作り上げるか、を思案しながらのフライトとなった。東京到着後は都内の散策や議論を行い、日本側参加者にはなじみのあるオリンピックセンターに宿泊。残り少ないJASCをかみしめ悔いのないようにやり遂げたい。

(奥寺 大、名古屋大学 工学部 機械・航空宇宙工学科 2年)



【17日目 8月18日(金) フィールドトリップ】

〔概要/目的〕

各分科会ごとに各々の趣旨に沿った場で行われるフィールドトリップ、通称FT。実地体験のみならず、企画段階から能動的に関わり学びを深めた参加者たちも多く見られ、その学習意欲と行動力には唖らされた。また、日米学生会議アラムナイの方々にも今回いくつかのFTで大変お世話になった。直前のお願いにもかかわらず、‘JASCerだから’という理由ひとつで訪問する機会をいただいたところもある。ここでもまた、日米学生会議の繋がりの強さと温かさを感じた参加者は多いのではないだろうか。第75回日米学生会議に参加したからこそ訪問できた場所、そして訪問を通じ交わすことができた議論や深めることができた学びに参加者は何を思うのだろうか。

〈チームラボプラネッツ TOKYO DMM 豊洲・チームラボ株式会社〉

文化と芸術分科会、環境と科学技術分科会

〔参加者感想〕

午前にチームラボプラネッツTOKYOを訪れ、午後は会社にお邪魔した。チームラボプラネッツTOKYOでは、裸足で、五感を使って作品を体験した。作品に対する説明が作品の後に記されてい

て、作品から生まれる感情にあまり制限がない状態で作品を楽しんだ。会社へ移動して、会社の紹介をしていただき、2人のチームラボの方からお話を伺った。お話を通じて、一つの意図を世の中の人が見える形で表現しようとした時、その表現方法が何通りも存在していることを知った。だから、既に世の中にある作品は、表現方法の選択という過程を経て今存在しているといえる。作り手がこれまで身を置いた「文化」はその選択に大きな影響を与えるのではないかと考えた。また、世界をアートで繋げたい時、より繋がりを具現化しやすいのがデジタルの特徴だと思った。

(志田 夏音、岡山大学 工学部 工学科環境・社会基盤系1年)

「身体ごと没入し、他者と共に世界と一体となる」ことをテーマとするチームラボ。FTとして、「文化と芸術分科会」と合同で、チームラボプラネッツTOKYO及びチームラボ本社を訪問させていただいたのだが、境界を超えるというメッセージ性を含みつつも、従来のアートとは異なり、訪れる人々の多種多様な感性や解釈を大事にしている点が私には新鮮だった。また、プロジェクトマッピングに圧倒された一方で、チームラボが技術開発に重きを置いていない点も印象的であった。あくまで、他者と一体化を図ることを目的とし、その手段として技術が適切であれば活用するチームラボ。技術発展が注目される中、「機能的固着」に囚われるのではなく、チームラボのように、従来とは異なる活用方法を既存の技術に見出すことの重要性を再認識できた1日であった。

(宮本 希、国際教養大学 国際教養学部 グローバルスタディズ領域2年)



〈東海旅客鉄道株式会社〉国際政治と日米関係分科会

(参加者感想)

我々国際政治と日米関係分科会は、JR東海の方々には日本における新幹線・リニア高速鉄道事業の歴史と現状、及び米国における高速鉄道事業の現状についてお話を伺った。日本の鉄道インフラの中心的な企業の方々にお話を聞けたことは大変貴重な体験であった。この場を拝借して御礼申し上げます。1964年に「夢の超特急」として東京大阪間の新幹線が開通して以来、日本は高速鉄道分野で高い技術力を誇ってきた。一方、鉄道インフラ支援は高度に政治的な駆け引きが行われるものであり、新幹線の輸出自体は2000年代の台湾高速鉄道が初となってしまったほか、新興国の鉄道技術

第五章 本会議

の向上により現在日本は技術開発競争の厳しい環境に置かれている。そのような前提の上で今回の勉強会を受け我々は途上国支援のあり方について議論をするとともに、現在進行中の米国における鉄道事業2件について意見を交わした。

(富澤 新太郎、東京大学 教養学部 理科三類 2年)

分科会のフィールドトリップにおいて、我々は東海旅客鉄道株式会社（JR東海）を訪問し、日本の交通インフラの核心を形成する東海道新幹線に関して学ぶ機会を得た。東海道新幹線は、1964年の開業以来、東京～名古屋～大阪の三大都市圏をつなぎ、半世紀以上で約66億人が利用、高い安全性と高速の運送が日本経済の発展に寄与してきた。常に、より快適に、より便利に、より安全にを追求してきた東海道新幹線が日々の当たり前を守り、生活を支えていることを知ることができた。さらに、既存の技術だけでなく、ICTやAIなどの最新技術の導入も推進しており、他の交通方法よりも遅延が少なく、安全安心に移動できることが印象的だった。また、日本の鉄道技術は海外、特にアメリカや台湾の高速鉄道整備にも大きく貢献している。アメリカでのプロジェクトでは超電導リニアでワシントンD.C.～ニューヨーク間を結ぶ北東回廊やヒューストンとダラスを繋ぐ高速鉄道プロジェクトがあることを知った。これについて、我々の中からも驚きの声が多数上がった。議論の中で、新幹線が単なる交通手段でなく、人々の心を繋ぐものとしての役割や、インフラの輸出という視点、さらにはインフラが政治や外交にもたらす可能性など、多岐にわたるトピックが取り上げられた。

(童 児夢、立命館大学 Community and Regional Policy Studies 4年)



〈明治大学博物館 刑事部門〉法と道徳分科会

(参加者感想)

フィールドトリップとして法と道徳分科会は明治大学博物館の刑事部門常設展示室を見学した。ここでは、江戸時代や明治時代を中心に過去の法令や刑罰の道具の変遷が紹介されていた。時代の移り変わりと共に社会の道徳観が変わり、刑罰の方法も変化してきた歴史を深く理解できた。刑罰の道具の展示物には、鉗や絞首台、獄門首台木など罪人を見せしめのように扱う残虐なものが多く、衝撃的であった。しかし、中でも特に私の印象に残ったのが入れ墨の展示だ。かつて入れ墨は盗みなどを犯した罰として罪人の腕に入れられていた。現代では「入れ墨」と聞くと多くの日本人がどこか否定的なイメージを持つと思うが、それが昔、刑罰の一種として認識されていたこと

の名残りである可能性を考えると非常に興味深かった。そうした発見も踏まえつつ、このフィールドトリップをきっかけに社会の価値観の変化によって法律も変わることや、逆に生活を規律する法律が人々の価値観をも変えるという学びがあり、ファイナルフォーラムのテーマも決まった。見学後は、近くにあった東京ドームシティに分科会メンバーで足を運び、全員でジェットコースターに乗った。最終サイトである東京での濃い思い出となり、一段と分科会の絆が深まった時間となった。

(名古屋 佳那、慶應義塾大学 法学部 政治学科 2年)



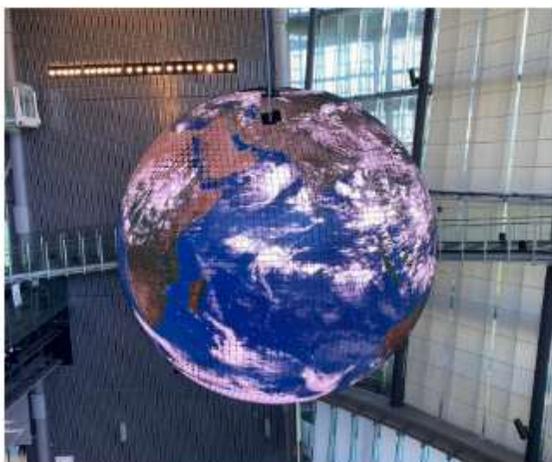
〈日本科学未来館〉言葉と哲学分科会

〔参加者感想〕

今回のFTについては我々の分科会は哲学とAIという観点から未来館を訪問させていただいた。というのもChatGPTをはじめとする人工知能とその利用が国際的にも発展する中でどのようなものだろうかという現在と未来という繋ぎ目でもあるのではないかと考えたからである。京都では伝統という観点について、長崎では歴史と正義について、そして東京ではAIについて。

この過去、現在、未来という連綿とした繋がりによりJASCをどのように関係させてプレゼンを行うか、そしてどのように議論の収斂を行うべきか。そのような我々の分科会の発表をより良いものにする為にどうしていくかなども視野に入れて行ってきたのではないだろうか。今回のFTや東京サイトを通じて、言語の根底には文化や哲学が非常に重要な立ち位置を占めており、機械翻訳だけではない我々自身の価値や生き方というものについて、議論をする様々なきっかけの一つとなったのではないかと考える。我々とはどのような存在なのか、人間とはどういうものかをAIと比較してより良い議論ができたようにも思う。そしてファイナルフォーラムという我々の集大成へも繋がったのではないだろうか。

(山本 雄翔、京都産業大学 国際関係学部 3年)



〈三井物産株式会社・朝日新聞本社・靖国神社〉社会階層と多様性分科会

〔参加者感想〕

8月19日に三井物産株式会社の戦略企画室長であり、第45回JASC参加者でアラムナイの見市礁さんに日本経済の歴史、日本の産業の強みや弱点、日本経済の未来についての講義をしていただいた。グローバル市場の中でいかに日本企業の存在感を高めるか、ビジネスにおけるナショナルティの影響などについてご教授いただき議論していく中で、いかに日本の経済の動向（過去・現在・未来含め）が自国に対するイメージを形成しているかについて再認識することができた。8月21日には朝日新聞本社にてCSR促進部企画委員の安井克行さんに社内・工場見学と講義をしていただいた。工場見学のための予定だったものの、分科会の趣旨や訪問の目的などを共有させていただいたところ、ご好意で講義もしていただけることとなった。講義では朝日新聞の歴史や新聞社の特色について、社会部の方とのインタビューではニュートラルな情報を発信するには、朝日新聞はいかにデジタル化や現代のメディアの消費のされ方に対応してきたかなどについてご教授いただいた。一日を通じて国民意識の形成のプロセスにおける朝日新聞・メディアの役割や影響について議論することができた。

（バック キャスリーン 光、国際基督教大学 教養学部 アーツ・サイエンス学科 2年）



（上段左2番目：見市礁 様）

〈BLJ Myanmar〉持続可能なビジネス分科会

〔参加者感想〕

私が所属する持続可能なビジネス分科会（Sustainable Business Roundtable）のフィールドトリップとして、ボードレスミャンマーの社会起業家からオンラインレクチャーを受けた。ビジネスの「持続可能」についてのインプット、その定義について考えるきっかけとなった。「ビジネス」の大きな分野の中からも、さらに「ソーシャルビジネス」に着目した実体験に基づく起業家によるレクチャーはとても貴重な機会だった。

その後、参宮橋駅周辺を散策し、RTランチをした。フリータイムでは、普段議論で熱烈に自分の考えを語る参加者のまた新しい一面が見れる。ランチタイムで今までのJASCをそれぞれ振り返り、雑談しオリセンに戻った。ビジネスRTは、ランチ後、早速ファイナルフォーラムに向けての準備として、東京サイトの目標設定、ファイナルフォーラムの構造についてディスカッションを行った。最終的に、ファイナルフォーラムでは、ファイナルフォーラムを3サイトの学びの集大成の発表にしたいという全員一致の結論に至った。

（孫 望舒、国際基督教大学 教養学部 アーツ・サイエンス学科1年）



【18日目 8月19日(土) PRIDE プログラム】

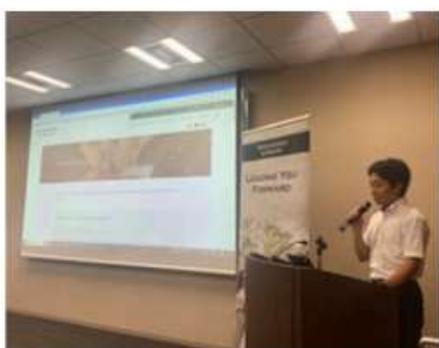
〔概要/目的〕

性的指向・性自認がいわゆる“多数派”と異なる人々も、自分らしく生きやすい社会を形成していくことが目指されている現代の日本社会。しかし、世界と比較し日本国内におけるその認識は未だ稀薄であり、直面している課題が多く存在する。本プログラムでは、日本国内におけるジェンダー問題、特に国内においてLGBTQI+に該当される方々が直面している問題に焦点をあてた。ゲストをお招きし、プレゼンテーションの視聴・それに基づく議論を行う。多分野から、現状の理解を深め、今後の日本社会のあるべき姿をともに模索していくことが本プログラムのねらいである。そもそもLGBTQI+という枠組みの中に人間を当てはめることは真に多様性を尊重していることになるのか、自分らしさ・生きやすさとは何か、などといった表面的な議論とその結論に取束しないような問いに向き合う参加者たちの姿勢が印象的だった。

〔参加者感想〕

東京サイト初めてのプログラムであるPRIDEプログラムに参加するため、西村あさひ法律事務所・外国法共同事業を訪ねた。日本におけるLGBTQI+の現状を踏まえつつ、どのように法律改善をしていくのか、当事者の声を聞きながらパネルディスカッションで様々なLGBTQI+に関するトピックを取り上げた。OECDレインボー白書の中で、日本は法的整備改善の中で下位に位置している。このように、未だに日本はLGBTQI+インクルージョンに対する施策が他国と比較して遅れており、大きな壁が幾つか存在している。それに対して無力感を感じながらも、次の一步はどうすべきかを再考する機会ともなった。

(李文佳、慶應義塾大学 総合政策学部 総合政策学科 2年)



〈TOMODACHI Introduction〉

〔概要/目的〕

日米学生会議に参加後、TOMODACHIイニシアチブに参加し、運営を務めているMasonからJASCでの経験とその後のキャリアについてのプレゼンテーションを拝聴した。参加者からは時間に収まりきれないほどの質問が見受けられた。キャリア形成について、親身になって話を聞いてくださるアラムナイの存在は日米学生会議の醍醐味である。

TOMODACHIイニシアチブとは、日本政府から支援を受けている、公益財団法人 米日カウンシル・ジャパンと東京の米国大使館が主導する官民パートナーシップである。東日本大震災後の日本の復興支援から生まれ、教育、文化交流、リーダーシップといったプログラムを通して、日米の次世代のリーダーの育成を目指している。



(写真：右から三番目がMason)

【19日目 8月20日(日) 自由散策】

〔概要/目的〕

概要・目的特になし。それがフリータイム。提出期限に間に合わず、昨年度報告書に載せられなかった私の拙いフリータイム感想をここに記すことで、罪滅ぼしとさせていただきたい。第74回実行委員のみなさま、提出が遅れてしまい申し訳ございません。

私は、無意味なものに惹かれる人間である。10km先のバイトへ自転車を走らせ通勤。酒に酔い眠れば終い。バスで眠り、気づけば海にいるといった日々である。こうなった理由は山ほどあるが、そのうちの1つの経験をここに記す。自由時間が与えられたこの日は、街に繰り出し、そこそこ仲の良い友人と食べ歩きをした。陽がてっぺんに達した頃、タピオカ屋に入った。米国まで来て日本にあまたあるタピオカを飲みに行くなんて、なかなかの無意味さ。そこでなんと議論が繰り広げられた。きっかけはタピオカである。なんとその議論は、翌朝まで続いた。タピオカから派生し自己の価値観の共有がされた。これにより、そこそこ仲の良い友人からかけがえのない親友になった。そういえば、冒頭の自転車の変においても偶然流れ星を見たり、バスの変においても海辺で知らぬおやじと仲良くなったりと些細だが幸せを見つけている。世界はきっとそういうことなのだと信じたい。日に見えるものは素敵で本当に意義のあることだ。だが、1つの無意味なものが誰かに幸せを届けるかもしれないということを忘れてたくないはたち夏の日記。

〔参加者感想〕

今日は、緊張と高揚感に満ちたFree dayであった。なぜなら、私が企画した分科会の垣根を超えたフィールドトリップの決行日であるからだ。我々の旅先は、JASCアラムナイの方が経営されて

第五章 本会議

いる「いのちの里山ピースフルファーム」である。この企画の動機は、今回お世話になるOBの方とお会いした際に、この縁を大事にしたいと素直に感じたからである。フィールドトリップの内容は、パーマカルチャー講座と流しそうめん、焚き火を囲んでおしゃべりの3本だてであった。流しそうめんでは、参加者との結束を強めることができた。竹藪の中に入り、数えきれないほどの多く蚊に襲われながら、竹を切り倒し、割り、削り、流しそうめんの土台を作る中で、いつの間にか日米協力関係を築いていた。最後に焚き火を囲んで、「心の底から学びたいもの」について話し合い、考えたことがある。自分らしくあるために自分の思想を追求することは大切である。しかし、あまりにも自分の思うままに生きてばかりだと、無自覚に何かを犠牲にしている可能性がある。そのために、友人と語り、豊かな考えを受け入れ、自己の人生を考え続けることが必要なのかもしれない。

(佐々木 妙子、創価大学 経済学部 経済学科 3年)



【20日目 8月21日(月) 三菱商事株式会社訪問】



〔概要/目的、参加者感想〕

今日私達は三菱商事にお邪魔し、「エネルギー産業の現実と戦略」、「キャリア形成に必要な要素と考え方」について講演を受けた。世界では化石燃料がエネルギーの80%を占め、その上、グローバルサウスの一部の国は比較的成本のかかるクリーンエネルギーを使う意思は薄く、地球温暖化は着々と進んでいる。日本においても政府は2050年までのネットゼロエミッションをコミットしているが、エネルギー保障という観点から見ても実現の難易度は高いと感じた。しかし、その中でもグリーン水素、アンモニアの開発や、二酸化炭素を回収・貯蓄の上、再利用する技術への出資を通して三菱商事は環境問題に取り組んでいる事を学んだ。また、キャリア形成の講演ではキャリアアップに必要なスキルとマインドセットを伺った。情報収集と吟味、自分の役割の確認、“ピボット”の重要性などを柳原恒彦さんが実際に働いていらした現場の例と共に話して頂き、自分自身が残された大学生活、そして社会に出てからどう生きるかについて大きなヒントを得る事ができた。これまで漠然とした不安を抱えていた身の振り方について、目指すべきポイントが見つかり、前向きな気持ちで未来へと歩んでいける気がした。

(小金山 智弘、慶應義塾大学 環境情報学部 環境情報学科 2年)



【21日目 8月22日(火) ファイナルフォーラムリハーサル】

〔概要/目的〕

2日後に迫る最終成果発表の場である「ファイナルフォーラム」に向けたリハーサル日。リハーサルでは、本番を想定した各分科会ごとの発表・その発表に対する他分科会からの意見及び質疑が交わされる。自分たちでは発見することができない盲点や、他分野から見た視点などを提示されることで、最終発表に向けてさらに磨きをかけるいい機会になったであろう。

〔参加者感想〕

ついにファイナルフォーラムまで数日となり、リハーサル日をむかえた。私たち「国際政治と日米関係」分科会は、京都サイトで京都迎賓館を訪問した経験と合わせて外交における文化の役割についてプレゼンをし、長崎サイトではNuclear DeterrenceとNuclear Abolitionについて現実から理想への移行のステップについて議論を重ねた。その経験から、東京サイトでは思い切って「平和」についてのプレゼンをしたいという結論に至っていた。しかし、トピックがかなり漠然としていることもあり、今の世界情勢から見て取れる「現実」から、私たちがJASCでの経験を通して考える「理想」の世界への移行をどのように達成できるかの議論がまとまらないままリハーサルを迎えた。プレゼン後には聴衆からいくつか貴重な質問・アドバイスをいただき、ファイナルフォーラムにむけてさらに議論を深めていく余地があると感じた。

(鈴木 貫正、慶應義塾大学 経済学部 1年)



【22日目 8月23日(水) 分科会議論、自由散策】

〔概要/目的〕

ファイナルフォーラム前日ということもあり、どことなく緊張感が漂うオリピックセンターだが、ファイナルフォーラムが第75回日米学生会議の全てではない。ファイナルフォーラム、そしてその先に向けて、参加者たちは本会議活動に励んできた。その過程でともに葛藤し、議論してきた大切な仲間との時間もこの日米学生会議の重要な要素である。何気ない会話も、くだらない冗談もみんなでその場で同時に共有できるのは残りわずか。

〔参加者感想〕

この日は分科会を跨いで活動した。様々なメンバーと共に代々木公園を散策し、渋谷のショッピングモールにて買い物をした。その後は浅草に移動し、和気藹々と寺社巡りや食べ歩きをした。参加者は東京のお土産や特産品などを購入したり、古くからある喫茶店などに足を運ぶなど、観光を楽しんだ。そして、共に宮崎駿監督作品「君たちはどう生きるか」を鑑賞した。英語字幕も無いなかで、日本語がわからないアメリカ人が一生懸命に映画を観ていた事が印象的だった。映画を見ながら、笑うタイミングや涙する瞬間が揃った時に、同じ空間にいる私たちが言語の壁を超え、同じように心が動かされている事に幸せを感じた。映画鑑賞後は、皆で夜ご飯を食べながら映画の余韻に浸り、私たちはどのような世界でどのように生きたいのか、この学生会議を通して私たちは何ができるのかを議論した。

(童 児夢、立命館大学 Community and Regional Policy Studies 4年)



【23日目 8月24日(木)】

〈ファイナルフォーラム〉

第75回日米学生会議 ファイナル（東京サイト）フォーラム〔式次第〕		
1	開会の辞	第75回日米学生会議 アメリカ側実行委員長 Shun Sakai
2	主催団体挨拶	国際教育振興会代表・日米学生会議事務局長 金野洋 様
3	主催団体挨拶	International Student Conferences, Inc. Executive Director Bahia Simons-Lanes様
4	協賛者様のご紹介	
5	ビデオメッセージ	デジタル大臣 河野太郎 様
6	基調講演	株式会社HLAB代表理事 小林亮介 様
7	分科会発表	
8	パネルディスカッション	有識者および日米学生会議参加者 Dr. Joshua W. Walker Mr. Ryosuke Kobayashi Mayuka Yamazaki Nozomi Miyamoto Seth Quinn
9	閉会の辞	第75回日米学生会議 日本側実行委員長 久野 賢登

〔概要/目的〕

ファイナルフォーラムは、法政大学の外濠校舎6階の薩埵ホールで行われた。

改めて申し上げますと、ファイナルフォーラムは第75回日米学生会議における最終成果発表の場である。分科会ごとにその発表の機会が用意されているプログラム構成ではあるが、これまでの過程で分科会同士でのコラボレーション議論やリハーサルでの質疑などもあったことから、全体としての最終発表という捉え方ももちろんできる。

75回会議の集大成がここに！

〔参加者感想〕

ファイナルフォーラム、それはJASCにおける議論の集大成である。振り返ると、これまでの議論には幾多の葛藤があった。主には、言語の壁の問題、そして限られた時間の中で議論したい内容をどこまで議論できるかという問題である。私は分科会の中で最も英語が苦手であり、一生懸命話しても自分が考えている内容の数割しか伝わらないという感覚に陥ってしまっていた。さらに、コンテンツが盛り沢山のJASCにおいては、自分が話したいテーマを思う存分話す時間は、プレゼン

セッションを期日までに完成させないといけないという都合上、十分に確保することができずにいた。このような不完全燃焼を抱えていた私だが、ファイナルフォーラムの前日、ついに自分が温めていたアイデアをホワイトボードに図を書きながら、たどたどしい英語で説明をする機会を得ることができた。それは、発表内容と直接関わるものではないものの、私がどうしても話したいテーマだった。

ファイナルフォーラム当日、私はやり切ったという清々しい気持ちでいっぱいだった。それは、一緒に壇上に立った仲間たちのおかげであり、心から感謝してもしきれない。

(田村 航、一橋大学 法学部 法律学科 4年)

いよいよファイナルフォーラムである。東京サイトに入ってから時間はあっという間に過ぎていく中で、夜遅くまで議論を重ね白熱している場面が多く見受けられた。ここまで3つのサイトを通しての経験、そして学生という立場からどのような提案を社会にもたすことができるのか、ということを考えながらの東京サイトであったと思う。午前中に会場となる法政大学に移動し、午後からファイナルフォーラムが始まった。各分科会がJASCを通しての議論の成果を十分に伝えることができたのではないだろうか。基調講演やパネルディスカッションでは壇上の発表者の意見から得られるものも非常に大きかったように思う。

(奥寺 大、名古屋大学 工学部 機械・航空宇宙工学科 2年)

8月24日、約一ヶ月にわたる日米学生会議の‘締め’とも言えるファイナルフォーラムが法政大学 薩埵ホールにて行われる。軽い昼食を終え、読み上げる原稿のコピーやメモを片手に直前まで発表に備えるデリたち。徐々に後方に集まるオーディエンスの影が緊張を高める中、13時過ぎ、遂にアナウンスがファイナルフォーラムの開始を告げる。オーディエンスには保護者・友人・アラムナイの方に加えて、少人数ではあるものの一般の方の参加も見受けられた。多くの人に見守られる中、フォーラムは穏やかに進行した。

分科会による発表は、社会階層と多様性→文化と芸術→環境と技術→言語と哲学→法と道徳→持続可能なビジネス→国際政治と日米関係、といった順番で行われた。次々と各分科会のメンバーが壇上に登る。深刻な問題を提起する分科会、日米学生会議での良い思い出を振り返る分科会、新しい示唆を共有する分科会。それぞれの分科会が壇上で東京サイトでの集大成を展開する。普段は一緒にふざけるなど‘学生’としての面をよく知る仲間達の真剣な表情を見ると改めて自分が素敵な集団の一部であることを感じた。

そして発表は私が所属する国際政治と日米学関係分科会の順番となった。壇上にあがると、ホールの構造上、客席の様子がよく見える。背筋を縮める強冷房と緊張に抗いつつマイクを手にする。

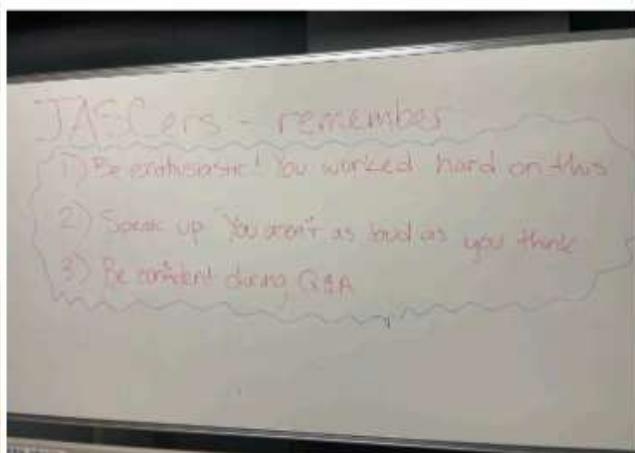
我々の分科会の発表のタイトルは『OUR WORLD PEACE』であった。発表の中では、現実的な世界平和のあり方とは一体どのようなものであるか、現在露わになっている理想と現実とのギャップを実例と共に追っていく主張の形をとった。誰もが不安とは無縁に暮らせる理想のゴール：NO INVASIONを描くまでの軌跡、その途中にある現実的なゴール：NO WAR。道中には未だ、未完の核抑止機能、国連の欠陥、人権問題など対処すべき多くの問題が転がっている。

スライドの最後は太文字、‘We are the solution’の文字列で締め括られる。負う分野の大きさと、

第五章 本会議

学生としての社会的立場の小ささと板挟みでしばしばコンフリクトを抱えたこの分科会が「OUR WORLD PEACE」のように大きく踏み込んだテーマを掲げることは非常に勇気の要ることだった。議論をし尽くしていない頃の私たちのようにチャレンジすぎる題材だと感じた方もいるだろう。しかし、目指すゴールに対して小さすぎる一歩であったとしてもステップを踏むことを止める理由はない。小さな一歩が伝播し合い、積み重なることで大きな一歩となりうるからだ。我々自身が解決策の一部になりうると信じ行動を起こし続けるべき、主張を続けるべき。国際政治と日米関係分科会が発信した中でも一番大きなメッセージだ。

(柏木 萌美、慶應義塾大学 理工学部 機械工学科 4年)



〈タレントショー〉

〔概要/目的〕

ファイナルフォーラム終了後、その緊張と不安から解放され、思う存分全力で楽しむのがこのタレントショーである。1つのスタジオをお借りし、飲食を伴いながら行った。

自分の特技を披露する者、仲間とともに歌う者などそれぞれが楽しめる形で参加者たちは取り組んだ。意外な一面や特技、共通点をここで新たに発見し、仲を深めることもある。中には、残り少ないJasc75としての活動、親友たちとの別れを惜しみ涙を惜しむ者もいた。中には、残り少ないJasc75としての活動、親友たちとの別れを惜しみ涙を惜しむ者もいた。



【24日目 8月25日(金)】

〈第76回実行委員選挙〉

〔概要/目的〕

第76回日米学生会議実行委員会選挙が行われた。第76回日米学生会議実行委員会選挙では、次期実行委員8名が選出された。第76回会議においてリーダーシップを十分発揮し、唯一無二の会議を創っていくに違いない。

〔参加者感想〕

この日は次期実行委員を決めるEC選挙が実施された。選挙はジャパデリとアメデリで別々に行われ、日本側では各立候補者による2分間のスピーチ、8分間の質疑応答、そして投票という流れで進められた。この半年間を通して発見したJASCの魅力や改善点をもとに、デリが一丸となってその展望を検討する有意義な時間となった。

今回、多くの参加者が着目したのが言語の問題だ。本会議の使用言語は英語であるため、それ以前の日本語中心の議論と比べて思うように発言ができなかったり、自分の力を発揮しきれない人もいた。コミュニケーション不足は議論を行き詰らせるだけでなく関係構築にも支障をきたし、話し合いの機会を奪う悪循環を生む。アメデリを迎えてもなお、JASCの醍醐味とも言える深い議論や何気ない会話の時間を誰もが経験できるようにするには何かしら工夫が必要となる。アメリカ開催で英語を使う機会が一層増える次回はこの言語の壁をいかにして取り払えるかが成功の鍵とも言えるだろう。

言語の問題以外にも日米学生会議の社会的意義や、プログラム期間のルール設定など様々なテーマが持ち出された。育った環境や価値観、そして得意とする言語も違う72人を束ねつつ、この歴史ある団体を学生主体で運営することは決して容易ではない。今後1年間、選ばれた実行委員は多くの難題に直面することになると思われるが、常に他者の視点に立ち、対話や歩み寄りの精神を胸にこの大切なバトンを繋いでほしいと強く思った。

(名古屋 佳那、慶應義塾大学 法学部 政治学科 2年)



〈在日米国大使館レセプション、外務省レセプション〉

〔概要/目的〕

米国外務省レセプション、外務省レセプションが行われた。レセプションにおいては、各界の第

第五章 本会議

一線で活躍されている方々と日米学生会議参加者とのコミュニケーションの場が用意された。日米学生会議本会議活動を終えた後の各々のビジョンを基に対話がなされたり、将来への迷いや不安があることを吐露し、それに対して心強いアドバイスをいただいたりと参加者にとって貴重な時間となった。

〔参加者感想〕

8月25日夜、ホテルモントレ半蔵門の宴会場にて外務省主催のレセプション・ディナーが開催された。薄暗いエントランスを抜けた、華やかながらも清潔感のある宴会場。前方には日章旗と星条旗が並んで掲げられており、改めて昨日まで日本と米国を代表する学生の議論の場があったこと、そしてその機会が貴重であったことを実感する。

テーブルにはミニサイズのケーキからローストビーフに至るまで、それまでの約一ヶ月間の生活ではお日にかかる機会のごく少なかったような“豪華”な食事が並べられている。来賓の社会人の方にはアルムナイの方に加えて学生会議出身ではない外務省の方も参加されており、開始前から会場は既に賑やかな雰囲気の中にあっただ。乾杯の音頭を合図に、ひと月の疲れを癒すように壁に沿って並べられた椅子へと座りこむ参加者、テーブル脇で食事に夢中になる人、中央部で談笑する人など各人が思い思いの方向へとぼらけていった。

複数の来賓の方と将来のキャリアや日米学生会議での学びについてなど言葉を交わしていく中で、会も終わりかける頃にとあるアルムナイの方とお話をさせていただいた。学生会議の活動幅の拡大に向けた協賛先の拡張。個人的に掲げた長期目標のTipsを得たいという浅い思惑の下私が投げかけた質問は、協賛をいただく中で日米学生会議の強みはどこにあるのか/どのような理由で日米学生会議は協賛をいただいているのか、といったものだった。

返答は当初私が想定していた類のものではなかった。現在の日米学生会議はアルムナイの関係団体/企業からの協賛に大きく頼っている。学生団体が増えまた、より間口を広げた日米学生会議のコンセプトが揺らいだ結果、他団体との差別化が困難となった今少なくとも渉外において明確な強みといえるものはないのではないかとのことであった；グローバル×議論では差別化しきれないというのは直感的にも腑に落ちてしまう。では、付加できる他の要素・バリューには一体どのようなものがあるか。日米学生会議のアイデンティティとは、日米学生会議の社会から/私たちから見た価値は一体何か。

閉会がアナウンスされ第75回日米学生会議は無事に終了するのだと安堵と寂しさを再確認するとともに、本会議が終わっても目を逸らしてはいけない問題の存在を感じる。宴会場で2つの旗を背景に写真撮影に興じるJASCerの笑い声のある中、夏休みの宿題を残しているような気持ちになった。

(柏木 恵美、慶應義塾大学 理工学部 機械工学科 4年)



【25日目 8月26日(土) リフレクション】

〔概要/目的〕

日米学生会議本会議活動が本日をもって終了する。そして各々の新しい旅路が始まる。海外に留学する者、就職をする者、さらに今の学問を深める者、進む道はそれぞれだが、同じ釜の飯を食い、雑魚寝をし、酒を飲み、シラフでも熱く語り合ったこの期間が参加者にとって特別なものになったのなら（これからそう思える時が来るのなら）実行委員一同、この上なく幸いである。

〔参加者感想〕

JASC75が終わり1ヶ月近く続いた充実した日々が終わることを思うと、感慨深くもあり、一抹の寂しさがある。

この夏は、そして本会議に至るまでの数ヶ月は、今までに体験したことがないような充実感と熱気に溢れた一夏になり、今日JASC75としての終わりを迎えるに至った。

このほかの何にも変えることができない貴重な学びは、今後の学びにきっと繋がりが、そこで生かされる。

そして、この日米学生会議を通じて多くの素晴らしい人と巡り会うことができたことは、一生の財産になる。

この文章を書くために向かう画面の前で、自分がこの経験をそのように捉えていること、それ自体が“life changing experience”だと思う。

（小林 弘典、国際基督教大学 教養学部 アーツ・サイエンス学科 2年）



〔サイト総括：実行委員〕

東京サイトのテーマは、「去来」である。意味は、「去ることと来ること」。

東京は、75回会議の本会議活動が終了する場だ。参加者は、これまでの事前活動及び京都サイト、長崎サイトでの学びをまとめ上げた上で、東京で自発的な活動により、終盤に催されるファイナルフォーラム（成果発表会）に向けて準備を行う。この地で、本会議活動終了という1つの節目を経て、参加者は、各々の新たなスタートを迎えるのである。

ところで、去来という言葉が想起させるのは、肥後国長崎出身、向井去来の『去来抄』だ。その一節に「不易を知らざれば基立ち難く、流行を知らざれば風新たに成らず」とある。変わらないものや変わってはいけないものを知らなくては、基礎は成り立たず、変化を知らなくては革新は起こせないという意味である。

京都では、古くから続く日本の伝統文化や精神、長崎では、原爆資料館での展示や資料、心にずっと留め続けておくべき戦争経験者の方からのお話などを通じて不易を学んだ。そして東京では、日本経済ひいては世界を牽引する総合商社において天然ガス、エネルギー安全保障を学ぶプログラム、第一線で活躍するゲストをお招きして、日本社会において昨今さらに浮き彫りになってきたジェンダー問題を学ぶプログラムなど、今、まさに動きがあり、向き合うべき深刻な諸問題を学び議論した。ここ東京で動いた感情や学びは、文字だけでは表現しきれないものである。だがしかし芭蕉のように「いい仰せて何かある」とも言ってもらえないので、参加者たちは可能な限り文字で記録を残した。ぜひご覧いただきたい。

最後に東京サイトを様々な側面からサポートしてくださった皆様に心より御礼申し上げます。

（岡田 潤、鳥根大学 生物資源科学部 3年：東京サイト実行委員）



第六章 分科会

文化と芸術分科会



〔分科会概要〕

本分科会では、主に「文化芸術」と「人・社会」の相互関係、日米関係において文化芸術が果たす役割について考える。近年「文化の違い」という言葉をよく耳にする。物事をその都合の良い言葉で片付けてしまったことはないだろうか。ここでは、その「文化の違い」とやらかいかにして生まれるのか、そもそも文化芸術はどのようにして生まれそこに住む人々、はたまた世界中の人々に根付いていくのか、文化芸術が果たしてきた社会における役割や及ぼしてきた影響とはどのようなものか、などについてリサーチやフィールドワークを通して議論していく。文化芸術という言葉幅広くとらえ、日米間の相違点、類似点を整理しながら、ソフトパワーやポップカルチャーなどについても深堀りしていく。

〔分科会コーディネーター紹介〕



名前：岡田 潤 Jun Okada
所属：島根大学 生物資源科学部 3年
出身：東京
趣味：片付け

日々の生活についてお話することは、自己紹介になるかと思い、その点について書かせていただきます。

実行委員を務めていた当時は、偶然畑仕事とエビの捕獲及び素揚げに勤んでいる忙しいシーズンでしたので、両立をがんばりました。朝はまず野菜に水をやり、雑草を抜き、その後はEC業務に没頭。気分転換に庭のブルーベリーを摘み、また業務に戻り没頭。夜はライトを照らすと目がわかりやすく光るエビをいただき、その場で素揚げして帰宅し、食べながらEC会議などに参加をしていました。

自然の恵みが私を包んでくれる豊かな学生時代を過ごさせてもらっていました。

〔本会議前活動内容〕

週1回のオンラインでの分科会議論を行った。特に時間に制限を設けることもなく、その週に参加者が提起した問題あるいは前週議論し、まだ心残りがあるテーマについて議論を深めた。アメリカ側との事前交流も数回開催した。

〔主に扱ったトピック〕

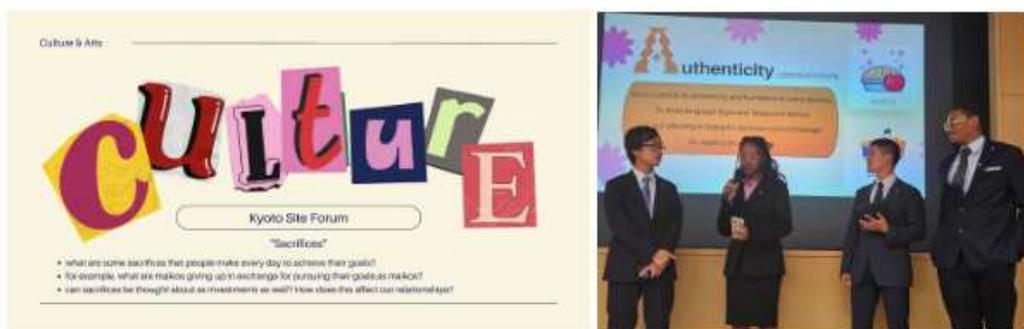
- 文化芸術の変遷
- 個々・社会での認識

〔本会議京都サイトフォーラムでの発表〕

テーマ：Sacrifices

主に、犠牲・搾取についてプレゼンテーションをした。

人々が何らかの目的を成し遂げるために払う犠牲とは何か？について展開し、自分たちで調べ浮き彫りとなった舞妓さんに対する不当な搾取問題を取り上げた。果たして、何かを犠牲にすることは何かを達成するための投資として捉えていいものなのか？そしてそれは我々の生活にどのように影響してくるものなのかについて論を展開した。



〔本会議長崎サイトフォーラムでの発表〕

テーマ：Nanban lacquerware

主に、南蛮漆器についてのプレゼンテーションを行った。

南蛮漆器の起源、蒔絵と螺鈿を組み合わせ隙間なく文様が描かれている独特な特徴の説明、その制作過程、そして「国内向け南蛮漆器」が、1960年代以降になるとヨーロッパに伝世した「輸出用南蛮漆器」へと変容していく流れやオリエンタリズムなどについても触れながら展開した。



〔本会議ファイナルフォーラム（東京サイト）での発表〕

テーマ：How do we consume content?

主に、我々人間のコンテンツ消費の在り方についてプレゼンテーションをした。近世と現代における伝統文化の消費の仕方の比較とその批判、現代における社会と芸術のインタラクティブな関係性と未来の可能性、携帯電話の普及による芸術消費の変容とその皮肉、チームラボプラネッツでの

第六章 分科会

体験によって考察した芸術における妥協、日米における広告マーケティング手法の違いとこれからのデジタルマーケティング、Web3.0時代におけるコンテンツ消費のあり方の変容とこれから、メタバースから考える現実世界と仮想世界の融合などについて、参加者の意見を踏まえながら展開した展開した。



〔日本側メンバー紹介〕



名前：上保 周平 Shuhei Uwabo

所属：国際基督教大学 教養学部 アーツ・サイエンス学科 2年

出身：東京都

趣味：読書（故・米原万里氏の著作が大好きです）、落語（十代目柳家小三治師匠と柳家喜多八師匠を尊敬しています）、料理、音楽（主にクラシックですが最近ジャズを勉強し始めました）、旅行、競馬観戦

高校生の時にAFSの交換留学でフランスに留学し、ホストマザーがムスリムの方だった経験から大学では国際関係学と哲学・宗教を専攻しようと考えています。現在は大学の落語研究会に所属し、度々口演しています。また大学のオーケストラにも所属しており、そちらではヴァイオリンを演奏しています。個人戦と団体戦の両方を掛け持ちする日々です。最近の学問的な関心事は江戸期の社会や文学、文教政策としてのプロバガンダや現代のパブリック・ディプロマシーのあり方、戦前の日本における競馬の受容などです。



名前：佐藤 天音 Amane Sato

所属：防衛大学校 人間文化学科 4年

出身：宮城県（魂は青森県にあります）

趣味：イラスト制作、筋トレ、読書、物思いにふけること、アニメ鑑賞（物語シリーズが好き）、漫画鑑賞（ガラスの仮面がブーム）

私は絵を描くことが大好きです。どれくらい好きかと問われれば、睡眠と食事以外はずっと絵を描いていられるほど好きです。絵を描くことは私のライフワークであり、自分のあらゆる経験や知識は全て作品の糧にするというつもりで生きています。その根底には「自分の絵で人を勇気づけたい」という思いがあります。私はこれまで防衛大学の学生として様々な経験をしてきましたが、その中で何度も挫折を味わったり、自分の弱さに打ちひしがれたりしたことがあります。その経験は、いつしか「自分と同じように生きづらさを抱えた人や人生に希望を持たない人の役に立ちたい」という思いに繋がりました。絵は五感の中で最も強力な「視覚」に訴えることができます。一枚の絵が、誰かの人生を変えることも私はできると思っています。青臭い理想かもしれませんが、それでも私は挑戦してみたいのです。私が所属する「文化と芸術分科会」は、まさに絵をはじめとする様々な「アート」が現代社会においてどのような役割を果たすことができるかを追求できる絶好の場です。自分が今後どのようなコンテンツを築いていくべきかを考えながら、分科会での議論を全力で楽しもうと思います。



名前：佐野 百美 Momomi Sano
所属：早稲田大学 国際教養学部 3年
出身：東京・アメリカ・カナダ・シンガポール
趣味：映画を見る、散歩、舞台芸術を鑑賞する、音楽を聴く

以前大学の政治学の授業にて、“Discomfort is a catalyst for growth; you have to be uncomfortable to grow”（不愉快になることは成長の触媒となる）と教授から言われたことがとても強く印象に残っています。これから多種多様なバックグラウンドを持つJASCerとの対話のなかで、きっと自分自身不愉快になることはあると思いますが、open mindednessを忘れずにたくさん「対話」していきたいと考えています。JASC内だけでなく、実際に様々な分野で活躍されている方との会話を通じて、造詣を深めて成長していきたいです。



名前：志田 夏音 Natsune Shida
所属：岡山大学 工学部 工学科 環境・社会基盤系 1年
出身：徳島県
趣味：花を生けること、お寺巡り、お肉を食べること

私は建築士を目指しています。特に木材を活用した建築に興味があります。お寺を巡ったり、建築の写真集を見たり、と自分なりに建築を楽しんでいます。建築士になりたいと思ったきっかけが華道で、この場で

建築に至った経緯を語ると長くなってしまうので割愛しますが、花を通じて得た経験は何か物事を始めたいと思う時の私の軸です。

建築の根には文化があると考えています。そのため、文化と芸術分科会での議論を含むJASCでの経験で自分をより複雑化させて、とんでもない建築士になりたいです。

〔分科会総括〕

当分科会においては非常に積極的な参加者が多く集まった。自主的に講義を開く者、大学教授を事前議論に招待した者、などここでは上げきれないほどの前のめりな姿勢と取り組みを見せつけられ、圧倒された。参加者たちは、各々の信念を持って分科会活動に取り組んだに違いない。

だが、100%の満足感と晴れ晴れしさを得られた参加者は恐らく誰もいない。誰しもがどこか心の中に苦しさを抱えて本会議終了まで駆け抜けてきたに違いない。そのアンコンフォタブルゾーンでの経験が参加者たちにとって人生のなんらかの栄養となってくれることを心より願う。

最後に、弊分科会に対し、ご協力をいただいたチームラボ株式会社の皆様、大学教授、アラムナイの皆様、この場を借りて心より御礼申し上げます。

(岡田 潤、鳥根大学 生物資源科学部 3年：文化と芸術分科会コーディネーター)



環境と科学技術分科会



〔分科会概要〕

「環境と科学技術」と聞いて、あなたは何を思い浮かべるだろうか。この2つのwordを、二項対立として、あるいは融合されつつあるものとして、あるいは全く関係がないものとして、捉える人がいるかもしれない。様々な捉え方があるだろう。このような「環境と科学技術」に関して、様々な切り口や専門性を持つ人で多様な議題について横断的、学際的、そしてメタ的に議論するのがこの分科会だ。

考えられる議題としては、エコツーリズム、気候正義、世代間倫理、環境政策、SDGs、疫学、バイオテック、EV、インフラ、交通、そして建築など幅広い。実際に議題を決めるのはあなただ。ようこそ、環境と科学技術分科会へ。

〔分科会コーディネーター紹介〕



名前：中坊 倫太郎 Rintaro Nakabo
所属：国際基督教大学 教養学部 アーツ・サイエンス学科 2年
出身：神奈川県大船
趣味：サッカー、映画鑑賞

僕は人と話すことが大好きです。ただ話すことだけでなく、それを通して自分がこれまで考えたこともなかったものの見方とか考え方を知れるのも大好きです。僕はこの会議中、他の参加者との話を通して、自分がどれだけ井の中の蛙だったことを気づくことができました。また、それを通して自分の価値観とか世界観がどう特殊なのか、気づくことができました。

P.S 話すこと以外に、音楽を聴くことが好きです。話していない間は大体聴いています。

〔本会議前活動内容〕

本会議前の準備期間では「環境」を主に専門としているメンバーと「科学技術」を主に専門としているメンバー双方が納得のいく議論トピックを探すことに時間を費やした。その際には「環境」という言葉を「環世界」まで拡大解釈するかどうか等のディスカッションも行われた。結局「環境」「科学技術」両方の要素を持つ「スマートシティ」が議論トピックとなり、東京都内のスマートシティを訪れたり、内閣官房デジタル田園都市国家構想実現会議事務局や都市局都市政策課スマートシティ官民連携プラットフォーム事務局、そしてKPMGコンサルティング株式会社の馬場功一様にお話を聞くフィールドトリップを行った。しかし結果的にそのトピックに対して深く議論することは難しく、総すると本会議前は議論トピック決めの議論が多かったように感じる。

〔主に扱ったトピック〕

- スマートシティ
- 都市開発
- Mobility as a service
- 核兵器

〔本会議京都サイトフォーラムでの発表〕

テーマ：Use of “Space” to Facilitate Tradition and Innovation 伝統と革新を促す「スペース」の利用

京都サイトフォーラムでは京都と、「環境」と「科学技術」両方を含む都市開発を絡ませた発表を行った。発表内容としては京都の町づくりの歴史と現代が抱える現代が抱える問題、そしてその解決策が挙げられる。京都の歴史的な町づくりが車の普及、そして観光客の増加によってどのような悪影響を受けたか分析し、その伝統的な町を取り戻すための施策として「歩くまち・京都」憲章を紹介し、Mobility as a service (MaaS) の導入を提案した。



〔本会議長崎サイトフォーラムでの発表〕

テーマ：Dealing with the Effects of Nuclear Technology 原子力技術の影響への対処

長崎サイトフォーラムでは、将来原子爆弾が使用された場合に生じる被害や対策について報告した。原子爆弾が投下されたら、私たちはどのような苦難に直面し、どのように復興するのか、それを検討した。長崎原爆資料館の展示や被爆者の被爆者のお話で原子爆弾の恐ろしさを学んだ一方、自衛隊佐世保基地を訪れたことで防衛に対する感度を高めることができた。この両側面の学びを反映するために長崎市ではある程度タブー視されている原子力発電の使用に関するトピックを採用した。



〔本会議ファイナルフォーラム（東京サイト）での発表〕

テーマ：Crossroads: The Intersection of Humans and Nature

ファイナルフォーラムでは本会議中に触れ合った様々な「環境」と「科学技術」の要素から技術使用を触媒とした人間の理想的な自然との関わり方を追求した。分科会の各メンバーが、本会議中に興味を持った理想的な人間が自然と関わる技術を取り上げた。例としては菊を使用した殺虫剤やカワセミのくちばしの形を参考にした新幹線が挙げられた。「環境」をどのように「科学技術」と合わせるかに振り回された会議だったが、最終的には当初分科会メンバーが求めていた自然環境を科学技術と絡ませて議論することができとても満足している。



〔日本側メンバー紹介〕

	<p>名前：奥寺大 Dai Okudera 所属：名古屋大学 工学部機械・航空宇宙工学科2年 出身：青森県八戸市 趣味：読書、スポーツ観戦、体を動かすこと、音楽を聴くこと、映画鑑賞、散歩、ミュージカル鑑賞、FPSゲーム、ゲーム配信視聴</p>
---	---

私は小説や映画、ミュージカルといった物語が紡がれていくものを見るのが好きです。自分とは違う人々がそれぞれの人生を思い思いに歩いていく、普段の生活の中ではなかなか意識することのないことを感じられるのがとても新鮮でまた楽しく感じられるからです。そして自分とは違う生き方、自分とは異なる考え方に触れられることも魅力の一つであると思います。しかしここ最近まで、そうしたものを楽しむことがどこか不安で、こうしたものから離れるようになっていました。物語の登場人物は自分自身の「物語」を自由に歩み、その中でなにかを得てなにかを達成していきます。そんな姿を自分と比べ、自分に対する嫌悪感や劣等感、そして無力感を感じてしまっていました。最近は再び物語を楽しむようになりましたが、私はこの経験から物語の秘めている力や私たちに与える影響の大きさについて実感しました。また、その経験が自分自身の行動力の源となっていると感じます。JASC75というこの機会に様々な人と出会い、新しい世界を知り、自分の興味、見識を広げていきたいと考えています。



名前：小金山 智弘 Tomohiro Koganeyama

所属：慶應義塾大学 環境情報学部 環境情報学科 2年

出身：東京

趣味：サッカー、ゲーム、散歩、麻雀、ドライブ、音楽、映画、ミーム

最新技術にジャンルを問わず興味があり、そういった技術革新のニュースを常に追うようにしています。そういった性格もあって最近は量子コンピューターの研究室に入ってみました。量子力学のような感覚では理解できないようなことを勉強するとんだか面白いなあとと思うタイプの人間です。というわけで、所属する環境と科学技術のRTでも、自分のメインの興味である量子コンピューティングの知識を持って会議に参加することで、役に立つ知見をできる限り提供するとともに、他の様々な様々な分野を研究していらっしゃる方々の面白い話を聞くことで多くのことを学びたいです。また、高校生活をニュージーランドで過ごしたのですが、音楽や映画、ミームを通じて言語がまだしっかりと身についていないながらも、コミュニケーションをとることができた経験があり、様々な道からの異文化コミュニケーションのあり方なども考えていけたらなと考えております。



名前：佐藤 佑樹 Yuki Sato

所属：宇都宮大学大学院 地域創生科学研究科 博士前期課程 1年

出身：福井県福井市

趣味：料理・お菓子作り、スポーツ観戦、パドミントン

私は「文理複眼」をテーマに学生生活を送っています。つまり、文系と理系の学問を分けて考えるのではなく、それぞれの学問を融合させることの重要性を意識しています。現在は大学院で、分子農学を専門としていますが、その分野での研究成果を発展途上国のフィールドに還元する社会開発や農村開発、また、法的枠組みなどの社会科学側面にも着目して、研究活動を進めています。そして、発展途上国の農業生産や食料問題の現場を自分の目で見てみたいと思い、東アフリカのケニアに足を運び、現地の大学の協力も得て、フィールド調査を行っています。将来は、農学分野の専門家として、国際機関で世界の食料問題の解決に貢献したいと考えています。

また、私は小学校～大学までバドミントン部で活動してきました。小学校・中学校では、全国大会で入賞もしましたが、その先には進みませんでした。でも、現在は、日本でトップのバドミントンの審判資格である1級公認審判員資格を取得しており、日本人最年少で国際審判員になることを目指しています。そして、将来は、オリンピックに審判員として出場することがもう1つの夢です。

最後に、私が大切にしている言葉を紹介します。

「努力は人を裏切らない。一度きりの人生、ドーンと行け！死ぬこと以外、すべてかすり傷」

この言葉を胸に、英語が流暢ではないというハンデがあっても、JASC75の英語での議論に自分の軸をもって積極的にチャレンジしていきます。そして、人生で一度きりのJASC75のチャンスを、自分のために、そして共に会議を作り上げる仲間のためにも、後悔のないように活動していきたいと思います。



名前：宮本 希 Nozomi Miyamoto

所属：国際教養大学 国際教養学部 グローバルスタディーズ領域 2年

出身：宮城県

趣味：美味しい食べ物を作ること・食べること、寝ること、運動すること（テニス・ハンドボール・ランニング）

私は現在、国際「開発」の必要性に懐疑的です。「開発」は抽象的な概念で、解釈の仕方は人それぞれですが、先進国と足並みを揃えようとする概念として捉えたとき、果たして今日においても「開発」が必要なのか、日々頭を悩ませています。例えば、新型コロナウイルスの蔓延により、グローバル化に対して懐疑的になる若者が増え、新興国の進出により、「幸せ」や「発展」の意味合いも変わりつつあるのではないのでしょうか。まずは、JASC75を含めた残り3年間の大学生活を通じて、この問いに対する自分なりの答えを模索していきます。

最後にもう一つ。私はディスカッションが好きです。特に、自身の知識量が増えていく感覚や自分の意見に対して他者から新たな視点を得られるところが好きです。大学では、模擬国連部をディスカッションの機会に、副部長として部活動を活発化できるよう励ましました。JASC75でこれから様々な意見を交わせることにワクワクしています。

〔分科会総括〕

環境と科学技術分科会は分科会発足から常に分科会に内在する問題と立ち向かった。

上記したように本会議前は「環境」を主に専門としているメンバーと「科学技術」を主に専門としているメンバー双方が納得のいく議論トピックを探すのに苦戦した。結局「スマートシティ」が議論トピックとなり、自主的なフィールドトリップを行ったがそのトピックに対して深く議論することはできず、本会議前は総じて議論トピック決めの議論が多かったように感じる。

本会議中はどのようにしてよりよく分科会のアメリカ側メンバーと関わっていくか、日本側メンバーは模索していたように感じる。英語に少し自信のないメンバーが多いからか、本会議途中まではアメリカ側メンバーに議論の主導権を持って行かれてしまい話についていけない、もしくは言いたいことが言えないといったケースが散見された。しかし東京サイトで日本側メンバー内でどのようにしたら自分の意見を伝えられるようになるか議論した結果、日本側メンバーが積極的に発言するようになった。その結果ファイナルフォーラムにおいて、日本側、アメリカ側双方が納得するプレゼンテーションを行うことができた。

(中坊 倫太郎、国際基督教大学 教養学部 2年：環境と科学技術分科会コーディネーター)



国際政治と日米関係分科会



〔分科会概要〕

いま、世界の平和が揺らいでいる。ロシアのウクライナ侵攻は世界に大きな衝撃を与えた。インド太平洋地域では米中間の対立が激化し、台湾海峡や南シナ海で緊張が高まりつつある。また脅威は多様化し、サイバーセキュリティや経済安全保障、エネルギー安全保障の重要性が増している。

こうした今日の国際情勢に日米が対応するためには、国家の行動が、歴史や規範、国内政治などの様々な要因に大きく影響されていることを理解する必要がある。そこで本分科会では、これらの異なる観点から今日の国際情勢について議論するとともに、日米の国益の一致点、相違点を探ることを目的とする。

〔分科会コーディネーター紹介〕



名前：久野 賢登 Kento Kuno
所属：慶應義塾大学 環境情報学部 2年
出身：日（千葉）、米（シアトル）、加（トロント）
趣味：移動、映画鑑賞、スポーツ観戦

第75回JASC実行委員長の久野賢登です。

第74回会議を経て仲間とこの会議活動を継続したいという思いより、実行委員メンバーとして活動し、JASCには2年間お世話になりました。

私自身、生まれは千葉県ですが育ちは様々な場所で、時には日本、米国、カナダにて、延べ10回以上の引越しと10以上の学校での学びを経験し、今に至ります。幾度に亘って変化してきた環境に素早く溶け込むことを得意とする一方で、同じ環境で長く過ごすことを若干苦手としております。JASCも、常に流動的な環境下で活動する点が私の性格に合っていたのかもしれない。

元々体が丈夫なので、睡眠さえ足りていればいつでもどこでも生活出来るのですが、その丈夫な体をあと何年保てるのか分からない点で緊張感を持って生きております。



名前：吉住 保希 Homare Yoshizumi
所属：立教大学 法学部 4年
出身：千葉県
趣味：コーヒー、旅行、散歩、映画

吉住保希（よしずみほまれ）と申します。先日立教大学を卒業し、2024年春から社会人になります。好きなことは飲むこと・食べることで、そして旅行です。卒業旅行では数週間かけてチェコからフィンランドまでヨーロッパを縦断しました。私の大学生活を彩ったのがJASCの日々です。日本生まれ、日本育ちで海外経験ゼロの自分にとって、自らの世界を広げる貴重な時間でした。第74回会議参加者として米国で仲間と議論を重ねたこと、第75回実行委員として会議の企画・運営に邁進したこと、この2年間の全てが私にとって大きな糧でした。私と関わっていただいた方々には感謝の言葉が尽きません。今後は社会人として励むなかで、何らかの形で社会に、JASCに還元していきたいと考えています。どうぞ宜しくお願いいたします。

〔本会議前活動内容〕

週一回の定例オンラインミーティングが基本的な活動内容である。最初は、分科会メンバー間におけるアイスブレイクから始まり、のちに各メンバーの興味分野や研究内容について、プレゼンテーションを行った。具体的な内容としては、対中デカップリング、食料安全保障、エネルギー安全保障、技術倫理・投資・輸出入、移民政策、台湾有事、ウクライナ危機、難民支援、サプライチェーンと経済安全保障等。当分科会は、メンバーの興味に合わせて海外研修にけるイニシアチブを取ることや、専門家に具体的な内容を伺ったりなどを重点的に実施した。

春合宿においては、民主主義の現状について、欧米諸国、アジア諸国、グリーパルサウスのスタンスを交えて、我が国がとるべき戦略について検討した。

〔主に扱ったトピック〕

- 米中関係
- 半導体
- 移民問題
- 安全保障関連3文書
- ロシアウクライナ戦争
- エネルギー安全保障
- 核軍縮と核抑止
- 日本外交と伝統文化

〔本会議京都サイトフォーラムでの発表〕

テーマ：The Cross of Tradition and Japanese Diplomacy

古都京都では日本の伝統文化や芸術が、建築物や芸術作品、無形の文化等の多様なかたちで脈々と受け継がれてきた。国際的な知名度や評価は非常に高い。そのため、外交の舞台としても、時に京都は大きな存在感を見せてきた。その一例が、1997年の京都議定書の策定や2008年のG8外相会合の開催である。こうした背景を鑑みて、本分科会の発表では、京都が日本外交においてどのような役割を果たしてきたか、京都迎賓館に着目して考察した。その上で、京都迎賓館のより積極的な

第六章 分科会

活用によって日本の国際イメージ（National Brand）の向上に取り組むべきだという提言を行った。その点では、ユネスコといった国際機関との連携も重要だと指摘された。



〔本会議長崎サイトフォーラムでの発表〕

テーマ：Our Path to Nuclear Abolition

核廃絶に向けた現実的な道筋を思索した。我々当分科会にとって、長崎という場所の重要性は論を俟たない。イランの核開発の進展や、今日のロシアによるウクライナへの核恫喝など、核兵器を巡る情勢は厳しさを増している。最後の被爆地である長崎で、日米の学生が合同で、核兵器について議論する意義をメンバー一同噛み締めながら、真摯に議論を行い、長崎フォーラムにおいて「核なき世界」の実現をテーマに提言を行った。本提言では、三段階で構成される核廃絶に向けたロードマップを提示した。そのうち二段階までが、「ノーモア・ナガサキ」すなわち核兵器が使用されないことを目標とした短中期の目標である。そのためのプロセスとして、一段階目では核保有を行うアクターの増加の阻止、二段階目では核抑止の実効性の強化を挙げた。その上で、三段階目では、「核なき世界」の実現という長期的な目標を掲げた。また、その実現において、ヒロシマとナガサキが国際社会に発信するメッセージの重要性が強調された。



〔本会議ファイナルフォーラム（東京サイト）での発表〕

テーマ：Our World Peace

「世界平和を実現するために、何が必要で、我々は何ができるか」を探求した。本発表では「理想的な」世界平和を目指す立場と、「現実的な」世界平和を目指す立場に分かれ多角的な視点で、この野心的な目標を達成する方策を論じた。まず論じられたのが「理想的な」世界平和だ。その構

第六章 分科会

成要素として、「非武装化」「全世界での人権の擁護」「地域の緊張状態の解消」が提起された。他方、現在の国際情勢をみつめ、「現実的な」世界平和を目指す立場からの検討が次になされた。ここでの「現実的な」世界平和の条件とは、No Warである。それが達成される限り、核抑止や軍拡、権威主義国家の行動は許容されると論じられた。これら2つの立場は大きく異なるように見えるが、実際には世界平和を達成する第一段階として「現実的な」世界平和の達成があり、最終段階に「理想的な」世界平和の達成が置かれる。その意味で、本発表は「世界平和」という非常に理想的な目標に対して、ある程度現実的なロードマップを提起した点で、国際情勢のあり方を提言する有意義な発表になったと考えられる。



〔日本側メンバー紹介〕



名前：柏木 萌美 Megumi Kashiwagi
所属：慶應義塾大学 理工学部 機械工学科 4年
出身：東京
趣味：睡眠、散歩

幼少期から海外に行くことが多く多様な文化のもとで生活してきたからか、好奇心の強い人間で、自分自身では興味を持ち得ないことや普通に生活していれば関心を持たないであろうことにあえて触れるのが大好きです。(いつかは妖怪学の本を読んだり、和歌を作ってみたり、干しタピオカを生成したりしていました。海外に関係ないですね笑)くだらないこと、ささいなこと、メジャーではないことを楽しむことこそが本質的な豊かさだと捉えており、今後もその贅沢な営みを享受していきたいです。



名前：鈴木 貫正 Yasumasa Suzuki
所属：慶應義塾大学 経済学部 1年 / パリ政治学院 1年
出身：東京都
趣味：スポーツ、ピアノ演奏

「新しい資本主義」という言葉は日本でも盛んに耳にするようになりましたが、その概念に興味があります。GDPや物質的豊かさに重きが置かれる現代の資本主義において、移民支援や後進国支援となると、先進国からの支援はいつも目に見える金銭的支援ばかりが重視されていると感じます。昨年参加した模擬国連で、インドネシア出身の移民女性がウクライナの移民問題について涙ながらに語っているのを目の当たりにし、支援する側とされる側に大きな乖離があると気付かされました。もちろん先進国からの物質的支援は必要ですが、どうしたらそれぞれの人・地域・国が持つ文化・歴史を理解し、困っている人々のWell-Beingを高めることができるのか、考えることが多いです。

それぞれの国の文化・歴史という面では、17年間日本で生まれ育ったことは自分にとって大切なアイデンティティであるとよく感じます。高校時代の1年間の英国での留学経験とこれまでの仏国での大学生活を通し、日本を客観的に、西洋の視点で捉える経験に恵まれ、それぞれの視点による違いに強い興味を持っています。環境問題をはじめとしたGlobal Issues、Global SouthとGlobal Northの対立も、よく観察してみるとそこには少なからず文化の違いによる衝突があるのではないのでしょうか。自分が最近学びを深めているSociology(社会学)も、そういった文化の違いと結びついているのではと感じます。

英国で学んだ「noblesse oblige」は、慶應義塾の教育の目的「全社会の先導者を目指す」と通ずるところがあります。この理念を常に携え、大学で多様な友人たちと切磋琢磨した暁には、多面的な思考力を以て働き、世界の行く末に責任を持って歩みを進めていきます。



名前：富澤 新太郎 Shintaro Tomizawa
所属：東京大学 教養学部 理科三類 2年
出身：東京都
趣味：酒、ドライブ、漫画

大学では、知財・経済安保の教授の書生として勉強しており、シンポジウムにての発表や、教授が立ち上げたシンクタンクの研究を行っています。東大入試の前日に露・宇戦争が勃発したことを契機に、経済安全保障・科学技術政策・食料安保に興味を持っています。

また、AIの勉強もしており、東大の大きな研究室にてAIについての最新の知見を深めたり、その研究室から出たスタートアップにてインターンをしたりしています。

他、瀧本ゼミという学生団体にて企業分析の勉強をしています。といっても個別株はあまり触っておらず、投資は専ら指数・商品派です。瀧本ゼミはあくまで業界分析・銘柄分析をできるようにするための研鑽の場ですが、将来的には個別株にも手を出せたらなと思っています。



名前：童児夢 Do Amon

所属：立命館大学 Community and Regional Policy Studies 4年

出身：滋賀生まれ、上海育ち

趣味：料理(中華)を作る事、ボランティア、映画や美術鑑賞、食べる事、銭湯温泉巡り、家庭菜園（最近はいちごを取穫中）

私は将来国際社会でアジアの平和と安定に貢献することを目標としている。私は幼少期から大学入学まで中国上海で生活してきた。中国で経験した反日デモをきっかけに政治に興味を持ち、去年にはキャンピンググローバル戦略研究所でインターン活動を行い、アジアの安定には日米の協力が不可欠であることを強く理解した。同時に、大局的な政治に関わる事が出来ずとも、交流を通し相互の理解を深める活動の重要性を感じ、今年立命館大学初となる、アジア太平洋大学(APU)との合同ゼミを立ち上げ、7カ国から集まった仲間と共に毎週勉強会を開いている。

また、2022年の10月にウクライナの国境にて難民への人道支援に携わった。戦争がもたらす残酷さの現実を知り、帰国後も持続した支援が必要と思いStudent Charity for Ukraineという学生団体を仲間とともに設立した。3ヶ月で日本国内の大学から9000着以上の防寒着を収集し、募った550万円の募金と共にウクライナ国内に輸送することが出来た。しかし、限りある資源や物資を届けるために、軍事関係者と民間人に選別し、ラベリングしなければならない現実は今も続いている。毎日少しでも多くの人々が安心安全な日常に戻る事を祈るばかりだが、分断が続き、不穏な世界情勢の間に身動きが取れずにいる人達が沢山いる。その人達を置き去りにする事なく、人間が人間らしく命を全うする事が出来る未来を築く為には何が必要なのか、よき仲間として交流できれば嬉しく思う。

〔分科会総括〕

日米学生会議は、「戦前」の1934年に平和を希求する日米の学生が集い始まった団体である。そのため、伝統的に国際政治を扱う分科会が設けられてきたことは必然だといえよう。歴代の分科会を調べると、平和構築やベトナム戦争など当時の時勢を捉えたトピックが扱われている。そして、当分科会では、半導体をめぐる経済安全保障や露宇戦争、米中対立、移民問題など広範なトピックが扱われた。それは、世界が複雑かつ不確実性の高い時代に突入したことを示唆するものだ。いま、「新たな戦前」を迎えているとするならば、歴史を繰り返さぬために何ができるのか、我々は切実に問われているのではないかと。メンバーは、言語の壁や価値観の対立などの様々な困難に直面

第六章 分科会

しつとも、この問いに向き合い続けてきた。結果、ファイナルフォーラムで世界平和の実現に向けた提言に結実したことに、大きな成果を感じている。

最後にはなるが、共に当分科会を支えてくれた久野実行委員長、真摯に分科会に参画してくれたメンバー一同に感謝を伝え、筆を擱くことにする。

(吉住保希、立教大学 法学部 4年：国際政治と日米関係分科会コーディネーター)



法と道徳分科会



〔分科会概要〕

ウクライナ侵攻、国連、自衛隊、中絶、銃規制、同性婚、環境保護、多様性、労働環境、死刑制度...近年日本、アメリカ、そして世界で話題となっているあらゆるトピックは法律と関わりを持ち、それと同時に、私達は自分自身の、あるいは所属団体の価値観や道徳心から、これらのトピックについて考える。

私達の価値観が社会を形作っていくと同時に、法律によって無意識に価値観が出来上がっていることもある。日本、アメリカ、国際社会、それぞれのコミュニティでの法や価値観の相違点や共通点を語り合うことは刺激的なものになるだろう。

この分科会では、メンバーの興味あるトピックについて、定められたルールや自分達の価値観を見つめなおす。法律を全く知らない人も知っている人も是非。議論の深まりへようこそ。

〔分科会コーディネーター紹介〕



名前：菊池 宙 Sora Kikuchi

所属：東京大学 法学部 4年

出身：岡山、大分、神奈川、東京

趣味：ジム、早起き、自然を感じることに、バドミントン、旅行、勉強

好奇心を持ち世界の解像度を上げることが好き(になりたい)。大学卒業後は大学院で人間関係の修復業を担う法学をより深く学ぶ予定。最近、犯罪心理学、フィットネスなどに興味を派生。

JASC75では担当した台湾研修と長崎サイトが強く印象に残っています。報告書作成段階でも75の振り返りを消化できていないので、共に振り返るJASCer募集中です。一介の学生が社会に出るまでのこれからの道のりを、JASCの人間関係に刺激を受けながら過ごしていきたいと思えます。

関わっていただいた、そして今後関わらせていただく全てのJASCerの皆様、宜しくお願いいたします！

〔本会議前活動内容〕

毎週の勉強会及びアメリカ側との交流/勉強会

〔主に扱ったトピック〕

- 冤罪 - 袴田事件
- 中絶
- 医療倫理と安楽死
- 選択的夫婦別姓

- LGBTQ+
- 正義
- 平和
- 権力
- 自由

〔本会議京都サイトフォーラムでの発表〕

テーマ：The Ethics and Lawfulness Behind Japan's "Maiko-san"

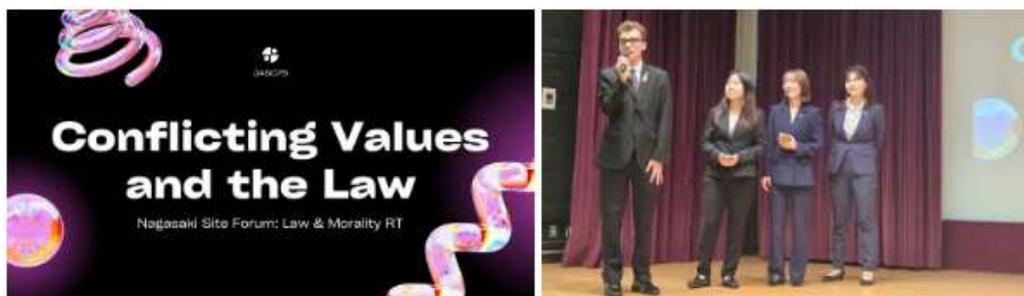
京都サイトにおいては、先斗町の舞妓さんを訪問させていただく機会があった。発表では、未成年者を中心とする舞妓さんについて、法的な保護がどのようなものなのか、憲法で定められている職業選択の自由や労働法などの観点から検討を行った。日本の伝統文化として華々しい側面を持つ舞妓さんについて、その魅力を存分に体験するとともに、文化的な両国の差異や法律上認められている権利の両国の差異に着目しながら議論をすることができた。舞妓さんに絞った発表という発表形式の是非についても議論を行ったことで、長崎や東京でのフォーラムでの発表形式やその内容をより充実させることに繋がった。



〔本会議長崎サイトフォーラムでの発表〕

テーマ：Conflicting Values and the Law

長崎サイトにおいては、長崎原爆資料館を訪れた経験を踏まえ、原爆に対する日米の教育の違いや、広島と長崎の位置付けの違いに着目した発表を行った。原爆は、日米学生会議の「日米」の価値観の違いが顕著に現れるトピックの一つである。加えて、第75回日米学生会議では長崎大学の学生にも参加していただき、彼らが受けた平和教育は、日本の他の地域で育った参加者が受けてきた平和教育と異なる側面を有しており、多様な視点を発表に盛り込むことができた。そして現行の被爆者救済法や日本が批准する条約にも焦点を当てることで、法的な観点からの考察を行った。

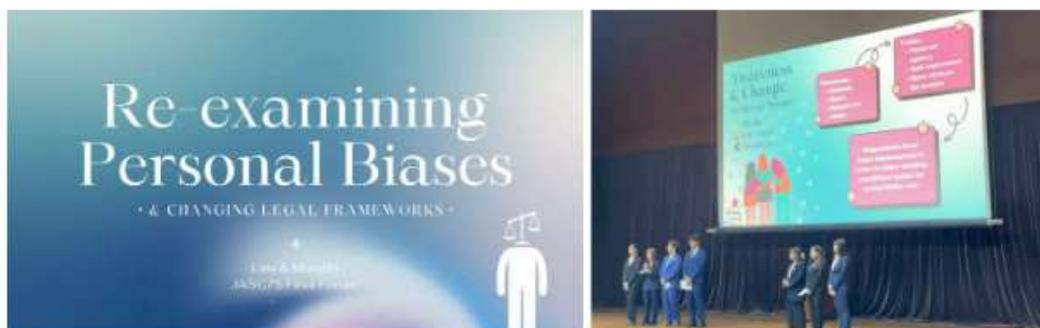


〔本会議ファイナルフォーラム（東京サイト）での発表〕

テーマ：Re - examining Personal Biases

東京サイトでは、社会で共有される価値観の変化が、法を変えることに着目した。そして社会の価値観の変化は、国際条約などの外圧、教育と個人人の選択、社会に存在する構造の変化、の3つによって引き起こされると考えた。ジェンダー、核戦力、性的マイノリティなど、分科会内で本会議を通して議論を重ねてきたトピックを取り上げ、社会の価値観が実際にどの様に変容しているかを考察することで、上述した社会の価値観が変容する道筋を帰納的に導いたのである。

JASCI/JASCIerは自身の偏見の認識や価値観の変容に開けた人々であるに違いない。目まぐるしく変化する社会の価値観や法的なフレームワークに目を向け、主体的に働きかけられる、そんなJASCI/JASCIer像を体現したかのような発表であったと思う。



〔日本側メンバー紹介〕



名前：チャ ユナ Yuna Cha
所属：順天堂大学 医学部 医学科 4年
出身：韓国、ソウル
趣味：アイスホッケー、旅行、読書

5ヶ国語ができる韓国人の留学生です。挑戦好きで「安定」を好まない性格で、医療と教育で国をつなぐという目標を持って日本語の勉強を始め、2年後順天堂大学の医学部に入学しました。

健康(命)が幸福の必須条件だと考え、命の最前線である災害医療に興味を持ち、フライトドクターを目指して医学部に入学しました。しかし、臨床実習中に心肺停止に至った重症妊娠高血圧症候群の症例を経験して、妊娠高血圧症候群が妊産婦や胎児の健康にどれだけ影響を与えているか実感し、現在は妊産婦・新生児・5歳以下の死亡率低下に貢献したいと思っています。臨床だけでなく研究にも携わりたいと思って大学ではがん遺伝子の研究や、妊娠高血圧症候群の症例で学会発表をするなど研究活動にも力を入れています。

自分の強みを一言で表すと「resilience」という言葉だと思っています。留学を決めてから今に至るまでチャレンジの連続でした。一番低かった言語の壁を越えて、今は「当たり前」が違う人々の間に馴染みつつ、自分らしさ(identity)を守るという壁の前に立っています。留学しながら心が折れそうな瞬間もたくさんありましたが、屈せず前に進んできました。このような自分のしなやかな強さを活かしながら、将来医師として国際社会に貢献していきたいと思っています。



名前：名古屋 佳那 Kana Nagoya

所属：慶應義塾大学 法学部 政治学科 2年

出身：東京都

趣味：ドラマ・映画鑑賞、音楽を聴くこと、謎解き、外国人と話すこと、美味しいご飯屋さんを探すこと

私は今まで日米合わせて9つの学校に通い、多くの人と出会いながら様々な経験をしてきました。その中で、人との出会いから得られる新たな気づきが自らの向上心や行動のきっかけとなる瞬間を幾度となく経験しました。特にアメリカの高校では、人への臆くなき好奇心が学校公式webにインタビュー記事を書けるライターへの関心につながり、新聞部所属と執筆活動という全く新しい領域に私を誘いました。一方、学外ではアメリカの大学のサマースクールや地元ボランティア、フィリピンとのオンラインプログラム参加へと幅を広げ、自分とは異なるバックグラウンドを持つ人々との交流が大きな学びとなりました。現在は、大学の留学生支援団体の活動やTBSの報道番組での通訳業務を通し来日した外国人と交流を図っています。海外という客観的な視点から日本の魅力を再発見すると同時に、日本が今後世界で生き残る道を模索することにハマっています。

私の趣味は日本のテレビドラマを観ることです。毎週、非日常の世界に没入できるその1時間のために日々の生活を頑張っているといっても過言ではありません。特に、事件や事故などを取り扱い、現代の社会問題に切り込んだ社会派ドラマをドキュメンタリー感覚で楽しむのが好きです。どういった境遇の人がどういった悩みをもって生活し、それがどういった問題を引き起こすのか。そして、それらの問題を解決するには社会でどのような変革が必要なのか。そんなことを真面目に考えながら毎週頭をフル回転させてテレビの前に張り付いています。こうしたテレビドラマの一番の魅力は自分の知らない世界や価値観に触れ、視野を広げることができる点です。自分の人生ではなかなか交わることのない人と物語を通じて出会うことで社会の新たな一面を知ったり、多角的に物事を見る目を養うことができます。その関心を更に追究するため、

今年度からは大学のメディアコミュニケーション研究所に所属し、メディアの力で「人間は他者への偏見を払拭できるのか」について考察を深めています！



名前：村上 太一 Taichi Murakami
所属：慶應義塾大学 法学部 法律学科 4年
出身：神奈川
趣味：筋トレ、街歩き、ドライブ

私は、弁護士としてM&Aを中心とした企業法務に携わることを考えています。私は、法律という倫理的・道徳的な分野とともに、経済社会の動きにも関心があり、上記進路はそのような興味・関心に沿っていると考えたからです。企業の活動は現代社会において非常に重要な役割を果たしていますが、企業は法人であり、法律という道具なしでは観念できない存在です。法律という枠組み・道具を使って、経済社会に与えることができる影響は大きいのではないかと考えています。

他人からは物事を要領よくこなすタイプであると思われがちですが、他方で、些細なことも立ち止まって考えてしまう側面もあると、自分では思います。私は、バランスの取れた人間であることを重視しますが、マクロ・ミクロ両方の視点をもつことは、このバランスを保つ上で重要であると考えています。



名前：李文佳 Ayaka Li
所属：慶應義塾大学 総合政策学部 総合政策学科 2年
出身：上海、東京
趣味：レコード集め、スキー、写真撮影、美術館巡り、楽器

私は人が大好きであり、初対面の人でもすぐに積極的に話しかけてムードメーカー的な存在になることが多い。例として、フランスで出会ったオランダ人とパリで店を駆け回る経験や、飛行機の隣にいた老人と仲良く会話していたこと、そしてスキー場のリフトで出会った人と共に東京で会うことなど、数々の思いがけない出会いが世界へのコネクションとなり、相手の年齢・人種・性別に関係なく、ストーリーを他人と共に創造することができた。このような一期一会を大切にしているからこそ、私自身も多くのインスピレーションを受けることができた。オランダの友人は好きな事に没頭していることや、スキーで共になった同年代の子は私と同じく未来についての悩みがあるなど、共通点があることに共鳴しながらも、皆の多様な生き方について感嘆し、必ずしも既存なルールに乗った人生が多数派ではないと心得た。

コミュニケーション能力が高いのも、楽観的な性格であることも、小さい頃から日本と中国の間を行き来し、多様な文化環境において成長したのが関連する。熱心な人たちに感化されながらも、文化的な背景により、日本と中国、さらには世界の架け橋になろうと考えた。今回の日米学生会議に参加する前から、ネット上で意気投合した社会人と共に日中交流会を開催し、両国の文化をSNS上で発信するなどの活動を繰り返してきた。政治的な側面や両国の国際関係に無力と感じながらも、民間的な友好に繋がるように努めた。日本と中国だけではなく、大学入学後にフランス語を学び、今後は欧米諸国も含めて改めて民間的な友好は何であるのか考えていきたい。

〔分科会総括〕

当分科会では、事前学習の段階から参加者の興味関心に即して持ち回り様々なトピックを扱った。「選択的夫婦別姓の是非」のような具体的社会問題について法的問題や解決策を考える議論や、「正義」「自由」といった価値観ベースで議論の方向性を定めない議論など、議論の形式そのものを模索しながら事前学習を行った。本会議に向けて、議論に必要な積極性や知識の土台を身につけることができた。

本会議では、第一サイトの京都サイトフォーラムで我々は、他文科会とは一線を画す内容で発表を行った。他文科会が、比較的京都サイト全体を通じて学んだ成果を発表する中、我々は「舞妓さん」に焦点を絞って発表を行ったのだ。サイト全体を通しての融合的な学びの発表に苦慮したのは事実だが、京都サイトで一つのトピックに焦点を絞り深く議論できたことは、その後の議論を活性化できた要因である。

長崎サイト、東京サイトを経て、最後のファイナルフォーラムでは、「Re-examining Personal Biases」という広いテーマで本会議全体を意識した発表を行うことができた。

参加者全員が、英語力の差や過密なスケジュールを乗り越え、途中帰国したマイケルを含めて全員で本会議をやり切ったことを誇らしく思う。

個性溢れる分科会メンバーが、今後もJASCer同士の繋がりを強固にしてくれる未来を楽しみにしている。

(菊池 宙、東京大学 法学部 4年：法と道徳分科会コーディネーター)



言葉と哲学分科会



〔分科会概要〕

当分科会ではあらゆるものの存在を露わにする「関係」を言語学的、哲学的思考を用い、愛・友情・信頼という三つの要素から深く考える。日米関係から個々人の繋がりまで、多様な関係性はどのように維持されているか、愛や友情はほんとうに存在するのか、なぜ人は他を信頼するのか、人工知能と人間は関係を構築できるのか、科学への信頼はなぜ揺れ動くのか。日米の参加者が多様な価値観を背景に、曖昧で変化し続ける「関係」を人工知能や医学といった人文の枠を超えたトピックも織り交ぜながら日米社会を議論する。これにより、懐疑的眼差し・物事の本質を捉える力を磨き上げる。当分科会では思考することに重きを置くため、所謂文系理系に囚われない議論を求める参加者を歓迎する。

〔分科会コーディネーター紹介〕



名前：山崎 万由佳 Mayuka Yamazaki
所属：国際教養大学 国際教養学部3年
出身：埼玉、山梨、神奈川、広島、岐阜、兵庫等
趣味：窓・道路・音楽・映画など美しいもの達の鑑賞、ジム

自己ってなんなんでしょうか。いちいち自己とは何かなんて考えていたら社会生活大変なんじゃないかと思いますが、頭が考えてしまうので続けます。そして、この書き出しの時点で、所謂自己紹介の路線は絶たれました。その点ご了承ください。

自己紹介の機会において、取りうる手段は大きく二つ、1. 自分のテンプレを紹介。2. その時の自分が自己であろうと思った徒然を紹介、だとします。後者では、自己というなにかをその時のテンションで切り取って外へ出し、それを重ねていくと、もしやもやもやとした自己の形が浮かび上がってくるかもしれません。自ら自己を自分に紹介していく、という点で自己への疑問へ対応する手段になりえます。これもまさにその一環です、やまごきまゆかでした。

〔本会議前活動内容〕

言葉と哲学分科会の当初の目的としては、言語学や哲学という思考の方法／観点を身に着け、物事を批判的に捉えることであった。そのための副題として、愛・友情・信頼という人間が人間やその他のものに関わるうえで基礎とするものを思考の指針とし、他分科会の専門的な議論において新たな視点の提供者として議論活性化を促進する役割を担うことを想定した。以上が参加者が実際に議論を始めるまでのアイデアであるが、実際の分科会では、よりトピックの内容が中心の議論が行われた。本会議前の分科会議論において、副題にある愛とは何かを皮切りに宗教、推し、政治、医

第六章 分科会

療倫理、AIなどの多岐にわたる題材を扱った。特に、アメリカ側とZoomを介して行った議論では、AIは芸術を創作できるか、AIは感情を持ちうるか、人間の使用言語とAIのプログラミング言語などの科学技術と哲学を掛け合わせ、人間（humanity）について示唆を与えるような題材を論じることがメインとなった。各々の大学での専攻が異なっていたものの、哲学的概念や人間らしさについては共通した興味をもっていたため、ある程度方向性の定まった議論が展開された。

〔主に扱ったトピック〕

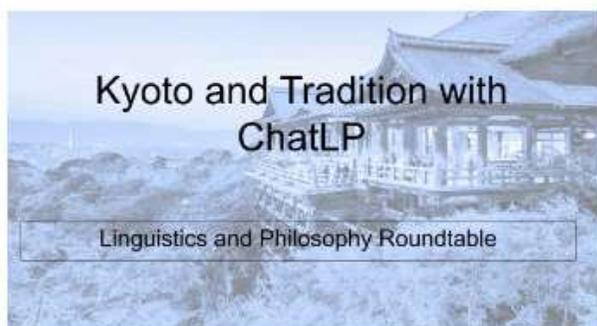
- 愛とはなにか
- AI
- 言語
- 宗教
- 政治思想

〔本会議京都サイトフォーラムでの発表〕

テーマ：Kyoto and Tradition with ChatLP 日本文化から捉える伝統の本質

京都においては、伝統の継承がメインポイントとなり、伝統文化の本質とは何かという大きな問いに対し、能や舞妓さんなどの日本の伝統と言われる文化において、人々は何を大切に引き継いできたのか、議論の中で発生した問とそれに対する見解を発信した。複数の問いを投げかけ、それらをChatGPTに模したプレゼンテーションにて発表することで、提示する内容が人間ではなく、ビッグデータを基にするAIによって生成されたものであるとき、それはどの程度妥当性を持つか／感じられるかといった思考実験の意味も込めた。

日米参加者が初めて対面で議論を行ったため、言語の壁や議論内容において調整しながらの議論であった。



〔本会議長崎サイトフォーラムでの発表〕

テーマ：On Self-Defence セルフディフェンス考察

第六章 分科会

長崎では、安全保障や潜伏キリシタンについての学びを基に、セルフディフェンスをテーマとして自己と他者の認識からAIによる国防についてなど、幅広い考察を行った。安全保障という一見言語学や哲学には無縁のテーマであるが、認識論/哲学やセルフとディフェンスの言語学的分析を用いての議論を行うことで、言葉と哲学分科会としての議論可能範囲を再確認した。長崎では、どのようなトピックをどこまで深めるかなどの議論概要をサイトの初期段階で話し合うなど、京都の反省を生かし、議論自体に対する構成を行った。



〔本会議ファイナルフォーラム（東京サイト）での発表〕

テーマ：AI and Humanity AIから考える人間らしさとは

最終サイトの東京では、ファイナルフォーラムに向けて、言葉と哲学を総括するにはどのようなトピックがふさわしいかの議論を初期段階で行った。フィールドトリップ先である日本科学未来館で得たAIと人間との違いという問を立てたが、違いを議論する上でhumanity/人間らしさの定義という必要不可欠且つ、新たな問題にぶつかり、以降は人間らしさの定義や存在意義についての議論へシフトした。ファイナルフォーラムの発表は、テーマを「人間らしさとは」、発表形態を議論の再現とすることで、言葉と哲学、そして日米学生会議の成果発表の形を呈した。他分科会が専門的な発表を行う中で、このようなプレゼンテーションをしたことは、日米学生会議という団体が、やはり人間らしい人と人との関係性やそれらの結果によって形作られていることを象徴するものであると言える。



〔日本側メンバー紹介〕



名前：石川 結菜 Yuina Ishikawa

所属：埼玉医科大学 医学部 3年

出身：東京都

趣味：アイシングクッキー作り、デッサン、絶叫系アトラクションに乗ること、KPOPアイドルの動画鑑賞、小説を読むこと

大学で行動科学を学んだことをきっかけに、医療倫理、心理学、哲学に興味を持つようになりました。昨今の医療現場では、患者さん一人一人のストーリーを重視して全人的なアプローチを試みるNBMが訴えられています。医学を学び始めた頃は、事務的な医療より温かみがあったいいな、と漠然と感じていましたが、NBMはどのレベルまで追求できるのだろうか最近興味を持つようになりました。NBMにおいて医療人は、患者さんの話に耳を傾け、彼らの意思を尊重するべきです。しかし、医療人は患者さんの話を全て鵜呑みにせず、仕草、表情などから彼らの本心をくみ取り、それを本人に確認するという手順も踏むことも必要ではないかと感じます。客観的なデータに加えて主観的な情報に基づいて行う医療は、どのレベルまで到達可能なのか、感情と行動の関係性から考えることに興味を抱いています。



名前：小林 弘典 Hironori Kobayashi

所属：国際基督教大学 教養学部 アーツ・サイエンス学科 2年

趣味：知らない街の街歩き、旅先での出会い、出かけた先での読書、食事、散歩、気に入ったフレーズや言葉を書き留めること、いろいろなコレクションをすること

「自己を表現する内容」を踏まえて、これまでを振り返ると、何をするときにも、考えるときにも、まっさきに好奇心があったことに気がついた。時折友人や大人たちから「ヒロはフツ軽だね」と言われるが、矢も盾もたまずと行動したくなってしまう好奇心のおかげ（そのせい）だろう。月並みな言い方であるが、好奇心と行動力がなぜあるのかを探ってみると、答えに窮した。自分がなぜ自分なのか、ということを明らかにすると同様に、もしくはそれ以上に難しいと感じる。ただ、一つには新しいものや、知りたかったことに接したとき、取り組む時の昂揚感が堪らなく好きな感情であるからだろう。だが、好奇心は猫をも殺すことわざがあるように、これを自制するべきなのかと悩むこともある。それでも、この気持ちを大切にしたいと思っていることは、その気持ちに自分が抗えないのだから、自己の断片かもしれないと思える。そんな'sense of wonder'を失わないでいたい。



名前：山本 雄翔 Yamamoto Yuto
所属：京都産業大学 国際関係学部 3年
出身：滋賀県
趣味：読書、音楽、料理、旅先の博物館巡り

皆さんはじめまして！私はJASC75では、自身の分科会ぎ言葉と哲学分科会ということもあり、本屋にて偶々手に取った西田幾多郎の『善の研究』を自らの課題図書として読んだ上で参加しました。これはアメリカ側参加者とも哲学や意識の話をしったりした上でとても役に立ったことをよく覚えています。

では私自身は哲学科なのか？というところではありません。私の学部は国際関係学部であり、ゼミではナショナリズム論を中心に学びを深めています。そして近代国民国家というシステムが出来たのは歴史的に見ればここ最近の事であります。それでも人々が何故国家と共に生きて来たのか、国家とは何なのかということは私がいま現在抱えている"人間とはどのような存在なのか"という問題意識にも合致しました。

私は元々、独ソ戦を中心とした軍事について興味を持っていました。しかし、それだけではない政治や外交、経済といった社会の重層性が織りなす複雑さを理解できねば、この事象を理解するのは難しいと感じています。ただ、だからこそ此の複雑さは人の持つ面白さそれそのものではないでしょうか。様々な人と議論を交わし、人とぶつかり切磋琢磨を経る事ができた日米学生会議はそんな、人間の複雑さを色々味わえる貴重な機会でもありました。そしてだからこそ、これからも一JASCerとして様々な物事へ挑戦をしていきたい所存であります。



名前：渡邊 めい May Watanabe
所属：京都大学 文学部 科目等履修生
出身：山梨県富士河口湖町
趣味：怖い話を読むこと、韓国アイドルを観ること、美術館鑑賞

数年前に書いたであろう「今後やりたいことリスト」の中に、「日米学生会議に参加する」という項目がありました。大学生になったらもっと広い世界を見てみたい、という夢が気が付けば2023年に叶っていました。嵐のような日々は過ぎればあつという間で、幻だったのではないかと不安になるくらい眩しい時間でした。そして確かに残る達成感と共に、リストの一項目を消すことができました。

〔分科会総括〕

第六章 分科会

全体として、複数の哲学言語学的アプローチを行いつつも、幅広い議論トピック・学問的知識ではなく、私たち人間に焦点を置いた発表を行ったという点で存在意義を見出した分科会であった。日米学生会議はそれ自体の定義が揺らぐ中で、学生が集い議論をすることで存続してきた。その根幹である人間を議論の対象に置き、ある程度日常レベルの間に落とし込んだ発表をしたことは、その場の発表の学問的価値や専門性においては欠けるように思えるが、日米学生会議という団体をメタ的に見つめるきっかけやその方法論として、ユニークなものになったと言える。また、学生だからこそ行える自由な活動・学生だからこそ持ちえない社会への影響を鑑み、そこへの受け入れを示す発表となったとも解釈できる。さらに、事前活動・本会議での議論トピックについては、所謂実践に結びつかないものが多く、昨今の就職先で日に見えて役に立つ学問が優遇される社会情勢の中では、主要な問いとして取りざたされ得ないものも多かったが、それ以前に思考を可能とする人間として存在する際の地盤である。そのような問いに真摯に向き合う姿勢を共有してくれた分科会参加者には感謝を表するとともに、今後も折に触れて言葉と哲学分科会の議論を反芻し、社会に生きる人間の一部として思考を続けて欲しい。それでは、最後の質問を。あの、愛って結局なんなんですか？

(山崎 万由佳、国際教養大学 国際教養学部 3年：言葉と哲学分科会コーディネーター)



社会階層と多様性分科会



〔分科会概要〕

自分とは何か。階級や国家への帰属意識はどのようにして生まれるのか。多様な社会で生きるとはどういうことか。これらの問いかけは環境や文化、歴史の中で私たちにどのような意味をもたらしているのだろう。現代は様々なイデオロギーに溢れており、自己や他者、生活環境に対する概念を無意識に形成している。本分科会では日米におけるエリート教育やパパ活文化から、医学や科学への集団間の認識の比較など、文理関係なく幅広いトピックを取り上げ、社会を階層と多様性という縦軸と横軸で考えていく。私たちが生きている社会はどのようなシステムで機能しているのか、それはどのように再生産されているのか、それが形成する力を議論していく。

〔分科会コーディネーター紹介〕



名前：玉眞 優里 Yuri Tamama
所属：法政大学 人間環境学部 3年
出身：千葉県柏市
趣味：ドライブ、旅行、お酒、バイト

人生100年時代、今21年目になります。これまでの19年間は何も変わらずに進んでいく日常への愛着を作る日々でした。いつもの道で、いつもの友達に会い、いつものご飯屋さんでくだらない話を永遠と。将来もなるようになると思い、今この時を楽しんでいた毎日です。

19歳の春偶然にもJASCerの一員となり、私の愛すべき日常が慌ただしく目まぐるしく変化していききました。なんだかんだJASCが楽しくて実行委員にまでなってしまう。それからの日常は、個性豊かな人と出会い、頭をフル回転させながら話し続ける毎日でした。

今では昔馴染みの友人や家族、個性豊かなJASCerも私の日常を色鮮やかにしてくれる存在です。人と出会い、話し、美味しいお酒とご飯を頬張るそんな日々幸せを感じています。

さて、今の私の将来は未定です。私の寿命が100歳だとするならば、残りの79年もきっと日々幸せを感じ、人に囲まれながら過ごしていることでしょう。いつまでも些細な幸せを見つけられるような人で居たいです。

〔本会議前活動内容〕

週一回のオンラインミーティングを行った。分科会の特性上、議論トピックを決めることが難しかったため、積極的に他の分科会と合同で行うジョイントミーティングを開催した。国際政治と日米関係分科会や法と道徳分科会、文化と芸術分科会とコラボし、双方の分科会の特色が良く生きる

第六章 分科会

ような議論を行えた。アメリカ側とも数回ジョイントミーティングを行い、参加者が本会議での議論で様々な視点で考えられるように工夫した。

〔主に扱ったトピック〕

- 社会的格差における運と実力
- 日本はどのような社会を目指すべきか（リベラルな社会と能力主義な社会の比較）
- 日本におけるフェミニズム
- 村八分
- 監視社会とプライバシー
- 受験から見る教育格差
- 政治制度
 - 政教分離
 - シルバーデモクラシー
 - 弱者保護はどこまですべきか
 - 政治的暴力とは
- 日本で大麻は合法化すべきか

〔本会議京都サイトフォーラムでの発表〕

テーマ：What part of culture is important to preserve?

- core of culture
- history

発表ではグローバリゼーション、花街文化、茶道、能楽をトピックとして挙げ、それらに共通していることは何かを探った。京都という伝統と文化が混ざりあう土地で文化がどのように受け継がれ、変容していったのか考えた。キーワードとしてそれらのトピックの「価値」を考え、今でも受け継がれていく文化は日本人のアイデンティティの核となっていると結論付けた。



〔本会議長崎サイトフォーラムでの発表〕

テーマ：Re-thinking the atomic bomb memory

「長崎市への原子爆弾投下の再考」

長崎原爆資料館を訪れ、展示の仕方に違和感をもった。原爆投下により悲惨な姿になった街の姿から何を学び、世界に平和をどのように発信するのか疑問を感じ、このテーマに至った。資料館は原爆で亡くなった方々に祈りを捧げるとともに、非核化をどのように実現するのか議論が行われる場であるべきだと発表した。日米の戦争教育の違いを考え、原爆の被害にあった外国人や社会的弱者の保護の仕方、原爆から得た教訓をどのように世界に発信するのかを掘り下げた。これらの議論の中で社会に周縁化される人々やラベリングすることの影響、歴史観・教育観の違いが主なトピックとして扱われた。



〔本会議ファイナルフォーラム（東京サイト）での発表〕

テーマ：What shapes national identity?

「何が国民性を形成するのか」

京都や長崎で日本人のアイデンティティについて考える機会が多くあった。また分科会のメンバーは日本で国際的な教育を受けてきた人や海外にルーツがある人、自分の住んでいる国とは異なる国にアイデンティティを感じている人など、日米だけでは語れない多様性があった。そのため、国民性という大きすぎる言葉はなにをもって構成されているのか考えはじめた。分科会では、国民性には歴史や経済、社会・文化や教育の四つの観点から語られると仮説を立てた。靖国神社や朝日新聞社訪問など、多種多様な分野の方々と交流を行い、ナショナルアイデンティティはどのような意味があるのか、社会と個人の間を議論した。目まぐるしく変化し続ける社会に生きていく私たちがこの社会でどのように居場所を作っていくのか、分科会メンバーの考えを提言した。



〔日本側メンバー紹介〕



名前：荒木 太一 Taichi Araki
所属：慶應義塾大学 経済学部 3年
出身：愛知県
趣味：サーフィン、スノーボード、スケートボード、ヒップホップ、ファッション、サッカー、スポーツ観戦、お笑い、ワンピース、ネットフリックス

私は趣味の欄でも記述した通り、サーフィンやスノーボードなど自然を相手にするスポーツが好きです。常に変容する自然の中なので二度と同じ条件でパフォーマンスができることがなく、また時には死を意識するほど自然の恐ろしさを肌で感じて自分の無力さを実体験できるからです。サーフィンに限れば、どの波に乗るのが一番良いのか、風や波などの周りの状況を把握してどのポジションにいれば波に乗りやすいのかなどを常に考えています。しかしどれだけ考えていてもほとんどのトライは失敗に終わってしまい、波に巻かれて大量の海水を飲み、死にそうになった経験も何度もあります。それでも納得のできるライドが1秒でもできれば、例えられないほどの興奮を覚えます。ゴールに向かって試行錯誤を繰り返し、失敗ばかりでもあきらめない、そのような姿勢が自然と形成されたのだと思います。JASCでもこの経験を生かして自身の無力さにあきらめることなく一所懸命にものがきたいと考えています。



名前：上原 賢斗 Kento Uehara
所属：東京外国語大学 国際社会学部 3年
出身：埼玉
趣味：旅

・興味があること

ここ最近の何年かははアフリカに興味があり、関わってます。途上国の開発に興味があり、東京外国語大学のアフリカ地域専攻に入学したわけですが、途上国支援であったり、開発に興味を抱いた原体験は、高校1年生の時にバックパッカーとして訪れたタイと中国で見た物乞いに衝撃を受け、その時強く社会の不条理を感じ、途上国の開発に興味を持ったことでした。大学入学後はリアルなアフリカを見たいと考え、休学して2年間滞在していました。滞在中は日本大使館でのアルバイト、難民キャンプ的なところでのNGOインターン、車でアフリカ縦断旅などをしていました。

・性格

行動力があり、外交的だと自分では思っていますが、皆さんどう思われますでしょうか？
そうだね！と思う方はグッドボタンと、チャンネル登録よろしくお願ひします。

・最近考えている事

どうやったら毎日楽しい日々を送れるか、ということを考えますね。もうそれ以外無いやろと。その「楽しい」を求めて頭を使って、体を使って日々行動しようと頑張ってます。



名前：バック キャスリーン 光 Kathleen Hikaru Buck
所属：国際基督教大学 教養学部 アーツ・サイエンス学科 2年
出身：アメリカ、神戸
趣味：旅行、漫画、アニメ

高校では、準備型ディベートや英語スピーチなどをしてきました。高校の頃から社会問題や広く社会の課題に興味を持っていて、去年の夏にロンドン大学東洋アフリカ学院に6週間留学に行った際、開発学の授業を受けたことをきっかけに、開発学に興味を持ちました。現在は大学で開発学の授業をとっており、特に「機会保障」という観点から、貧困問題、教育問題、人権問題などを中心に勉強するようになりました。機会保障とは結果の平等ではなく、その結果を得られるチャンスを保障することであり、この「結果を同じにするのは難しくても、その結果を得られるチャンスが比較的平等な社会」が「より多くの人により幸福な人生を送るにはどのような社会が理想的か」、「そのためにはどう変化しなければいけないのか」という問いのヒントになると考えています。最近はこの観点から、例えばサブサハラアフリカの教育現場の課題や健康問題、避難民の生活保護や人権問題などの事例について調べ、思考することが多いです。その流れで、フィリピンでの孤児院や小学校でのボランティア活動をする大学のサービスマーケティングのプログラムに参加する予定です。貧困や人権侵害が起きている現場に実際に行き、現地の人と交流し、生活することによってより実感を持って現状を把握し、問題解決に取り組めると思ったからです。また、まだ授業をとったことがないため知っていることは少ないですが、哲学、論理学、統計学、数学、神話や歴史などにも興味を持っています。



名前：福井 達於都 Taoto Fukui
所属：慶應義塾大学 法学部 法律学科 2年
出身：千葉県
趣味：ドラマ・映画鑑賞、サウナ、カフェ巡り、ファッション

私は、挑戦することが大好きです。自分の心の赴くままに、信念を持って努力し、それが実を結んだ時に大きな喜びを感じます。負けず嫌いな性格で難しいことほどやる気が起り、たとえ周囲から反対されても、どんなに険しい環境に置かれても決して諦めません。

高校時代は、模擬国連やカナダへの留学に、そして大学生になってからは、キャリア教育支援事業の支店統括や、NPO法人での長期インターン、大学の福利厚生機関である国際関係会の役員を経験するなど活動の幅を広げつつ、どの場所でも必ず結果を残すことに拘って過ごしてきました。

そんな私の原動力は、自身の過去の経験をきっかけとする、誰もが固有のアイデンティティやバックグラウンドを理由に生き方を制限されることのない社会を創るという志です。この志を遂げるために、多方面に手を伸ばし、それを解決するための総合的なスキルの会得を現在進行形で目指しています。

また、人生の選択肢をひろげてくれるドラマや映画が大好きで、小さな頃から暇さえあればテレビをつけ、あんな人生もいいな、こんな人生もいいなとひとり妄想にふけています。いつか誰もが互いの人生を尊重し、共生できることを願ってまずはJASC75と全力で向き合いたいと思います！

〔分科会総括〕

バックグラウンドが全く異なる日米8名の参加者で構成された分科会。興味範囲も考え方も様々であった。まず日本側参加者同士の問題として、どのような方向性で議論を行うのか、全員が興味をもって議論できるトピックはなにか、議論の結論は出すのか否か、JASCに求めることはなかなかなど、話し合いは尽きなかった。決して順調なスタートをきったとは言えずに迎えた本会議。

JASCに対するモチベーションの違いから何度もぶつかり、実行委員として頭を悩ませる問題も多くあった。しかし皆に涙ながらに想いを伝えた人や、全員の意見をくみ取りどうにか互いをつなごうとした人、停滞する議論の中で積極的に意見をだし、リーダーシップをとった人、言語の壁を乗り越え少しずつ意見を開いていった人など、参加者の多くの努力に励まされた。日本語話者が多くいたこの分科会では、特有な日米間の分断もあった。予定していたFTを中止してまで話し合ったこれからの分科会の在り方は、私にとってすごく印象深いものである。各々のこれまでの経験やJASCを通じどのような将来を描いているのか、じっくりと聞き話すことができた。

分科会としての方向性を何度も話し合い、行きついたファイナルフォーラムでのテーマは「national identity」。この分科会にぴったりのテーマだと感じた。日米だけでなく、その他の国や地域で形成された国民性や受けてきた教育の違い、国民性に対する意見の多様さなど、参加者のこれまでの経験を反映させつつ、JASCで学んだことを取り入れた、まさに分科会の集大成であった。

本会議終了間際に参加者らそれぞれが伝えてくれた「色々あったけど、この分科会で良かった」の一言は素直にうれしいものであった。色々、には楽しいあの時も苦しかったあの時も含まれる。それらを踏まえてこの分科会での経験は実行委員もとより、参加者らを豊かにさせてくれるものだと思っている。

他の仕事に追われ中々分科会に顔を出せず、また英語もままならず分科会には多くの迷惑をかけた。しかし、いつも温かく迎え入れてくれた参加者、そして私の分科会パディ兼親友として支えて

第六章 分科会

くれたアメリカ側実行委員Leviには感謝しかない。社会階層と多様性分科会と一緒に創ってくれてありがとう。当初は全く予想できなかった分科会の在り方だが、これもまた個性豊かな私たちらしくとても良かった。

(玉眞 優里、法政大学 人間環境学部 3年；社会階層と多様性分科会コーディネーター)



持続可能なビジネス分科会



〔分科会概要〕

目まぐるしく変わる社会情勢に適応し、企業は自身も社会を形成する役割を担う。そのために環境を変え、戦略を変え、時には経営理念までも変える。グローバル化はビジネス界に光と影をもたらした。各国企業が連携し、多国籍企業も増える中で、1980・90年代には世界の時価総額ランキングトップを占めていた日本の企業は姿を消した。しかし企業の価値は本当に利益の最大化のみから測られるのだろうか。21世紀の現在、CSR・サステナビリティなど企業は利益追求以外の面にも目を向け、他の企業との差別化を図っている。当分科会では、実在する企業・産業を議論の対象とし、日米間の企業文化に踏み込んで議論するとともに企業の役割や利益追求と持続可能な社会の両立など、21世紀のビジネスの姿を模索する。

〔分科会コーディネーター紹介〕



名前：田頭 奈寿菜 Nazuna Tagashira

所属：国際教養大学 国際教養学部 3年

出身：埼玉県

趣味：旅行、標識を見ること、お散歩、分析・想像すること

日米学生会議を知ったのは2022年の冬。まさか2年後に日本から約8000km離れたラトビアで実行委員として報告書を書くことになるなんて思いませんでした。人生は何があるかわかりませんし、いつも想像の範囲を悠々と超えてきます。理想の実行委員像を勝手に作り、まだまだ私は違うと悩む時期もありました。しかしいつまでも届かないので「理想」なのです。JASCの活動でも理想や想像と全く違う方面に向かうこと、微妙に違うことなど、数えきれません。社会と、人と関わるとその傾向は強くなるように感じます。最初を書くべきことを最後に書きますが、私は自己紹介が苦手です。何を伝えるべきなのかいつもわかりません。この自己紹介で何か伝わっていただければ幸いです。

〔本会議前活動内容〕

初回のミーティングを4月にオンラインで行い、顔合わせや交流を深めるとともに各々の興味を話し合った。1週間に1度しかないミーティングの時間を有効活用するために、発表者を一人決め、プレゼンテーションや資料を事前に作成してもらっていた。毎回の発表ではコーディネーターも議論に参加していた。5月に行われた春合宿まではコーディネーターが話すことが多く、運営において少しの不安もあった。しかし春合宿当日は分科会参加者のみで議論をすることが多くあった。

第六章 分科会

め、本人たちの積極性がより表面に現れていたと感じる。議論方法に対しての議論が生まれ、「主張形成型議論（1つの答えを出す議論）」・「議論歓迎型議論（考え続ける議論）」の2つをどのように活用していくかなど、全員で本会議の方針を話し合っている姿が印象的であった。全員が対面で会うことができる最初の機会でもあったため、議論以外にも交流が深まった。6月の安全保障研修や、台湾研修に全員で集まることはできなかったが、引き続き7月までオンラインでの議論交流は続いた。



〔主に扱ったトピック〕

- ビジネスの定義
- 持続可能の定義
- ビジネスの需要と順応性
- 環境保護とビジネス
- 政治問題におけるビジネスへの影響
- 2種類の議論方法
- コンプレックス広告
- CSR（企業の社会的責任）
- Fight Shame
- Resources on the planet is limited, what can we do to maintain it to the next generation（英語での議論）
- WEF（世界経済会議）

〔本会議京都サイトフォーラムでの発表〕

テーマ：京都サイトでのプログラムで扱ったビジネスの今後の展望、将来性について

（舞妓さん・芸子さん、能、茶道や裏千家、村おこし、茶摘み、水田）

京都の伝統産業の振興は、その伝統の保持と革新のバランスによって成り立つ。伝統の保持を「文化の維持」と捉え、根底にある価値を守る事に重きを置き、革新を「時代の変化への適応」とは、新技術との融合、外国への販売促進によるグローバル化や若い世代の参画を計ることである。



〔本会議長崎サイトフォーラムでの発表〕

テーマ：佐世保市の経済状況と課題

長崎県の中でも佐世保米軍基地を持ち、佐世保海上自衛隊のある佐世保市に注目し、佐世保市の経済状況を調査し、日米関係の今後を踏まえつつ、市の経済における持続可能性を展望する。

佐世保市の経済の多様化を計り、佐世保経済のリスク分散させること、具体的には佐世保市の経済の持続可能性を地元の消費者のニーズに応えとともに、安定した雇用を提供することと捉え、佐世保観光ビジネスを提案する。日米関係に関して両国にとって持続可能な関係性を保つために必要なことを考え続ける。



〔本会議ファイナルフォーラム（東京サイト）での発表〕

テーマ：持続可能性を包括したビジネスが世界にとって“良い”ことを行うには

各サイトから学んだこと（京都サイトで伝統と革新、長崎サイトで危機管理、東京サイトでコーポレートシティズンシップ）を汲み取り、ビジネスの持続可能性について社会の動きを踏まえ、将来への見通しを検討した。

企業は中核となる目的と価値を見失うことなく、進化する世界の中で自らを維持しなければならない。厳しい時代を生き抜くためには、企業も社会も持続可能性を目指さなくてはならない。企業は社会における自らの役割や地域社会や環境に与える影響を認識しなければならない。それらの状況がそろった上で、持続可能なビジネスは経済、環境、そして人類を豊かにする世界を育む事ができる。



〔日本側メンバー紹介〕



名前：佐々木 妙子 Taeko Sasaki
所属：創価大学 経済学部 経済学科 3年
出身：東京都
趣味：映画鑑賞・絵画

私は、絵を描くことが好きです。絵を描いているときは時間感覚にバグが生じます。絵が上手な訳でも頻繁に描く訳でもありませんが、いろんな色を混ぜて自分の納得する色を作ることがたまに好きです。この事に関連しているかはわかりませんが、チームワークの際、異なる意見から他者の考える本質的価値を見出し、それらを混ぜて新しいアイデアができた時に胸が高鳴ります。おそらく、私は異なる意見にも共感して試してから思考ができる柔軟な頭を持っています。そのため極度の優柔不断でもあります。苦手なことは、外食の際にメニューを選ぶことです。しかし、自己の信念に背くことは好きではありません。現代の混沌とした社会をどうにか平和の方向へ、人間の尊厳が守られる方向へ引っ張っていきたいという志を胸に秘めて生きています。加えて、幼少期にザンビアに住んでいたことから、途上国や紛争地域の人々が自らの選択において尊厳のある生き方を達成できる社会を作りたいと夢んでいます。そのため、大学では開発経済学を専攻し、課外活動としては社会問題解決型プログラムに所属したり、フィリピンのソーシャルビジネスインターンに参加したりしています。また、私は経済学、心理学、社会学等を融合し、物や人の潜在的な力を誘発・創造できる社会デザイン設計に強い魅力を感じています。そのため、さまざまなセクターが協力し、社会的立場の弱い人々がより良い生活を送れる社会の仕組みを模索しています。



名前：鈴木 涼 Ryo Suzuki
所属：国際教養大学 国際教養学部 2年
出身：神奈川県横浜市
趣味：歌う、読書、寝る、食べる、アニメみる、音楽など

主に興味があるのは、教育、日本社会、環境倫理やファッションの社会問題などです。（私は気分屋で、興味関心もいろいろと移っていきっていますが、）最近特にメディアのあり方についてよく考えています。マスメディアが果たすべき役割はなんなのか、機能不全に陥っているのではないかなど。特に最近ではニュース番組のエンタメ化が気になっています。SDGsの捉え方から政治関連の報道のされ方なども、もっといい方法はないかな、と勝手に考え込んだりしながらテレビを見ています。

最近していることで面白いことと言ったら、学祭とか近所のマルシェで古着屋さんをやっていることです。古着の魅力を伝えながらファッション業界の持続可能性について考えてもらうことができたらいいな、と思って不定期に活動しています。



名前：孫 望舒 Wangshu Sun

所属：国際基督教大学 教養学部 アーツ・サイエンス学科1年

出身：中国北京市

趣味：詩を読むこと、ドラマ鑑賞、脚本を書く、散歩、グッズ集め、旅行

私は中国北京市で生まれ育ち、中国国内で韓国にルーツをもつ少数民族に属します。更に家族の関係で転々とし、アメリカでの滞在や現在の日本での生活で、たくさんの「衝撃」を覚えました。それらの経験はこの世界をより知るための切り口、物事の複雑性や背景が伺えると気づき、次第に自分はこの「衝撃」の感覚でワクワクしてたまらない気持ちになりました。同じ中国人なのに少数民族に対する扱い方が異なり、アメリカの華人学校に通った時同じ中国出身の人から英語で話しかけられた時の戸惑い。そして、特に日本での生活は、中国とは一衣帯水な位置にあるにもかかわらず、例えば日本語の面白さ、中国との文化の比較、些細なことまで、多くの驚きと発見に満ち溢れた毎日をご過ごしています。自分が持つ慣習や文化が他人とは違うことが自分にとってどんな意味があるのかを考え抜いた結果、背景から物事を理解し、周りの良さを自らのものにするのだと気づきました。高校で偶然参加した講演会で、国際協力に取り組んできた現役医師の行動力、考え方に感銘を受けて、それ以降、少しでも「やってみたい」気持ちがあれば挑戦するようにしています。周りを観察したことからその特有の良さを吸収して、考えを再構築するのが習慣になっていました。それゆえに、様々な出会いを通じて私は自分の考えをどんどんアップデートしていき、行動に移しました。

今年、私は20歳で高校を卒業しました。その理由は中学2年生で来日し、一般入試で高校受験に備えたいがために学年を2つ下げたからです。高校進学時、初めて「在日外国人枠」や推薦入試の存在を知り、一時期悩まされた年齢のことは本来回避することができたと痛感しました。それは、来日した当初の自分には外国人として情報に閉塞的で、ロールモデルや進路・日本語支援がなく、政策の不足を全て自力でしか解決することができなかったことが背景にあります。自分と同じ境遇の在日外国人児童生徒の支援団体でボランティア活動、情報発信やフォーラム参加を継続して行っています。現在では在日外国人児童生徒の居場所作り・日本語及び進路支援を提供するNPO格学生団体の構想を練っている段階です。

こうして色々な偶然に導かれて、私は、その一つひとつをチャンスとしてとらえ、掴める自分でいたいです。そしていつでもワクワク、衝撃を覚えながら新しい旅に乗り出したいと、最近つくづく感じます。



名前：田村 航 Ko Tamura
所属：一橋大学 法学部 法律学科 4年
出身：山梨県南アルプス市
趣味：テニス、読書、カラオケ

大学生活では、政策立案コンテストの運営、ビジネスプランコンテストの立ち上げ、大学内コミュニティ運営などを行ってきました。今振り返ってみると、自分の興味関心が徐々に移行行く中で、その時々自分がわくわくすることに身を投じてきたのだと思います。いわば、「わくわくドリブン」での選択であり、この言葉を私は大切にしています。

卒業論文ではイノベーションにまつわる政策について研究したいと思っており、このテーマは私が所属する「持続可能なビジネス」分科会での議論と密接な関係を有することになるだろうと思っています。様々な分野の知や経験を結合し、よりよい社会の実現に資するアイデアの発想、その社会実装を実現するためにはどのような環境整備が必要なのか、そして自分がそのような人材となっていくためには今後のキャリアをどのように歩んでいけばいいかという問に向き合っていきます。

〔分科会総括〕

「持続可能なビジネス分科会」。当分科会では「ビジネス」とは「持続可能」とはどのように定義でき、お互いがどのように理解しているのかを共有することから始まった。分科会作成時にコーディネーターは「持続可能なビジネス」という言葉に疑問を抱いてほしいと期待していたため、分科会参加者が同じ温度感で分科会名についての握り下げ、議論が始まった事は大変嬉しく感じた。事前勉強会を含む準備は、各々が抱える本会議への不安を解消するものであることが大半であった。そのため知識を多くインプットする形の議論の回や英語で議論を行うこともあった。本会議では実際のビジネスの話聴き、それらのビジネスに関して今後の将来性を話し合った。その中で持続可能性に関して2つの視点から考えていた。1つは、商業そのものが文字通り永続的であること、2つ目は昨今話題の自然環境・労働環境などへの配慮を行い、利益とは別に追求しているビジョンがあること。

日本側ビジネス分科会では学業との両立をしながらの日米学生会議の活動は決して簡単なものではなかったと考える。そんな中でも事前準備を怠らず、積極的に意見を出し合い議論する様子に毎度感動していた。日本側参加者は元よりじっくり考えをめぐらせ、意見を形成し発言する参加者が多かった。さらにアメリカ側参加者は英語ネイティブもしくは普段から英語を使用し議論を行うこ

第六章 分科会

とに慣れている。共通言語を英語にスピードが速い議論を行うことは精神、身体に負荷をかけているに違いなかった。本会議中に印象的だったのは、日本側参加者の成長である。それぞれが日米学生会議にかけていた想い、事前に共有していた会議の目標を再確認しあい、献身的に励ましあっていたことだ。思ったことがあっても上手く言葉にできないもどかしさを互いに共有していた。さらには意見の食い違っている双方から話を聴き、個人の意見・分科会としての方向性のバランスをとっている姿も目にした。

サイトや実行委員の別業務を全うするあまり、コーディネーターとして分科会活動に参加できないことがあるなど至らないところが多々あったと思うが、最後まで共に活動できたことを大変嬉しく思う。ビジネス分科会の皆には心から感謝申し上げる。一緒に素敵な分科会にしてくれたササバスのみんな本当にありがとう。∞

(田頭 奈寿菜、国際教養大学 国際教養学部 3年：持続可能なビジネス分科会コーディネーター)



第七章 後援・協賛・賛助・共催・協力

●主催および後援団体協力者

I. 会議全般

■主催

一般財団法人国際教育振興会

代表理事 金野 洋

事務局 伊部 亜理子

国際教育振興会賛助会

名誉会長 高円宮妃久子殿下

会長 藤崎 一郎

事務局長 伊部 亜理子

International Student Conferences, Inc.

事務局長 Bahia Simons-Lane

■賛助

一般財団法人東京倶楽部

日本万国博覧会記念基金

一般財団法人尚友倶楽部

公益財団法人三菱UFJ国際財団

公益財団法人双日国際交流財団

一般財団法人霞会館

東日本旅客鉄道株式会社

一般財団法人日米協会

一般財団法人日本文具財団

住友商事株式会社

日米学生会議同窓会

国際教育振興会賛助会

■後援

外務省

国際文化交流審議官 金井 正彰

大臣官房人物交流室 室長 渡邊 慎二

文部科学省

国際統括官 渡辺 正実

在日米国大使館

駐日大使 ラーム・エマニュエル

広報文化交流部・教育人物交流室

教育・人物交流担当官

Sarah Belousov

一般社団法人日米協会

会長 藤崎 一郎

専務理事 岡本 和夫

■推薦状協力

みずほフィナンシャルグループ 名誉顧問

橋本 徹

立命館大学 客員教授 今井 義典

日米協会 会長 藤崎 一郎

II. 京都サイト

■共催〈ユースフォーラムプログラム〉

京都外国語大学

■賛助

京都日米協会

京都文化交流コンベンションビューロー

食品ロス・リボンセンター

グローバル人材育成センター

III. 長崎サイト

■協賛

長崎商工会議所

国立大学法人長崎大学

長崎外国語大学

長崎日米協会

佐世保日米協会

株式会社コミュニティメディア

長崎バス観光株式会社

長崎につしょうかん

西肥自動車株式会社

■賛助団体・企業、賛助者

長崎サポート委員会

IV. 東京サイト

■協賛

西村あさひ法律事務所・外国法共同事業
法政大学
三菱商事株式会社
株式会社ローソン

●選考活動

I. 日米学生会議同窓会

岡本 実
竹本 秀人
福谷 尚久
佐野 日出之
橋本 遥
竹内 智洋
田邊 和子
仲尾 聡
市川 比呂也
木戸秋 圭一
吉野 次郎
新郷 雅大
佐々木 彩乃
Roy J. Lee

II. JASC74試験補助員

朝倉 菜名子
石井 颯太
石川 隼人
大久保 理子
大多和 祐介
大森 陽平
橋本 研人
松尾 智景
村越 和輝

山本 悠太

横田 双葉

III. 選考合宿

古民家 すきま風

●広報活動

I. 団体

塾生情報局（慶應生向けメディア）
公益財団法人 星陵会館

II. 個人

北海道文教大学国際学部長 青崎 海
株式会社西武・プリンスホテルワールド
ワイドディベロップメント部 林 正彦
第62回会議実行委員 高田 修太
第63回会議実行委員長 竹内 智洋
第65回会議実行委員 森田 修弘
第69回会議実行委員 齊藤 和平
第69回会議参加者 松村 健太郎
第70回会議副実行委員長 佐々木 彩乃

III. ホームページ制作

株式会社かるてぼすと 木下 茂雄

●事前/事後研修

I. 春合宿

■会場

国立オリンピック記念青少年総合センター

■ようこそ先輩

岡本 実
竹本 秀人
秋間 修

和田 昭徳
岸田 守
木ノ上 高章
福谷 尚久
武田 興欣
大塚 雄三
佐野 日出之
橋本 遙
金野 洋
市川 比呂也
木戸秋 圭一
武田 興欣
仲尾 聡
吉野 次郎
森田 修弘
吉田 知史
斉藤 和平
Roy J. Lee
Luis Montaña Michel
小溝 舞
木村 勇人
野澤 玲奈
鈴木 悠太

■ 撮影

大多和 祐介

II. 安全保障研修

■ 航空自衛隊幹部学校航空研究センター訪問

航空自衛隊幹部学校長兼日黒基地司令 空将
影浦 誠樹

航空自衛隊幹部学校航空研究センター研究
企画管理室 2 等空佐 丹羽 雅士

■ 防衛大学校訪問

防衛大学校

学校長 久保 文明
社会連携推進室
連携推進専門官 梅木 英則
人文社会科学群国際関係学科 石原 魁人

III. 台湾自主研修

台日学生交流会
国立台湾大学
外交部台湾日本関係協会 陳 登元
台北駐日経済文化代表処教育部 黄 超
台北駐日経済文化代表処政務部 林 彦廷
日本台湾交流協会 角田 径子
野村 英登
長田 祥
山田 佑

IV. 直前研修

京都市宇多野ユースホステル

V. 福島合宿

資源エネルギー庁 参事官 木野 正登
浅野 燃糸 双葉事業所
一般社団法人とみおか Windメーヌ
代表理事 遠藤 秀文
震災遺構 浪江町立請戸小学校
東京電力廃炉資料館
東日本大震災・原子力災害伝承館
福島第一原子力発電所
双葉町産業交流センター
ホテル逢人館

I. 台湾勉強会

吉田 知史

II. 内閣府デジタル田園都市国家構想実

現会議事務局勉強会

スマートシティ官民連携プラットフォーム
事務局 坂口 正樹

III. 藪中三十二先生との勉強会

藪中塾グローバル寺子屋 塾長
大阪大学 特任教授 藪中 三十二

IV. KPMG訪問

株式会社KPMG Ignition Tokyo
馬場 功一

V. 防衛大学研究所

防衛省防衛研究所 千々和 泰明
兵頭 慎治

VI. 三菱商事勉強会

笠井 寛子

●本会議

I. 京都サイト

■共催〈ユースフォーラム〉

京都外国語大学

学長 小野 隆啓

名誉教授 松田 武

国際貢献学部グローバルスタディーズ学科
副学科長教授 Jay KLAPIHAKE

国際貢献学部グローバルスタディーズ学科
教授 黒住 淳人

教務部長 下松谷 勤

■賛助

京都日米協会 村田 晃嗣
飯田 健

京都文化交流コンベンションビューロー
式田 有希子

■協力

京都市

市長 門川 大作

総合企画局総合政策室大学政策担当
留学支援・大学連携推進担当課長
川本 一範

総合企画局総合政策室大学政策担当
留学生支援係長 辻井 剛

総合企画局総合政策室大学政策担当
上掛 周平

大学コンソーシアム京都

公益財団法人稲盛財団

理事 経理財務部部长 姫田 和仁
総務部部长 高田 忠浩

日米学生会議アラムナイ

竹本 秀人

岡本 実

島本 晴一郎

富川 秀二

杵本 友里

橋本 遥

第65,69,72,73,74回日米学生会議実行委員
吉川 雄大 (写真撮影)

在大阪・神戸米国総領事館

総領事 Richard Mei

広報文化外交部 阪田 隆治

京都市国際交流会館 館長 林 建志

NPO法人エコネット近畿理事

仲津 英治 (基調講演)

先斗町芸舞妓

豆千佳

もみ紬

市琴

茶道裏千家

第15代 前家元 千 玄室 大宗匠

第16代 家元 千 宗室

金剛能楽堂

金剛流能楽師 金剛 龍謙

金剛 育子

能楽シテ方金剛龍師範、

第七章 後援・協賛・賛助・共催・協力

京都市認定通訳ガイド 田中 春奈
株式会社龍村美術織物
取締役 総務担当 龍村 直
総務部部长 岩本 武
京都国立博物館学芸部調査・国際連携室
降矢 哲男
建仁寺塔頭兩足院副住職 伊藤 東凌
NPO法人環境カウンセラーズ京都理事長
金田 山紀夫
綾木企画技術士事務所代表・技術士
(森林・総合技術監理部門)
環境カウンセラー 綾木 光弘
公益社団法人日本技術士会近畿本部兵庫県支部
幹事 青木 聡明
京都府相楽群南山城村
村長 平沼 和彦
企画政策課 課長 井上 浩樹
課長補佐 橋本 昌貴
京都府相楽郡南山城村野殿区
区長 山本 隆弘
副区長 森嶋 徹
猟友会 中村 富士雄
横畑君子童仙房一本松茶畑
横畑 君子
横畑 直樹
植田農園
宮川町 水簾 烏谷ご家族
Kizuna across cultures 代表
スメサースト文子
日本ファクトチェックセンター創刊編集長
古田 大輔
一般社団法人食品ロス・リポーンセンター
代表理事 山田 英夫
田中 エミ
宮崎大学農学部畜産草地科学科 川島 知之
有限会社伊勢屋精肉店代表取締役 雲井 慎也
三重県立四日市農芸高等学校農業科学科教諭
福永 敦史
三重県立明野高等学校生産科学科教諭
神野 亮太

宮崎大学 金谷 かぐら
三重大学 宮本 望愛
三重県立明野高等学校 神森 快
平松 巧
藤岡 美陽
環境カウンセラー全国連合会代表理事
藤本 晴男
兵庫環境カウンセラー協会理事長
仁保 めぐみ
京都サイトフォーラムご来場者

II. 長崎サイト

■長崎サポート委員会

委員長

山川 信彦 佐世保日米協会 会長/
株式会社十八親和銀行
取締役頭取

副委員長

米田 利己 株式会社コミュニティメディア
代表取締役

事務局長

山口 成喜 佐世保日米協会 事務局長

委員

坂口 育裕 長崎県文化観光国際部 国際課長
野田 智浩 長崎市秘書広報部 国際課長
森 拓二郎 長崎商工会議所 会頭
金子 卓也 佐世保商工会議所 会頭
河野 茂 国立大学法人長崎大学 学長
浅田 和伸 長崎県公立大学法人
長崎県立大学 学長
姫野 順一 長崎外国語大学 学長
宮脇 雅俊 長崎日米協会 会長
米田 利己 株式会社
コミュニティメディア
代表取締役
井上 智之 長崎バス観光株式会社
代表取締役社長
豊田 貴人 長崎にっしょうかん

■協賛

西肥自動車株式会社

■協力者

国立大学法人 長崎大学

広報戦略本部

研究国際部 国際企画課

核兵器廃絶研究センター (RECNA)

センター長教授 吉田 文彦

長崎県 国際課

長崎市

長崎市国際課課長 野田 智浩

株式会社岩崎商事グループ (膳業家)

公益財団法人 長崎平和推進協会

継承部会 計屋 道夫

大庭 義弘

長崎新聞社

長崎県立佐世保青少年の天地

長崎にっしょうかん

第65回日米学生会議実行委員

長崎サイトフォーラムご来場者

■長崎大学企画委員

長崎大学 多文化社会学部

多文化社会学科 国際公共政策コース

大西 健太郎

木田 莞奈

平部 桃子

長崎大学多文化社会学部 多文化社会学科

社会動態コース

岡田 咲

III. 東京サイト

■協力者

いのちの里山 びーすふるファーム

株式会社MM総研

代表取締役所長 関口 和一

外務省

西村あさひ法律事務所・外国法共同事業

藤田 直介

在日米国大使館

法政大学グローバル教育センター

国際交流課 松田 一重

三菱商事株式会社

株式会社ローソン

ファイナルフォーラムご来場者

IV. 旅行手配協力

京王観光 山本 奈津美

●分科会活動

■文化と芸術

チームラボプラネッツ TOKYO DMM

豊洲・チームラボ株式会社

■環境と科学技術

内閣官房デジタル田園都市国家構想
実現会議 事務局

国土交通省都市局都市政策課

スマートシティ官民連携

プラットフォーム 事務局 坂口 正樹

■国際政治と日米関係

東海旅客鉄道株式会社

■法と道徳

明治大学博物館 刑事部門

■言葉と哲学

日本科学未来館

■社会階層と多様性

朝日新聞社CSR推進部企画委員

読者サービスグループキャップ
安井 克行

三井物産株式会社
コーポレートデベロップメント本部
戦略企画室室長 見市 礎

■持続可能なビジネス

BLJ Myanmar Co., Ltd 御田 麻友

●日米学生会議同窓会・
国際教育振興会賛助会

I. 日米学生会議同窓会

会長 岡本 実
副会長 竹本 秀人
秋間 修
和田 昭徳
竹内 幸美
岸田 守
幹事長 富川 秀二
常任幹事 井伊 雅子
木ノ上 高章
福谷 尚久
武田 興欣
大塚 雄三
佐野 日出之
平竹 雅人
細野 恭平
大和 亜基
乗竹 亮治
川口 耕一郎
竹内 友里
橋本 遥

竹内 智洋

II. 国際教育振興会賛助会

■法人会員

株式会社アルコパートナーズ
伊藤忠商事株式会社
株式会社オリエンタルランド
キックマン株式会社
株式会社KPMG Ignition Tokyo
ZAZA株式会社Metoree事業部
サントリーホールディングス株式会社
株式会社サンブリッジコーポレーション
株式会社CEAFOM
株式会社セブン&アイ・ホールディングス
禅林寺
ダヴ・ケミカル日本株式会社
タカラベルモント株式会社
デルタ航空会社
東京海上日動火災保険株式会社
東京ガス株式会社
一般財団法人凸版印刷三幸会
トヨタ自動車株式会社
株式会社ニコン
日本空港ビルディング株式会社
株式会社日本政策投資銀行
日本製鉄株式会社
日本生命保険相互会社
日本テレビ放送網株式会社
日本電信電話株式会社
野村ホールディングス株式会社
富士急行株式会社
富士フィルムビジネスイノベーション
株式会社
丸紅株式会社
株式会社みずほフィナンシャルグループ

第七章 後援・協賛・賛助・共催・協力

株式会社三井住友銀行
三井物産株式会社
三井不動産株式会社
三菱HCキャピタル株式会社
三菱重工業株式会社
三菱商事株式会社
株式会社三菱UFJ銀行
メリックス株式会社
森ビル株式会社
ユナイテッド・マネージャーズ・ジャパン
株式会社

■個人会員

秋間 修
今井 義典
岡本 実
小田垣 祥一郎

北城 悟太郎
木村 浩一郎
千本 倅生
竹本 秀人
橋・フクシマ・咲江
西澤 淳
富川 秀二
橋本 徹
アーネスト・エム・比嘉
平竹 雅人
藤崎 一郎
細野 恭平
山田 勝
茂木 健一郎
和田 昭穂

株式会社ローソン様より2500個の食品寄贈

京都サイト、長崎サイト、東京サイトにおいて、株式会社ローソン様より2500個の食品を寄贈していただいた。

株式会社ローソン様は、食品ロス削減や子どもの貧困などの社会課題の解決に寄与するため、2019年より、物流センターにおいて賞味期限は残っているものの店舗への納品期限を迎えてしまった加工食品などの「未利用食品」を、支援を必要としている家庭などに届けられている。

我々からの食品援助の依頼を受け、未利用食品の一部を提供していただいた。将来を担う若い世代を支援し、かつ、食品ロスという世界的な社会課題を日米の学生に改めて考えるきっかけになることを期待してくださった。

株式会社ローソン様ではこれまでも、「一般社団法人全国フードバンク推進協議会」や「こども宅食応援団」などを通じて、未利用食品の寄付を実施されてきた。今後もさまざまな企業・団体や自治体とのパートナーシップにより、あらゆる立場で支援を必要とする方々へ未利用食品を届けることで、食品ロスや子どもの貧困などの社会課題解決に取り組まれていく。

(岡田 潤、高根大学 生物資源科学部 3年：東京サイト実行委員)



(写真左は、京都サイト・写真右は、東京サイトにて受け取り時に撮影)

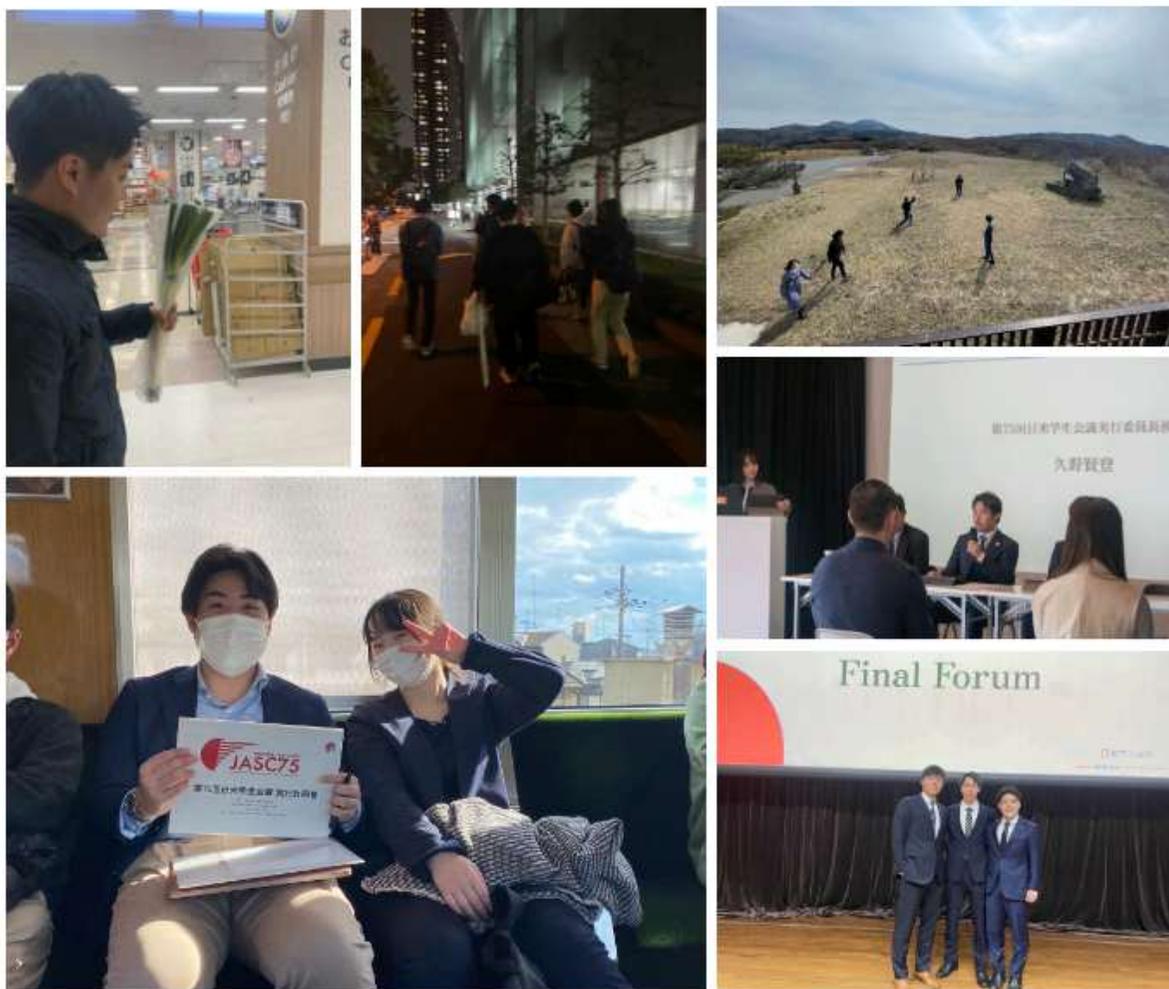
第八章 実行委員のあとがき

久野 賢登（第75回日米学生会議実行委員長）

第75回JASCでも、メンバー全員がしっかりと、日米のリーダーとして力強い一歩を踏み出しました。

私個人としましても、その旅路では多くの方との切磋琢磨を通じた成長を実感しております。今後も、1人のJASCerとして、精進してまいります。

第75回JASCに関わってくださった皆様、私のOnce-in-a-lifetime experienceを彩って下さり、誠に、ありがとうございました！



菊池 宙（第75回日米学生会議副委員長）

平素より日米学生会議に格別のご高配を賜り厚く御礼申し上げます。

そして第75回日米学生会議においては、自主研修、本会議など、あらゆる場面においてプログラムの遂行にご支援、ご協力を賜った全ての皆様に深く感謝申し上げます。

第75回日米学生会議は、新型コロナウイルスの影響が小さい数年ぶりの会議でした。

対面のメリットを大いに活かしながら、事前研修やFT、自主研修等を充実したものにすることができました。本会議においても、数々の対面プログラムを執り行い、同じ釜の飯を何度も共にすることで、参加者間の関係性が大いに深まりました。

同窓会や事務局の皆様、各プログラムの開催に関わっていただいた全ての皆様のご好意、ご協力があって初めて、我々第75回日米学生会議に参加した参加者はLife changing experience を享受することができました。

一つ一つのプログラムの準備や、水分、食料の確保などに実行委員として直接携わることで、多くの方々の存在を身をもって感じることができました。

第75回日米学生会議の参加者は、今後も互いの関係を発展させ、日米関係に大きく寄与していきます。

引き続き、第75回日米学生会議、そして今後の日米学生会議を何卒よろしく願いいたします。本当にありがとうございました。



岡田 潤

平素より日米学生会議に格別のご高配を賜り厚く御礼申し上げます。

様々な側面から支えてくださった皆様のおかげで、第75回会議を無事に終了することができました。

フライドポテトをクーポンで安く買わせてくれ！！と、第74回日米学生会議選考小論文で主張したあのお恥ずかしい少年は今…。クーポンを使わずに、なんとそのままの価格でフライドポテトを食べることができる青年へと成長しました！！

ところで私は、特に柔らかめのポテトが好きです。

柔らかめのポテトって、思わぬところに濃い味が詰まっていて、噛んでいて口の中で、うおそっちに曲がるか、みたいなあの癖のある食感と驚きがたまらないんですよね。

日米学生会議も柔らかめのポテトと近い部分があると思います。

非常に柔軟で予測不可能で、偶発的で、だからこそ面白いといいますが、そんな組織なのではないかと考えます。

飛行機での思わぬ出会いによって、進路を考えるきっかけが生まれたり、本会議中のフリータイムでタビオカを買ったことから個々の価値観の衝突が生まれたりなど、日米学生会議には、偶発的事象や予想外の方向転換の作用が数多く存在した印象があります。それもおもしろいほどに。そして、その起点や作用が今の自分の信念を大きく形作っていると言っても過言ではありません。

“未来はいつもおもしろい。” 私が尊敬する人物の座右の銘です。

見かけ上は、ポテトを割引せずにも購入できるようになった！！という変化しかないのかもしれませんが、この座右の銘に、昔よりもほんの少しだけ希望を持つことができるようになったのは、内面的な私の変化なのかもしれません。

日米学生会議においてポテト様には最初から最後までお世話になってばかりです。いつか、ポテトで挟まれたこの分厚い思い出が、確信を持って“Life changing experience”だったとうまそうに言えるように、これからもたくさん歩いてお腹を空かせておきたいと思います。

最後に、日米学生会議を通じて出会えた全ての皆様にご心より御礼申し上げます。



田頭 奈寿菜

平素より格別のご高配を賜り、誠にありがとうございます。89年の歴史がある、学生の学生による学生のための日米学生会議ですが、理念や目的にご賛同いただいた皆様のご支援、ご指導、ご鞭撻があってこそ、会議の継続を実現させていただいております。

昨年、参加者という決められた枠の中で比較的自由に行動ができた1年間の日米学生会議生活を終え、実行委員に就任してからは自分たちでその枠を取り決めることが責務でありました。右も左も分からない状態で会議を一から企画、運営をし始め、第75回日米学生会議の成功と終了を自信をもってお伝えするに至るまでには、数えきれないほどの苦労や葛藤、困難を経験いたしました。初めてのことに戸惑い、失敗することも多くありましたが、その度に皆様にご助言いただき、実行委員仲間と協力しあい、乗り越えて参りました。

2023年の8月2日から8月26日までの約3週間は、国家間の文化の違いはもちろん、各都道府県、各個人間での文化の違いを目の当たりにしました。その中でも学生というなにもにも制限されない状態で衝突を恐れない参加者の姿に、私たちのテーマである「価値の再考」を重ねました。サイトごとの最終発表であるフォーラムでは社会課題や議題について様々な解決策の提案をし、「未来への思索」ができたのではないかと考えます。

人に意見を伝えることを恐れていた3年前の私に誇りをもって「日米学生会議への参加は正解だった。人生を大きく動かす経験であった。新しい家族のような存在ができる場であった。」と、このあとがきをもってご報告いたします。

最後になりますが、第75回日米学生会議に関わっていただいた全ての皆様のお力添えに心から感謝申し上げます。今後とも日米学生会議を何卒よろしく願いたします。



玉眞 優里

平素より日米学生会議へのご賛助ならびにご厚情を賜り、心より感謝申し上げます。

この第75回日米学生会議をご支援いただいた皆さま、いつでも我々実行委員の強い味方でいてくれた事務局の方々、多くの人に支えられ、無事に実りある会議を完遂できました。第71回会議以来の日本対面開催になった第75回会議は苦難の連続でした。これまでの常識が通用しなくなった社会と同じように日米学生会議も転換期であった気がします。

受験者に任意提出資料を課し参加者の個性を大切に選考、緊張する世界情勢を鑑み必然性を感じた台湾自主研修、例年よりもはるかに長い10日間で行った京都サイト、10年ぶりの開催となる長崎サイト、商社や法律事務所など社会とのつながりを深く感じた東京サイト、ここには書ききれないくらいの挑戦を行ってきました。その挑戦の中には多くの苦難や反対もありましたが、食欲に学ぶ学生を信じて支えてくださった皆さまのおかげで、私たちは日まぐるしく変化する社会から何にもとらわれない学生という立場で、多様なことを吸収できました。同時に一生関わり続けたいと思う素晴らしい仲間とも出会えました。

恥ずかしながらこれまで、議論することも英語で話すことも真剣に社会について考えることもしたことのなかった私を暖かく迎え入れてくださり、ありがとうございます。この二年間の日米学生会議を通しての学びは、私の今後の人生にとって核となるものです。

末筆にはなりますが、改めて第75回日米学生会議をご支援いただき誠にありがとうございました。来年、当会議は90周年を迎えます。日まぐるしく変化し続け不安定なこの世の中で、対話の力を信じ、学び続ける学生が集う場として、日米学生会議が続いていくことを切に願います。今後とも日米学生会議へのお力添えをよろしくお願いいたします。



中坊 倫太郎

平素より日米学生会議に格別のご支援を賜り、厚く御礼申し上げます。

JASC75は四年ぶりの日本開催を無事完遂することができました。これは多くの方々のご支援やご応援なしでは成し遂げることができなかったと 생각합니다。心より感謝申し上げます。

私にとってJASC75はコロナ禍による社会の停滞と断裂を強く意識づけられた一年間でした。日本での対面開催が中断されてしまった四年間でJASCも同じように停滞し、先輩との交流の機会も失われたことで世代間の交流、そして多くの伝統が途切れてしまいました。しかしこの機会はJASCにとって必要なものだった、私はそう思います。多くの交流と伝統が途切れてしまったことにより、私たち実行委員は0ベースでJASCについて考えることができました。従来のJASCの目的やプログラムの形態もより批判的に考え直すことができました。この機会はJASCを永続的なものにするために不可欠なステップであったと確信しています。

これからも日米学生会議が日米間の友情の架け橋になり、そしてインド太平洋地域の平和の礎になることを応援していきたいと思っております。今後とも何卒よろしくご厚意申し上げます。



山崎 万由佳

平素より日米学生会議に格別のご支援を賜り、厚く御礼申し上げます。

第75回会議はコロナ後、久しい日本対面開催ということで、実行委員一同やる気に満ち溢れておりました。同時に、前回の対面開催から時間が経っており、何から手を付けるべきか途方に暮れる思いであったことを記憶しています。しかし、当会議アラムナイ、また、ご支援いただいている皆様からの力強いサポートをいただきながら、少しづつ闇雲ながらも描いた会議を具現化していくことができました。

前述のように、コロナ後初の日本側対面開催ということで、過去の日本開催会議の伝統を引き継ぎつつも、新たなご縁や取り組みを積極的に組み込んだということが、第75回の特徴になったのではないかと存じます。新たなプログラムと新鮮な学び、そして、大切に引き継がれるご縁と色褪せない体験、今会議の参加者は多種多様な経験をひと夏の間味わうことができました。

会議の運営という表舞台こそ学生が演じておりますが、その実現はこれをお読みになっているお一人おひとりのお力なしには叶わなかったことを、昨夏の会議を振り返り、改めて感じております。

日米学生会議の長い歴史を共に作り上げていただいている皆様、そして、今回その流れに加わってくださった皆様、二十歳そこそこの若造共が掲げる理想を尊重し、惜しみないご協力を賜り大変感謝申し上げます。

第75回を数える会議は幕を閉じましたが、この先脈々と続いていく日米学生会議の歴史は、未来を築いていく若い世代の唯一無二の経験の場として引き続き進化を遂げていくことと信じております。

引き続きどうぞよろしく願いいたします。



吉住 保希

平素より日米学生会議に格別のご高配を賜り厚く御礼申し上げます。

また、第75回日米学生会議に際し、京都・長崎・東京サイトの皆様、そして事務局及び同窓会の皆様の温かいご支援、ご助言を賜ったことに心より感謝いたします。

改めて振り返っても、日米学生会議の価値は「Life Changing Experience」を参加者一人ひとりに提供できる点であったと実感します。その代表例が3週間にわたる外国人との共同生活、英語でのコミュニケーションになるでしょうし、他にも、初めて目にする分野のプログラムや議論における価値観の衝突が挙げられます。各々がこうした困難に直面し、時に仲間と共に乗り越えてきたからこそ、連帯意識が生まれ、深い交流が図られてきたのだと思います。

しかしながら、そのためには莫大なリソースが必要です。71名が3週間に渡り寝食をともにするための場所やサイト間の移動、食料の手配は並大抵のことではありません。そして、質の高いプログラムの実現において、関係各所の皆様のご協力が不可欠であることはいうまでもありません。

皆様のお力添えによって、第75回日米学生会議が成功裡に終わりました。
日米学生会議は日米のリーダー人材を結ぶ重要な組紐であり続けます。

引き続き、今後とも何卒よろしく願いいたします。本当にありがとうございました。



実行委員の歩み

2022.8

- ・ JASC75EC発足 (8/25)
- ・ 74JECからの引継ぎ



2022.9

- ・ EC合宿 (開催サイト決定)



2022.10

- ・ サイト再議



2022.11

- ・ 74,75EC合同関西業務
- ・ パンフレット作成



2022.12

- ・ EC合宿 (サイト業務、選考の方針確定)
- ・ 長崎出張
- ・ 大学説明会開始
- ・ 第一次選考応募開始 (12/26~2/6)



2023.2

- ・ EC合宿
(一次選考採点)



2023.4

- ・ 長崎出張
- ・ 食事会



2023.1

- ・ 京都出張



2023.3

- ・ 第二次選考 (3/9~3/13)
- ・ 秋田選考合宿
- ・ 長崎出張
- ・ 受験者合格通知



2023.5

- ・ 春合宿
- ・ 京都出張

2023.6

- ・長崎業務
(プレスリリース)
- ・安全保障研修
- ・政策銀行訪問
- ・台湾自主研修



2023.7

- ・EC最終合宿
- ・直前合宿



2023.8

- ・本会議



2023.9

- ・福島自主研修
- ・報告書作成



2023.10

- ・報告会準備
- ・報告書作成



2023.12

- ・ 報告会
- ・ 報告書作成



2023.11

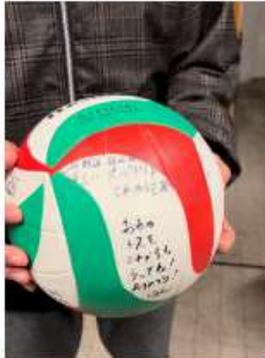
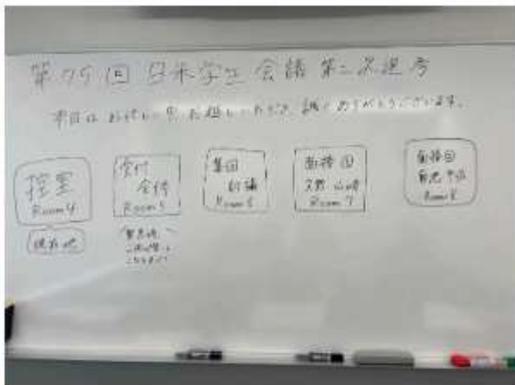
- ・ 75, 76EC合同関西業務
- ・ 報告書作成



第八章 実行委員のあとがき



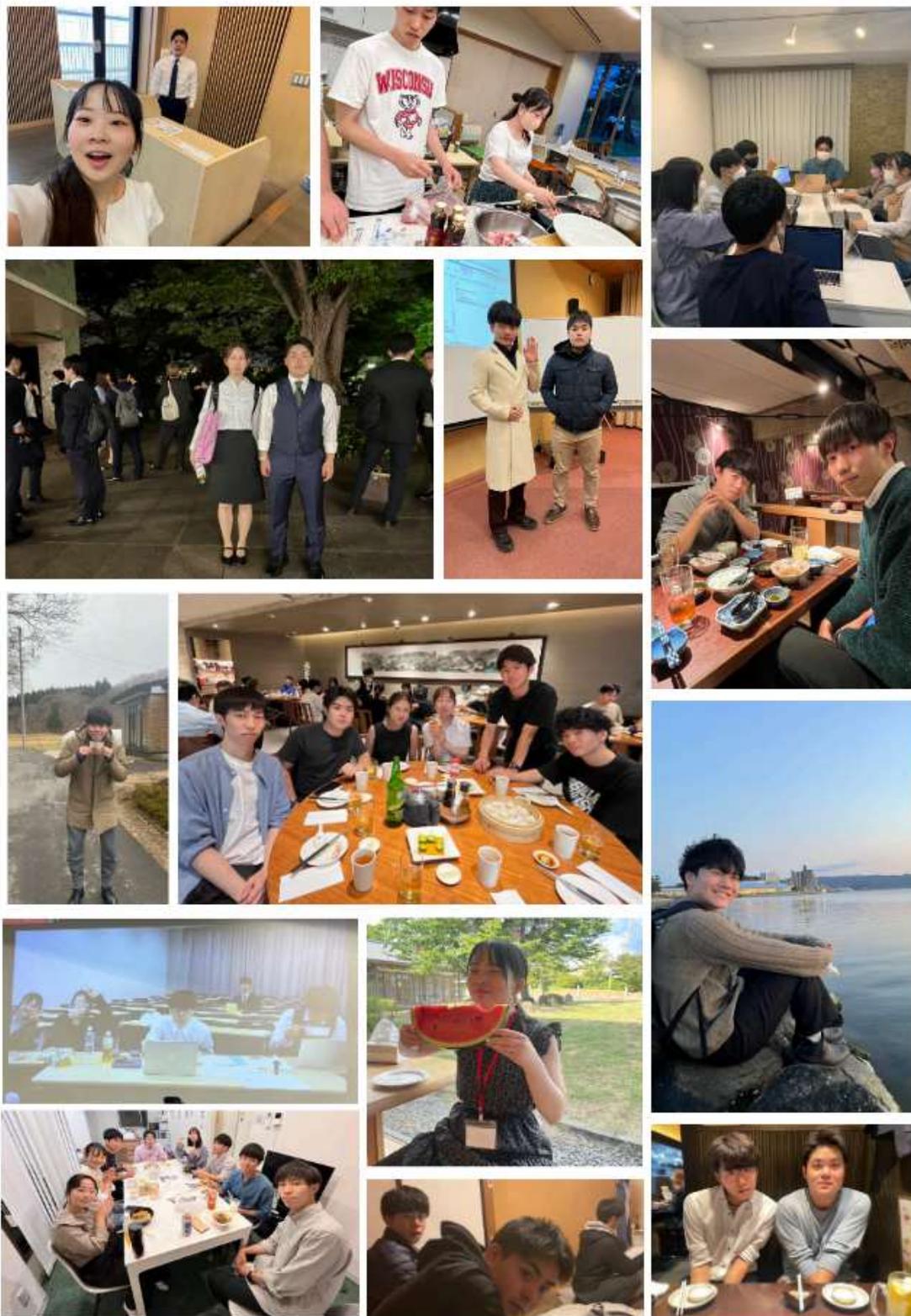
第八章 実行委員のあとがき



第八章 実行委員のあとがき



第八章 実行委員のあとがき



第75回日米学生会議 日本側報告書

発行月 2024年3月
編集者 田頭 奈寿菜、玉眞 優里
発行 日米学生会議実行委員会 報告書編集委員会
表紙 岡田 潤

【日米学生会議事務局】

〒160-0004
東京都新宿区四谷1-6-2 コモレ四谷
一般財団法人国際教育振興会日米学生会議事務局
グローバルスタディスクエア3階
☎: 090-1140-4857